

# 女神降参大秘选 Season.7

エロ絵 100 枚まとめました





# INDEX.1

- 005p 601枚 : ガールフレンド(仮) 甘利燈  
008p 602枚 : ソードアート・オンライン フィリア  
011p 603枚 : ゲート テュカ・ルナ・マルソー  
014p 604枚 : ブレイブリーセカンド イデア・リー  
017p 605枚 : グランブルーファンタジー アステール  
020p 606枚 : LORD of VERMILION エリゴス  
023p 607枚 : ツインビー パステル  
026p 608枚 : パストラ 覚醒ソティス  
029p 609枚 : ピキニ・ウォリアーズ メイジ  
032p 610枚 : ショウバイロック シアン  
039p 611枚 : ブレイブルー ココノエ  
042p 612枚 : えとたま シマ  
045p 613枚 : 下セカ アンナ・錦ノ宮  
048p 614枚 : バトルスピリッツ烈火魂 群青早雲  
051p 615枚 : 干物妹!うまるちゃん 海老名菜々  
054p 616枚 : がっこうぐらし! 佐倉 慈  
057p 617枚 : 戦姫絶唱シンフォギアGX 立花 響  
060p 618枚 : 城下町のダンテライオン 櫻田茜  
063p 619枚 : 問題児シリーズ 春日部耀  
066p 620枚 : がっこうぐらし! 恵飛須沢胡桃  
069p 621枚 : コードオブジョーカー 天帝インドラ  
072p 622枚 : スプラトゥーン ホタル  
075p 623枚 : ヴァルキリードライブ レディー・J  
078p 624枚 : グランブルーファンタジー ジェシカ  
081p 625枚 : ワールドトリガー 小南桐絵  
084p 626枚 : 艦これ リベッチオ  
087p 627枚 : 鉄道むすめ 桜沢みなの  
090p 628枚 : キャリア赤城 リングドリーム  
093p 629枚 : テレマス アナスタシア  
096p 630枚 : テレマス 美城常務  
099p 631枚 : 化物語 戦場ヶ原ひたぎ  
102p 632枚 : モンスター娘のいる日常 スー  
105p 633枚 : インフィニットストラトス 更識馨  
108p 634枚 : リングドリーム 星空こがね

Pick★Up



# INDEX.2

111p 635枚 : デジモンワールド ネクストオーダー シキ

114p 636枚 : 戦国†恋姫 服部小波正成

117p 637枚 : Classroom☆Crisis 瀬良ミズキ

Pick☆Up 120p 638枚 : ストZERO3 レインボーミカ

Pick☆Up 126p 639枚 : 俺妹 赤城瀬菜

132p 640枚 : ファイアーエムブレムIF サクラ

Pick☆Up 135p 641枚 : 白銀の意思 アルジェヴォルン リクル・ヒカル

141p 642枚 : G○プリンセスプリキュア キュアスカーレット

144p 643枚 : ワールドトリガー 雨取千佳

147p 644枚 : ドラクエ8 セシカ

Pick☆Up 150p 645枚 : ドラクエ5 デボラ

Pick☆Up 156p 646枚 : 心が叫びたがってるんだ 成瀬順

162p 647枚 : ブレードアークス パイロン

165p 648枚 : トリアージX 狭霧友子

168p 649枚 : 朧村正 百姫

171p 650枚 : ソウルワーカー ハル エステイア

174p 651枚 : 東京ザナドゥ 玖我山 璃音

Pick☆Up 177p 652枚 : ウチ姫 マリナ・ソフィア

183p 653枚 : グランブルーファンタジー ユエル

186p 654枚 : モンスターハンターストーリーズ 女主人公

189p 655枚 : 神羅万象予ヨコクシオ・パンドラ

192p 656枚 : 艦隊これくしょん 摩耶改二

195p 657枚 : モンスターストライク 水澤葵

198p 658枚 : 白猫プロジェクト ミレイユ

201p 659枚 : 城下町のダンデライオン 佐藤花

204p 660枚 : ヴァルキリードライブマーメイド シャルロット

207p 661枚 : スターオーシャン5 フィオーレ・ブルネリ

Pick☆Up 210p 662枚 : 戦国武将姫MURAMASA 母里太兵衛

216p 663枚 : スーパーロボット大戦X-Ω シヤツ子

219p 664枚 : ガールフレンド(仮) 皆口英里

222p 665枚 : インフィニットストラトス 更識椿無

225p 666枚 : 艦隊これくしょん 潮

228p 667枚 : スーパーリアル麻雀 蘭堂芹香先生

231p 668枚 : ハツカドール 2号ちゃん



# INDEX.3

- 234p 669枚 : Tokyo 7th シスターズ 天堂寺ムスビ  
237p 670枚 : ヴァルキリードライブ 時雨霞  
240p 671枚 : ヤマノススメ 小野塚ひかり  
243p 672枚 : グランブルーファンタジー アニラ  
246p 673枚 : 落第騎士の英雄譚 ステラ・ヴァーミリオン  
249p 674枚 : ストリートファイターZERO3 神月かりん  
**Pick☆Up** 252p 675枚 : パストラ 覚醒ハク  
258p 676枚 : 庶民サンプル 天空橋愛佳  
261p 677枚 : 対魔導学園35試験小隊 西園寺うさぎ  
264p 678枚 : 戦国武将姫MURAMASA 伊達成実  
267p 679枚 : ハッカドール 3号  
270p 680枚 : メタロット9 ミオ  
273p 681枚 : ブレイブリーセカンド マグノリア  
276p 682枚 : 艦隊これくしょん 浜風  
279p 683枚 : ヴァルキリードライブマーメイド 風巳とりの  
282p 684枚 : クローザーズ ユリ=アスマ  
285p 685枚 : パストラ 神罰の審理者・メタトロン  
288p 686枚 : ティバインゲート ヴィヴィアン  
291p 687枚 : やさしい教師の躰けかた 先生  
294p 688枚 : P502es ジェネ  
297p 689枚 : モンタワーズ2 ティアナ  
300p 690枚 : 魔神少女2 ジズー  
303p 691枚 : 緋弾のアリアシキ  
306p 692枚 : ティ・ジ・キャラット ラビアンローズ  
**Pick☆Up** 309p 693枚 : アイス 葦月伊織  
315p 694枚 : でたなツインビー メローラ姫  
318p 695枚 : Vガンダム シャクティカリン  
321p 696枚 : リオパラ リオ  
324p 697枚 : ぐるぐる召喚マジカルキア ヴィオレ  
327p 698枚 : グロリアユニオン エリーシャ  
330p 699枚 : デシマス 佐城雪美  
333p 700枚 : 東京ザナドゥ 郁島空  
336p あんがき

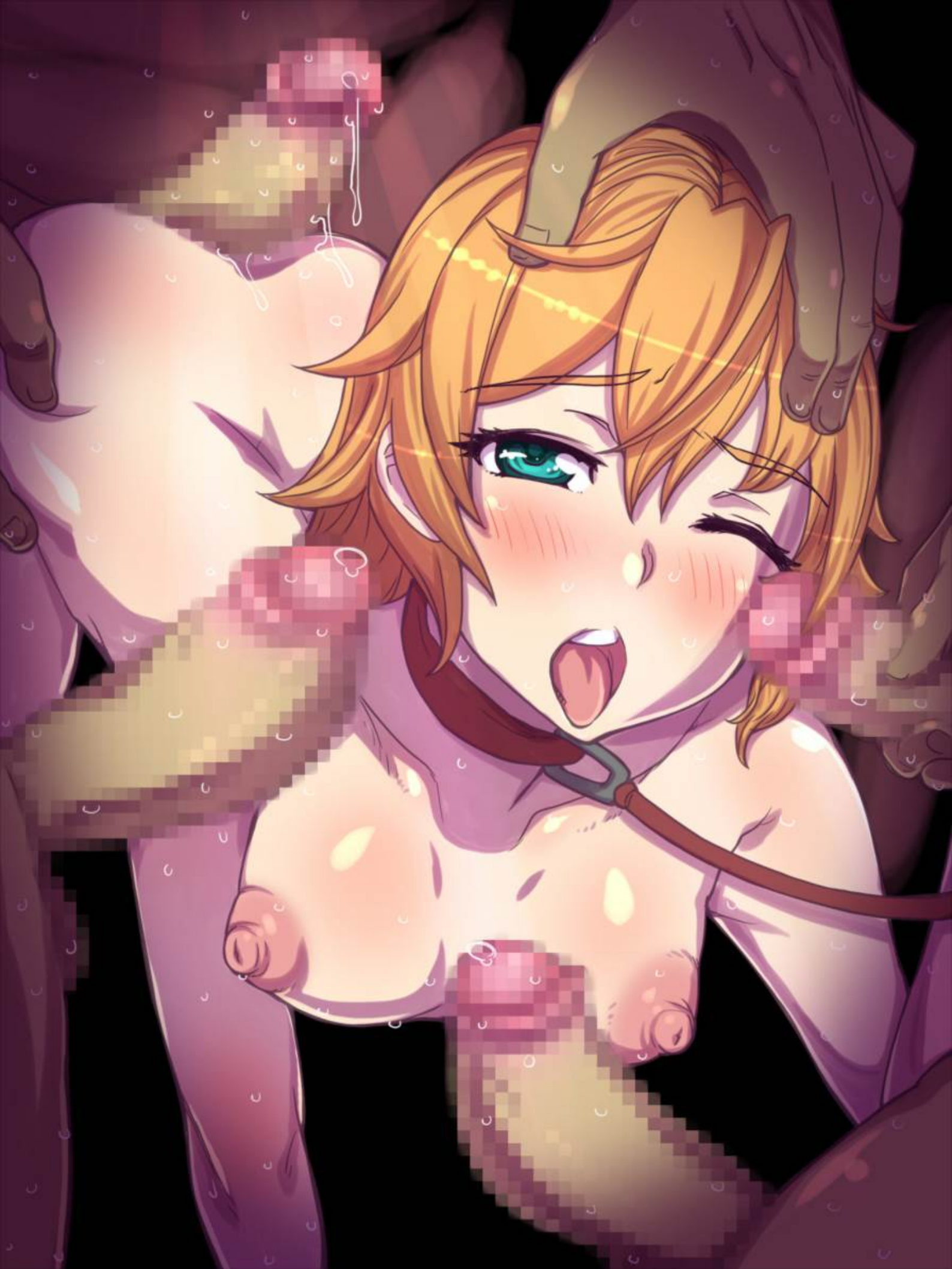




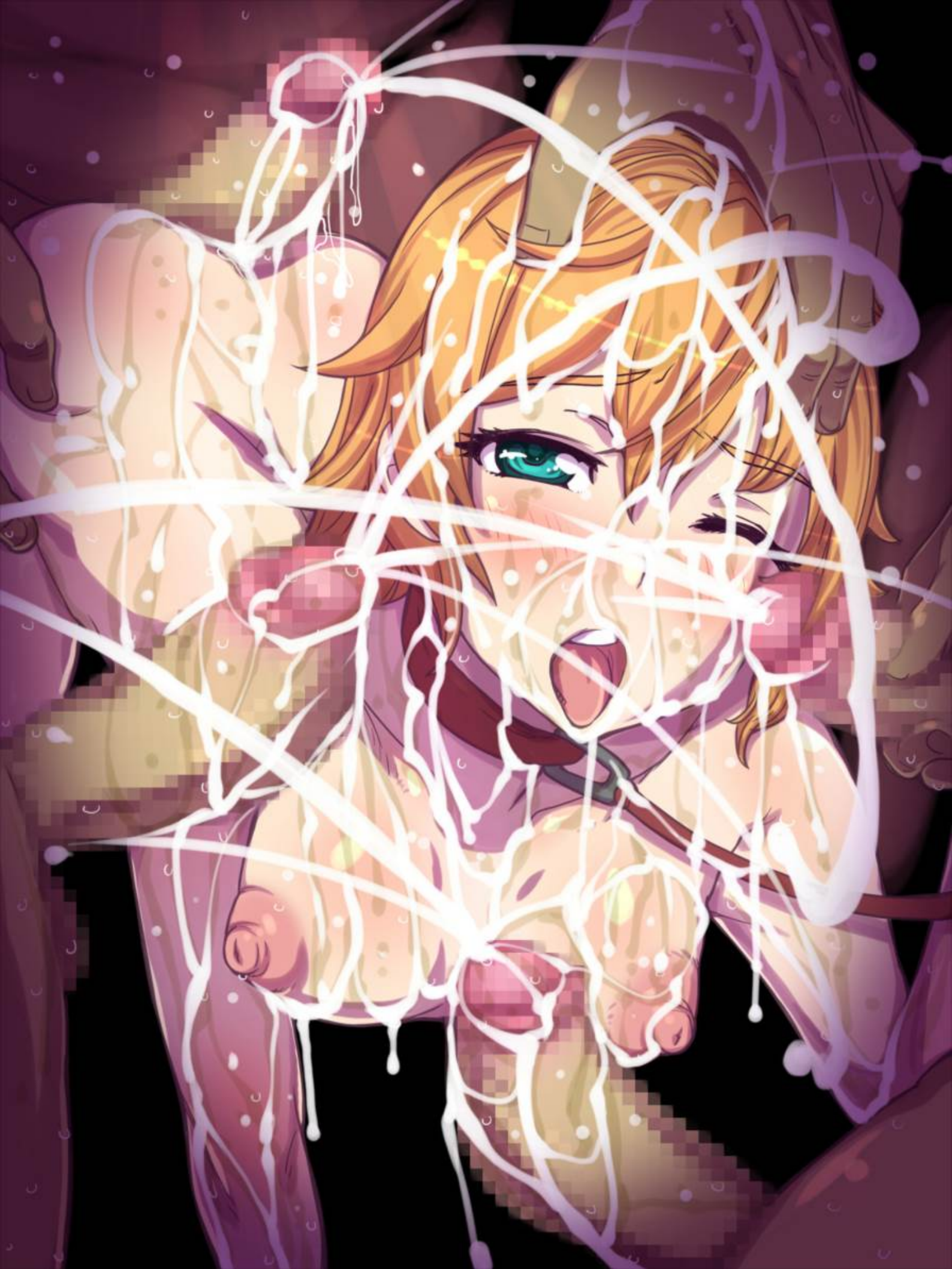












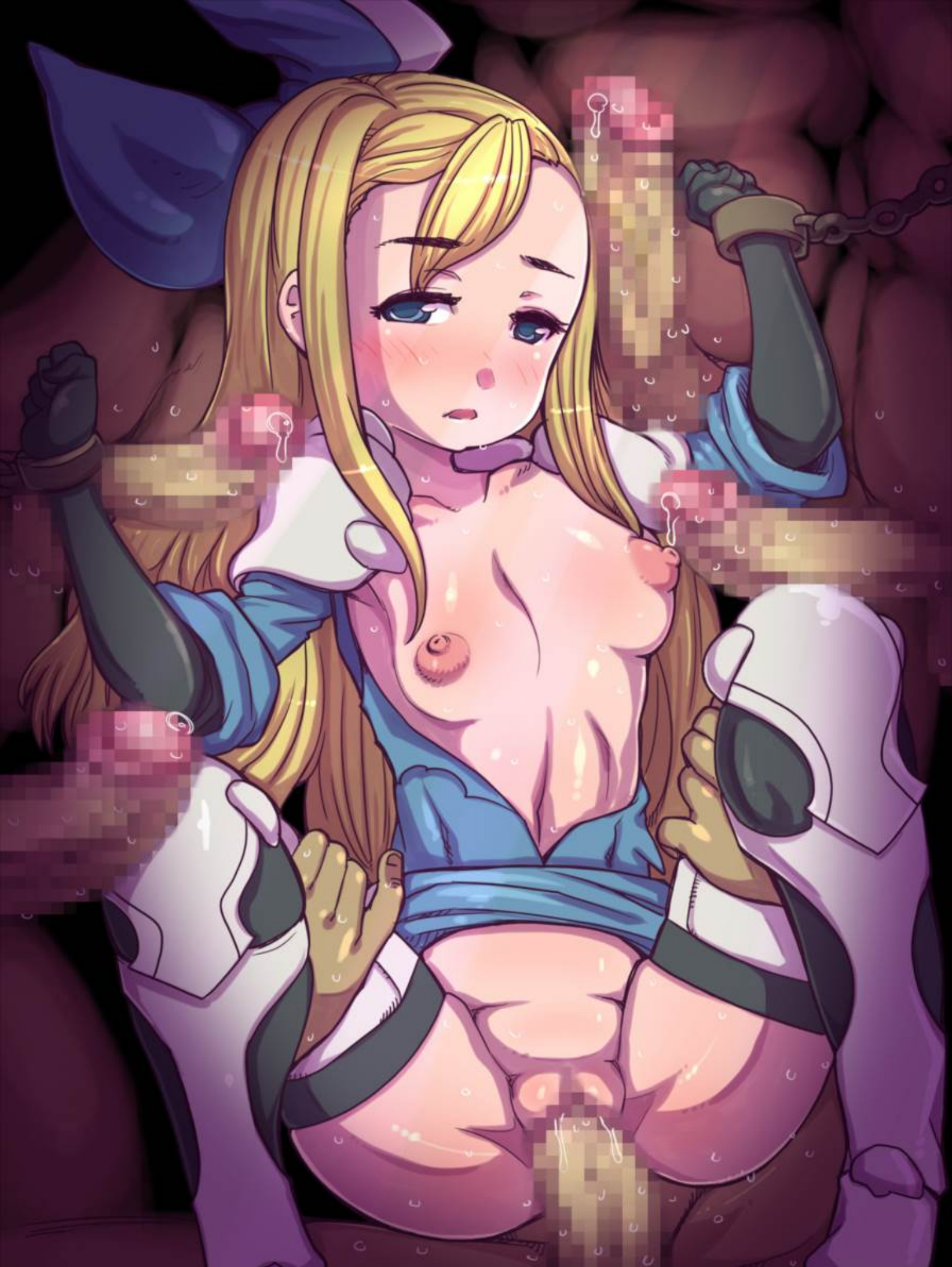




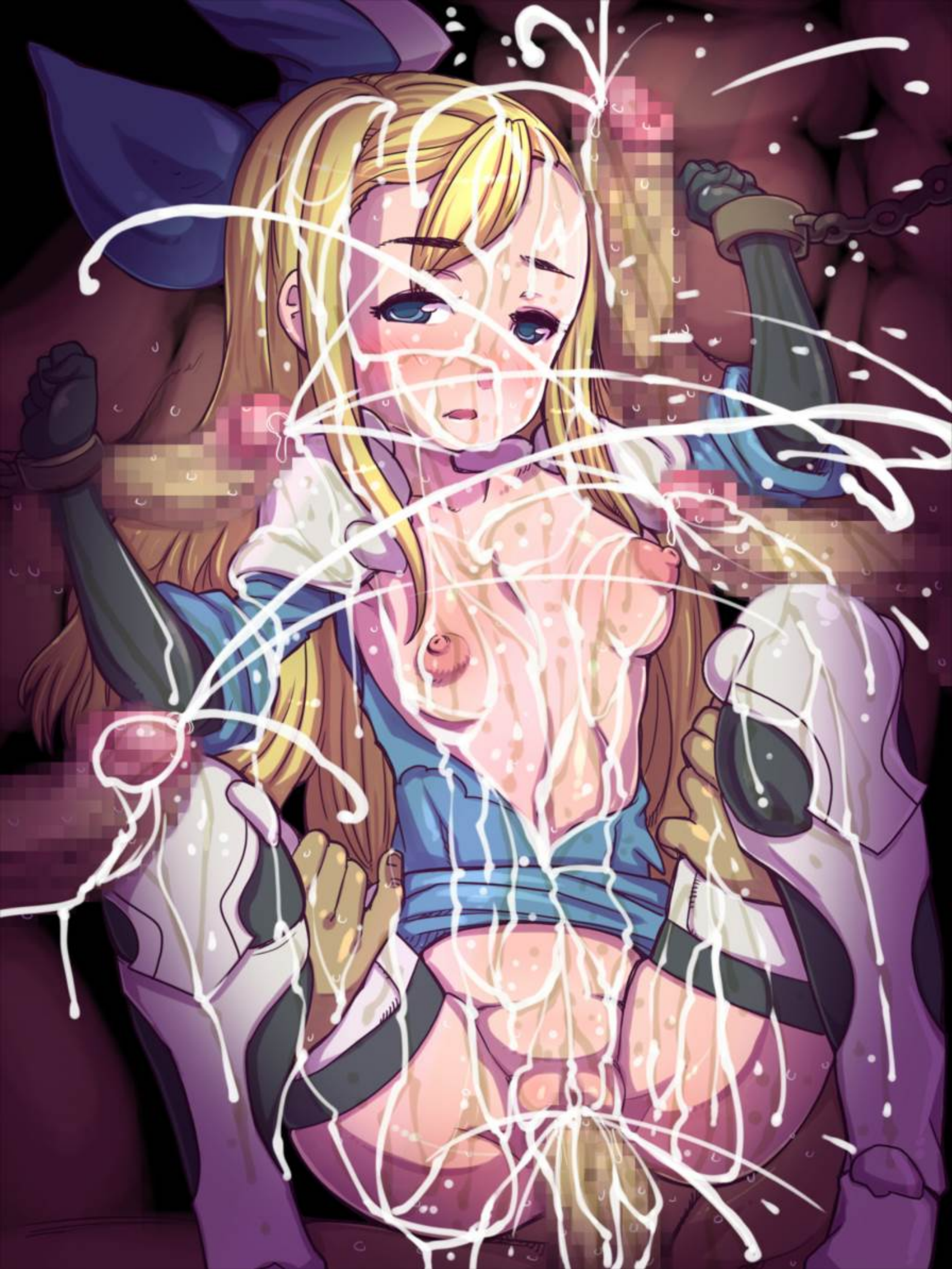




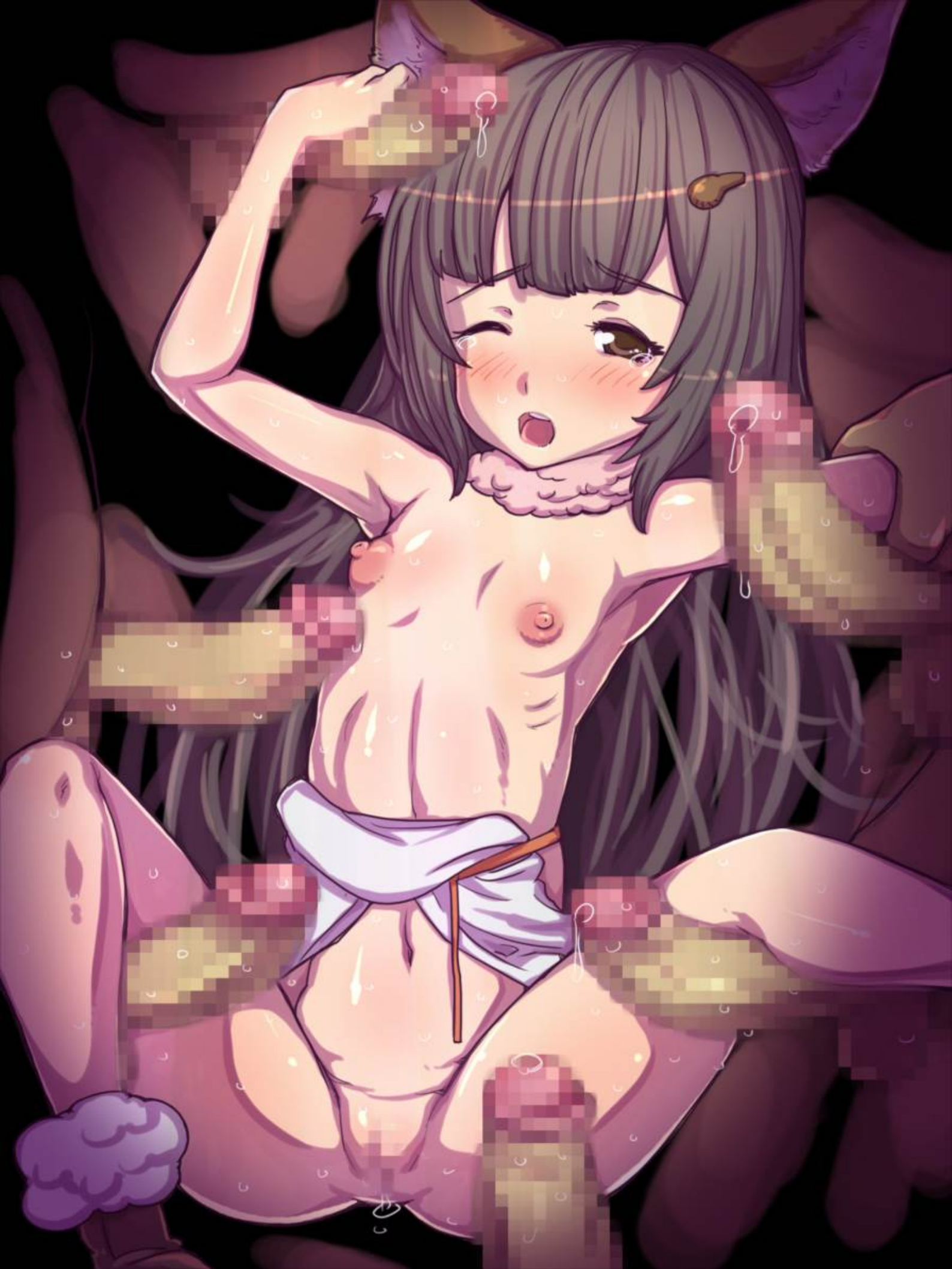








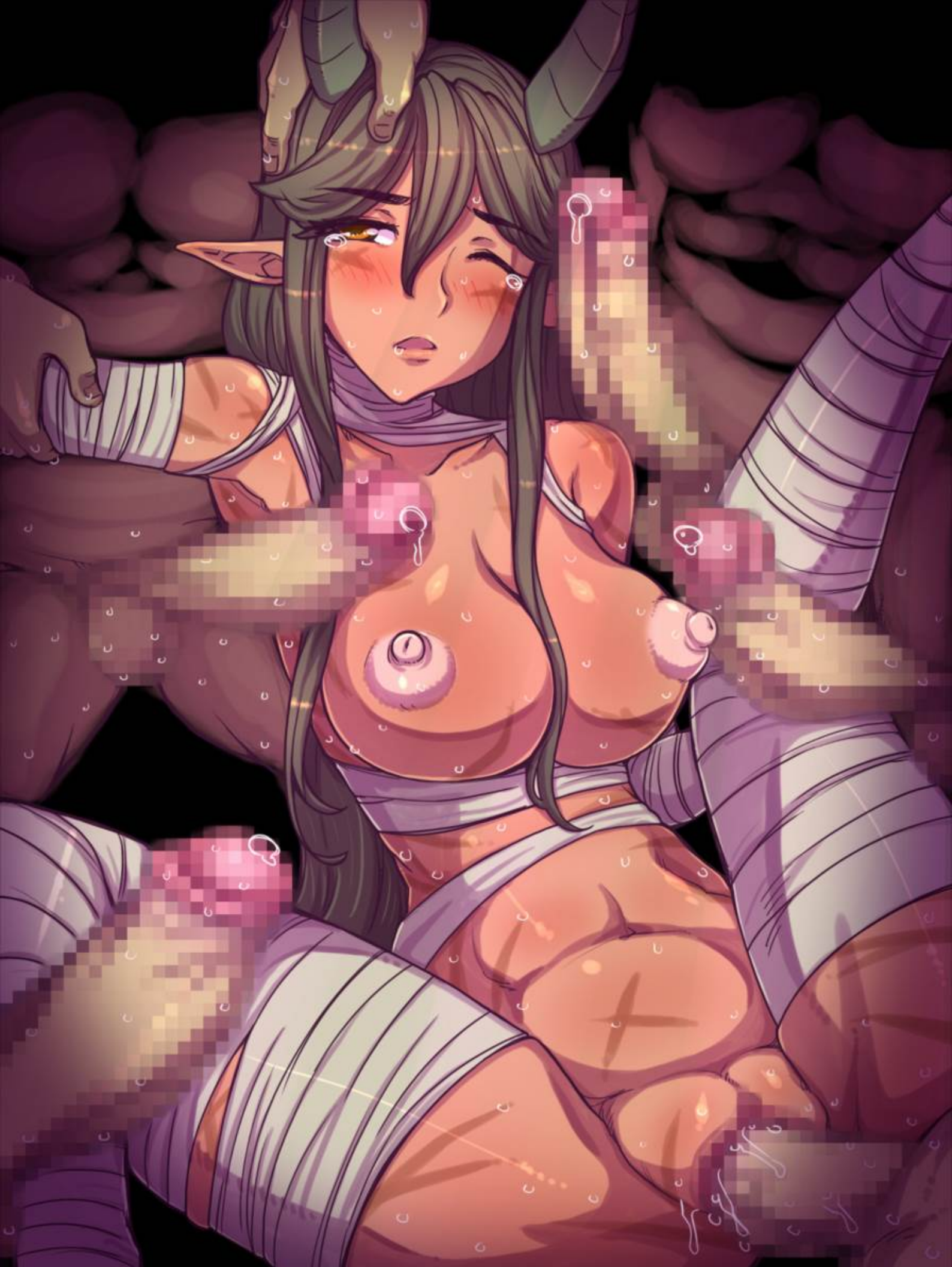




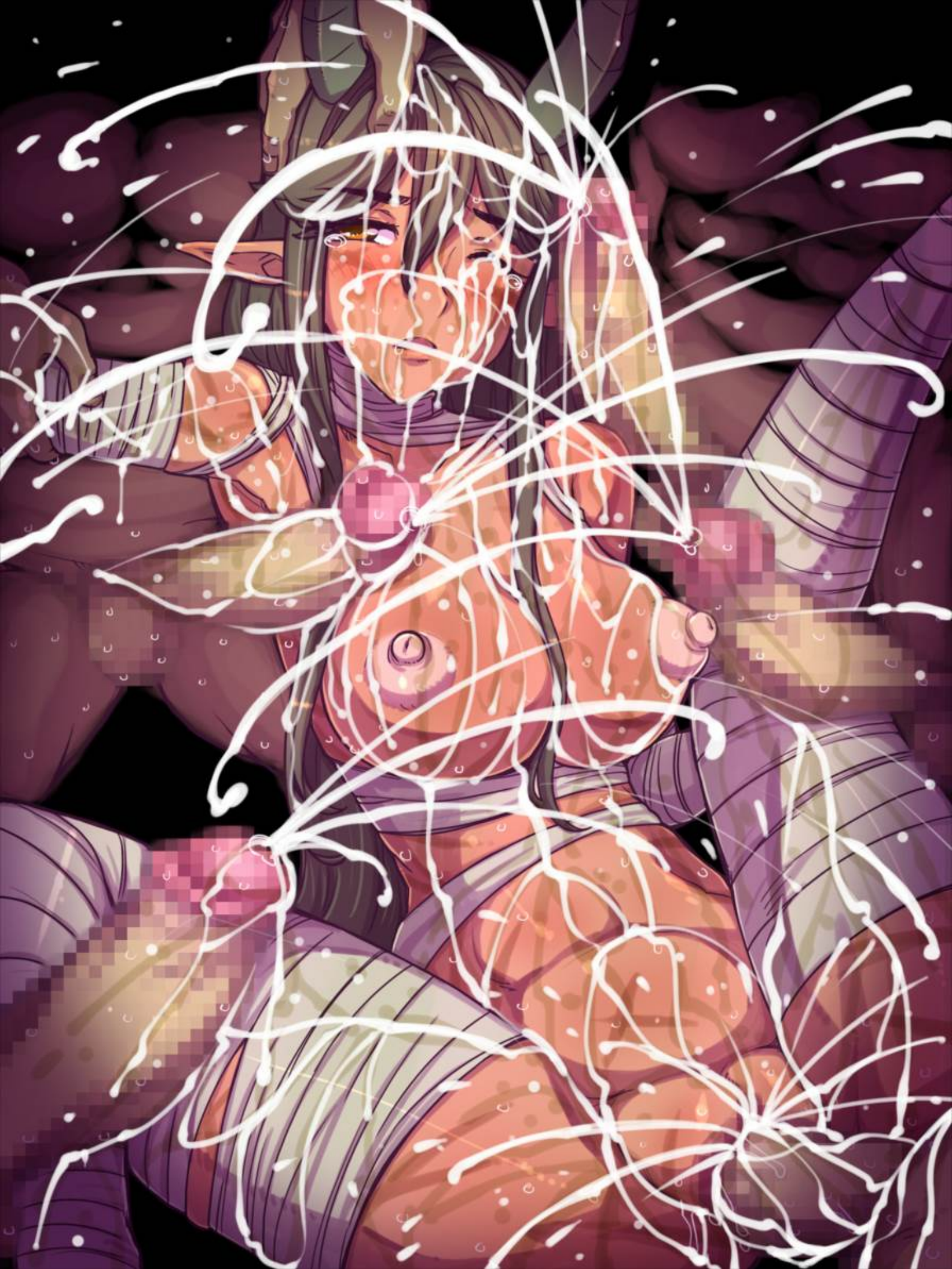
























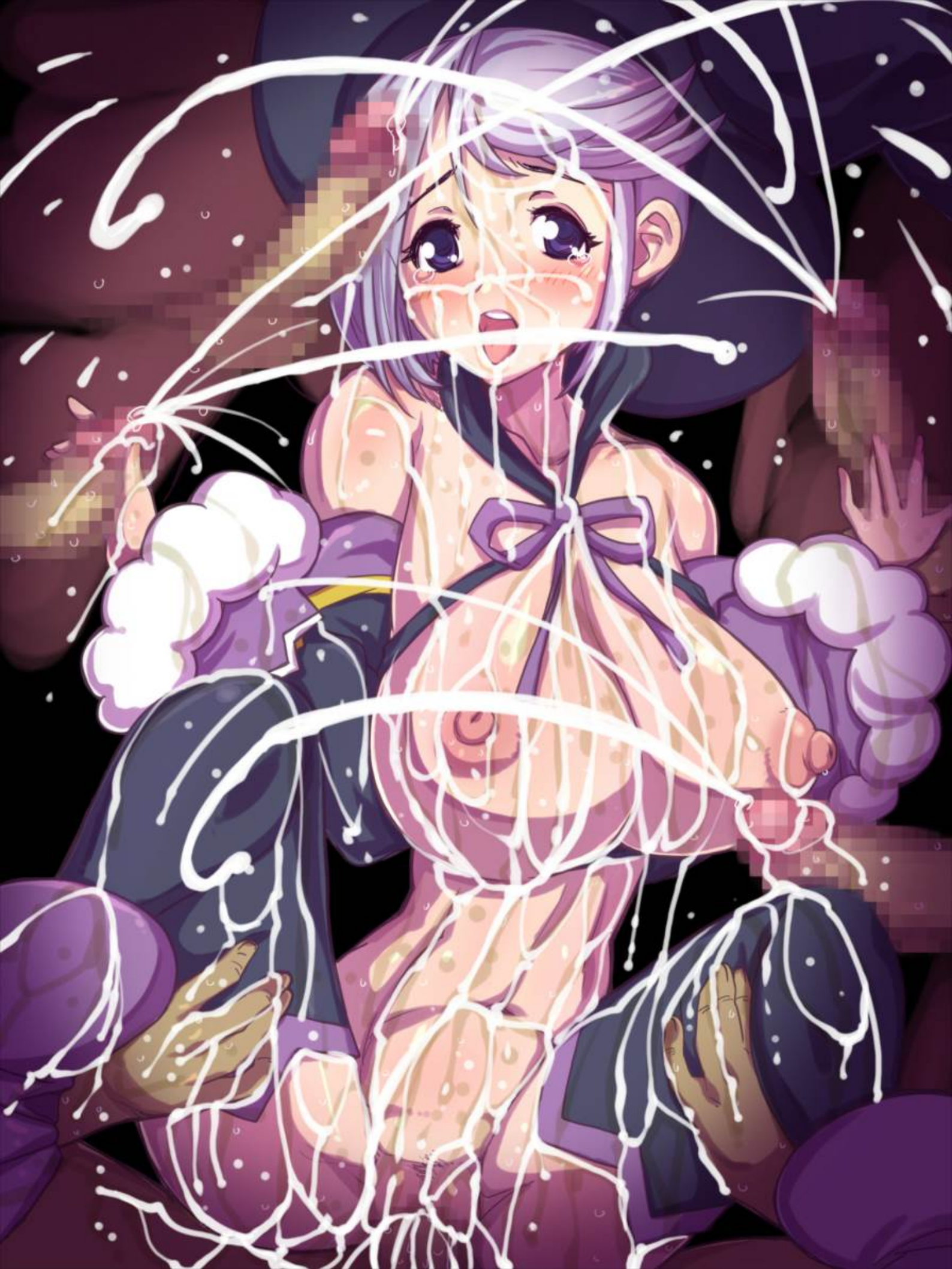


















# PUSSY CAT

「へえー……ここが、モアの言っていた会社…大きい……」

とある芸能事務所の前に一人立っていたシアンは、ビルを見上げていた。彼女のバントメンバーである一人が、この事務所を紹介してくれたらしい。何でも、素晴らしい営業活動が出来るとかなんとか……。

「でも、それならそれで皆で行けばいいのに…私一人でかあ……」

半ば無理矢理という形ではあるが、ここへ行くよう勧められたシアンは、慌々事務所の応接間へと向かった。

「やあ、キミがシアンちゃんだね……話しはモアちゃんから聞いているよ」

応接間に現れたのは、どうやら営業を担当している部長のようである。他愛もない話をしながら、シアンはバントのアピールをしていく。しかし……いろんな人に見られているかのような視線を、シアンは感じていた。

「ふんふん……いい声をしているねえ…さぞかし……ふふふ…」

目の前にいる部長と名乗る男も、シアンの身体をじっくりと見つめている。その視線に、シアンは少し寒気を感じていたのであった。

「いいねえ……シアン君の歌声という物を、私は聞いてみたくなったよ」

部長は、眼鏡をクイッと上げ呟く。シアンはそれは、ただの社交辞令だと思っていた。しかし、それはこれから始まる凄惨な行為への『合図』だったのだ。

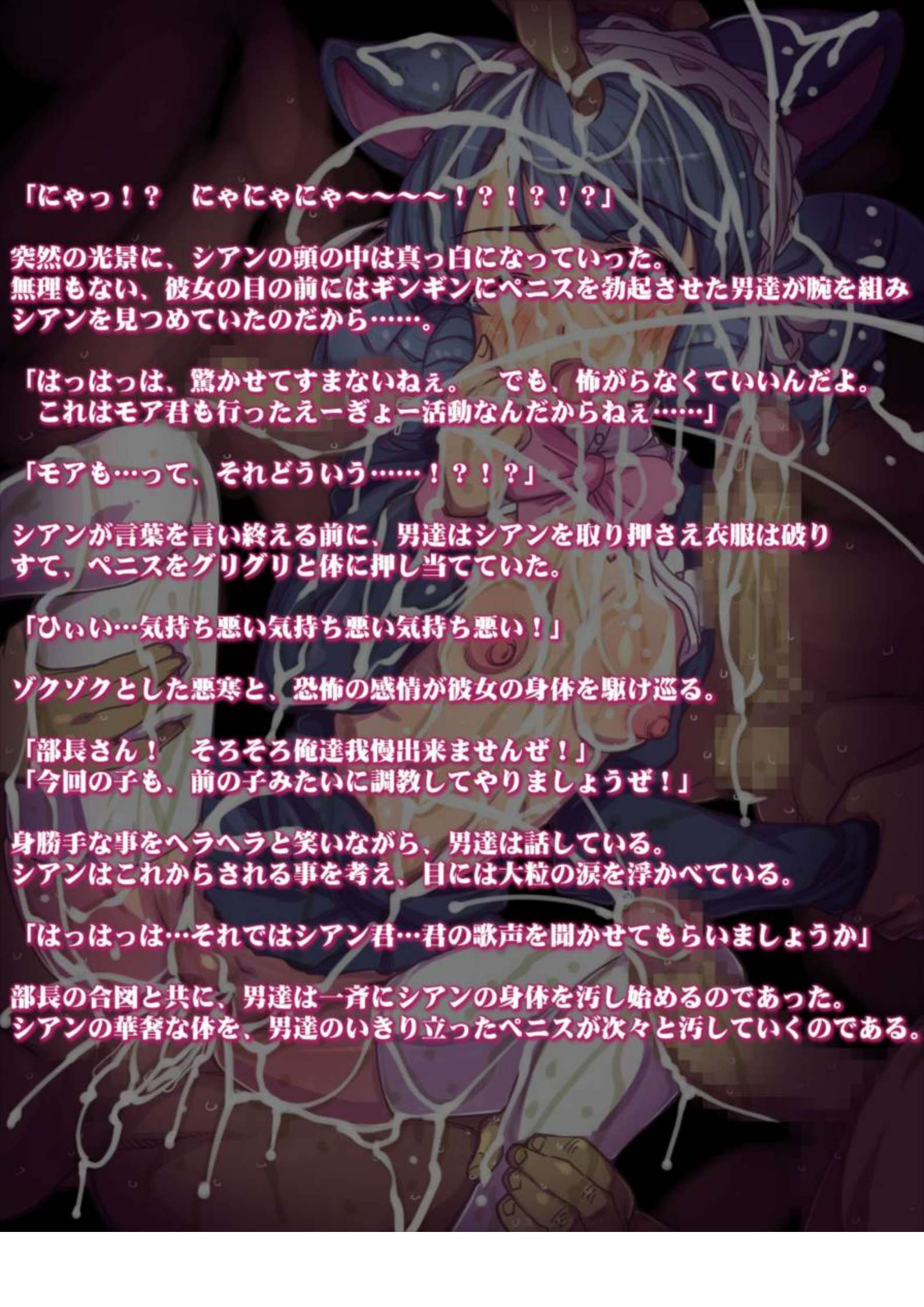
「さあ皆さん！ これから彼女の歌声がどんな物かを確かめましょう！」

部長が言い放つと同時に、全裸の男達が物陰から乱入してきたのである。









「にやっ!? にやにやにや~~~~!?!?!?」

突然の光景に、シアンの中は真っ白になっていった。  
無理もない、彼女の目の前にはギンギンにペニスを勃起させた男達が腕を組み  
シアンを見つめていたのだから……。

「はっはっは、驚かせてすまないねえ。でも、怖がらなくていいんだよ。  
これはモア君も行ったえーぎょー活動なんだからねえ……」

「モアも……って、それどういう……!?!?」

シアンが言葉を言い終える前に、男達はシアンを取り押さえ衣服は破り  
すて、ペニスをグリグリと体に押し当てていた。

「ひいひい…気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い！」

ゾクゾクとした悪寒と、恐怖の感情が彼女の身体を駆け巡る。

「部長さん！ そろそろ俺達我慢出来ませんぜ！」

「今回の子も、前の子みたいに調教してやりましょうぜ！」

身勝手な事をヘラヘラと笑いながら、男達は話している。  
シアンはこれからされる事を考え、目には大粒の涙を浮かべている。

「はっはっは…それではシアン君…君の歌声を聞かせてもらいましょうか」

部長の合図と共に、男達は一斉にシアンの身体を汚し始めるのであった。  
シアンの華奢な体を、男達のいきり立ったペニスが次々と汚していくのである。



「ひぎい…！！！！ いたいいたいいたい…やめっ…んんん！」

彼女の身体には男達のペニスは大きすぎたのか、一突き、また一突きと彼女を貫く度にシアンは涙を流し、歯を食いしばるのであった。

「ううっ！ 前の子に比べて…かなりキツキツだが…それが…いいい！」

暴力的に膨らんだペニスを、シアンの幼い膣は必死に包み込んでいた。彼女の荒んだ息遣いが、男達の顔にあたる。

「かはっ…やめ…ひぎい…んんっ！！！」

男はシアンを両手で抱え、まるでオナホールを扱うかのように、シアンの身体を犯し続けていき……彼女の中に、己の欲望をぶちまけたのであった。

「ああああ…！！！ うそ…だめえ！！！！！」

シアンの悲痛な叫びとは裏腹に、彼女の膣からはだらだらと精液が流れていく。シアンの顔はもう涙でグショグショになっていた。

「その顔！ いいねえ…君も私の見込んだ通りの逸材だよ！！！」

そんなシアンを見て、部長の顔は光り輝いていたのだ。

「君は、もしかしたらモア君並に…いや、それ以上になれる可能性もある！  
しっかり、ここで教育しなければならない……いいか、野郎ども！」

シアンは部長の身勝手な言葉など頭の中には入っていなかった。  
今はただ一刻も早く……この悪夢が終わることを祈っていたのである。



「にゃん…！ にゃん…！ にゃあん…♪」

あれからシアンは、休む間もなく犯され続けていた。  
最初は男達のペニスをぎゅうぎゅうに締め付けていた膣も、今ではすんなりと受け入れ、がっちりと掴んで離さないまでになっていた。

「はあはあ…うっ！ やっぱり、私の見込み通り…君も最高の逸材だ！」

シアンを抱きかかえ腰を振っていた部長は、笑顔でシアンを褒め称えていた。

「にゃあん……皆のお蔭で、私の魅力に気付けたにゃあん……♪」

体中を精液で塗りつくされたシアンは、笑顔で答えた。  
手にはペニスを握りしめ、男達の精液を飲み零さないように口に含んでいる。

「皆のミルク…もっとお…ほしいにゃあ……♪」

腰を振りながら男達に懇願する彼女の姿は、最初に姿を見せた時から想像できないほどに、淫らに映っていた。  
膣にペニスを押し付け、彼女の身体は大きくビクンと揺れる。

「ふふふ……今度はモア君とのデュエットなんてのもいいかもしれないね…」

パン！パン！とシアンの腰を打ち付け、部長はシアンの中に精液を放出する。  
彼女の身体は真っ白に汚され尽くしていた。

口からはゴポゴポと精液は泡を立て、  
膣からは休みなく精液は溢れかえっていた。  
しかし、シアンの顔は恍惚と光り輝いていて、もっと男達のペニスを要求する。  
彼女は自らの膣を指で広げ、まるでおねだりを求める猫のように男達を誘惑していたのだ。

「はあああああ～♪ もっとお……私を汚してほしいにゃん♪」

END

SS by クスフィアス

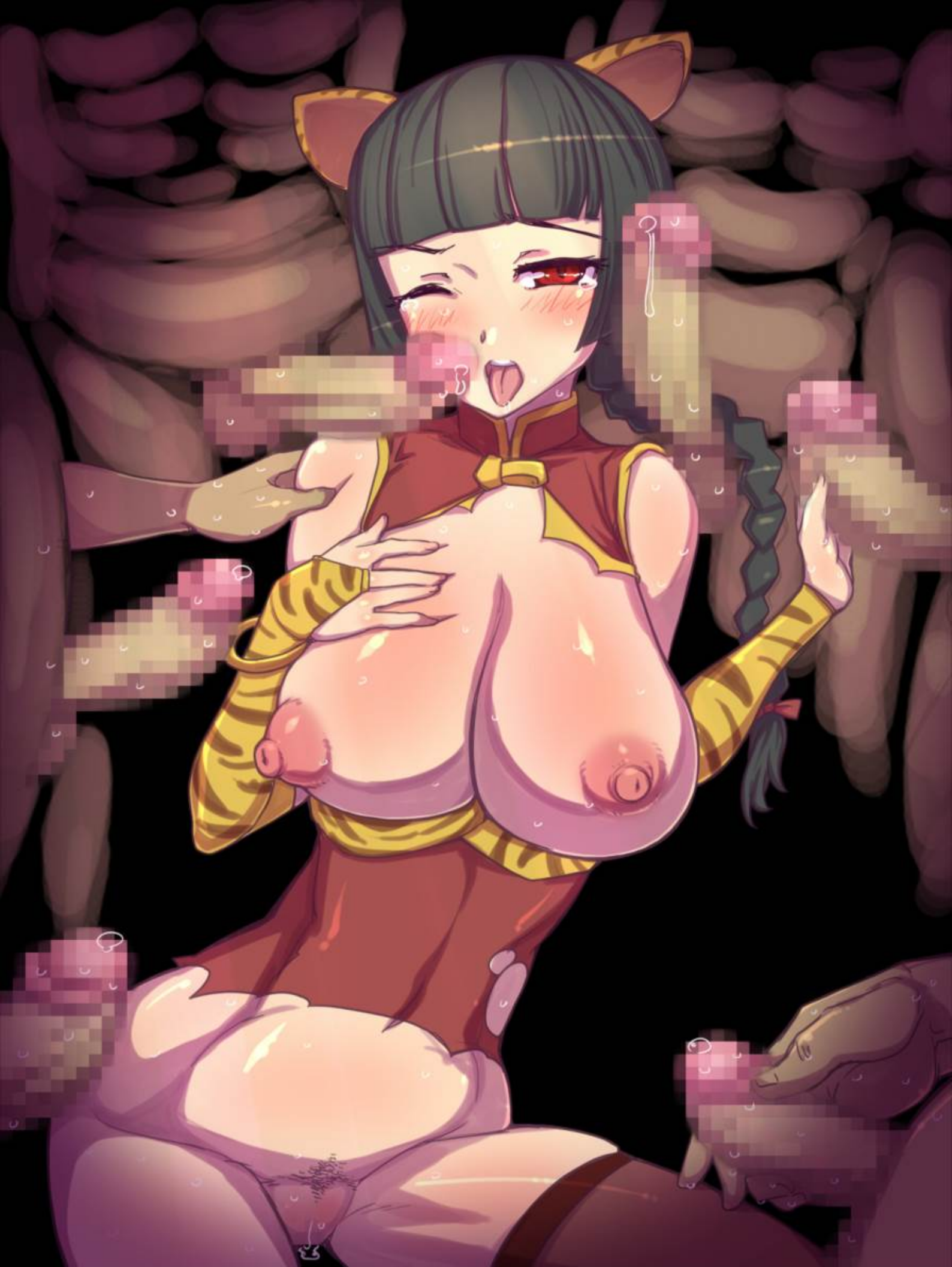




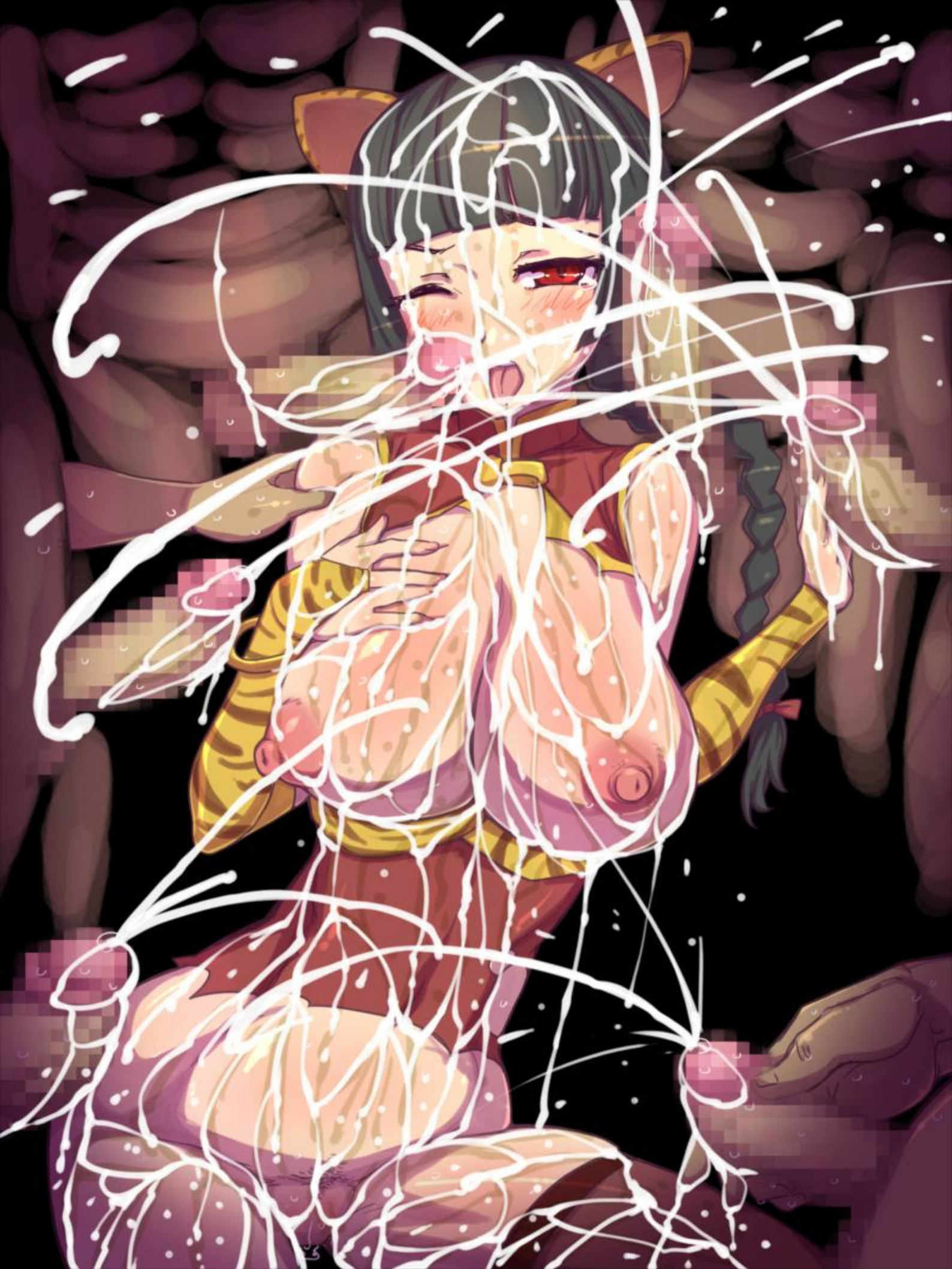








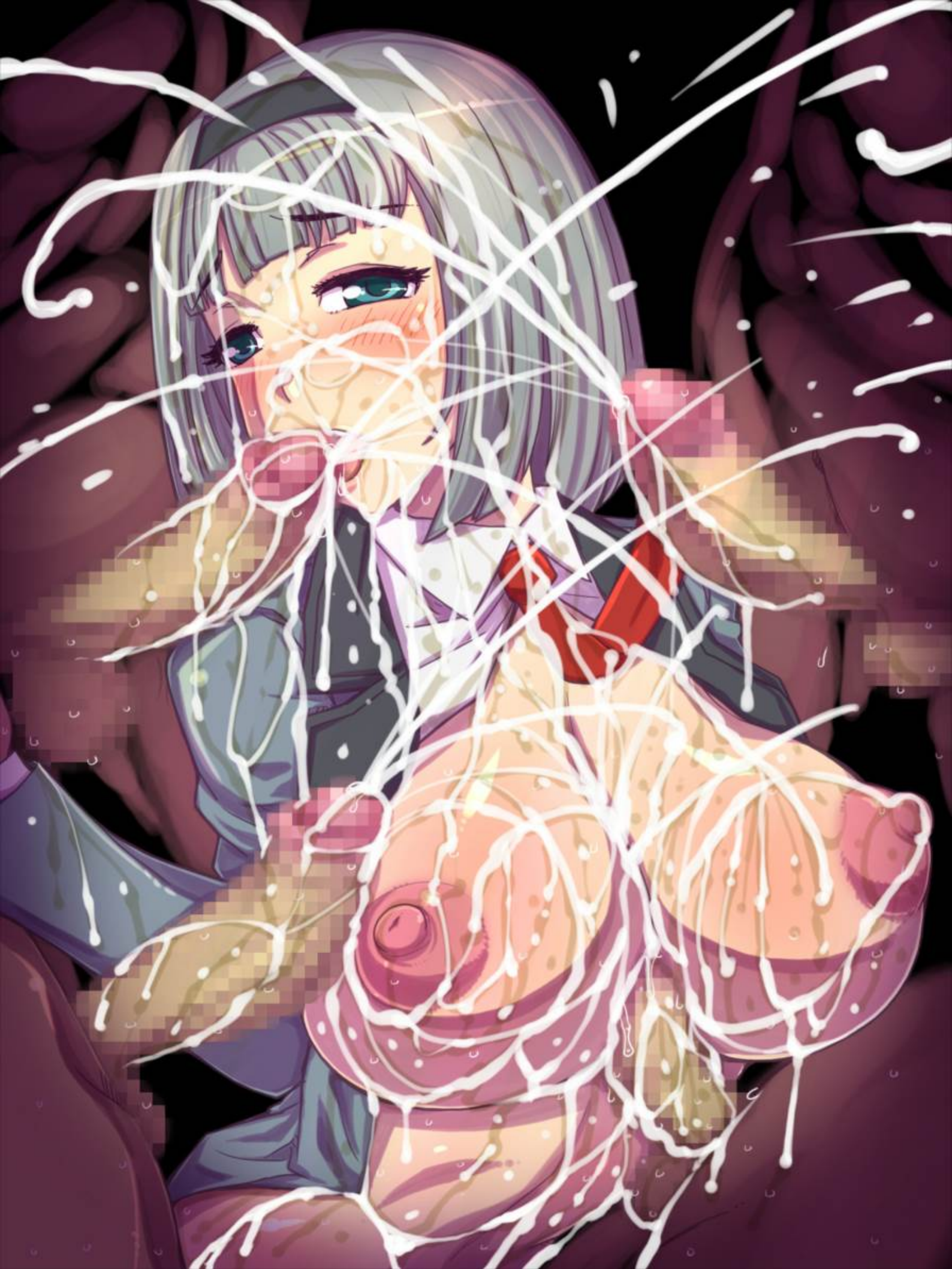
















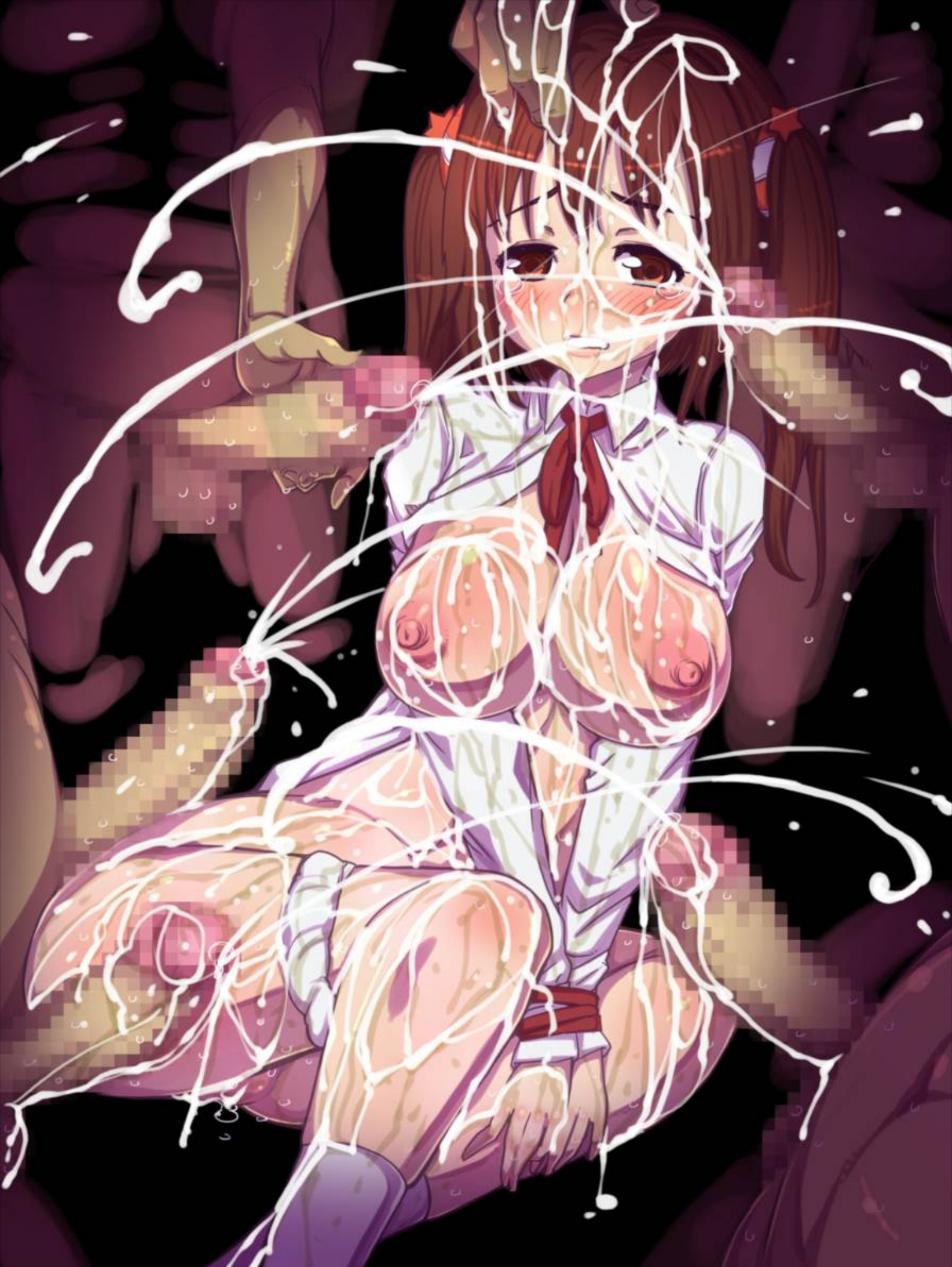




















































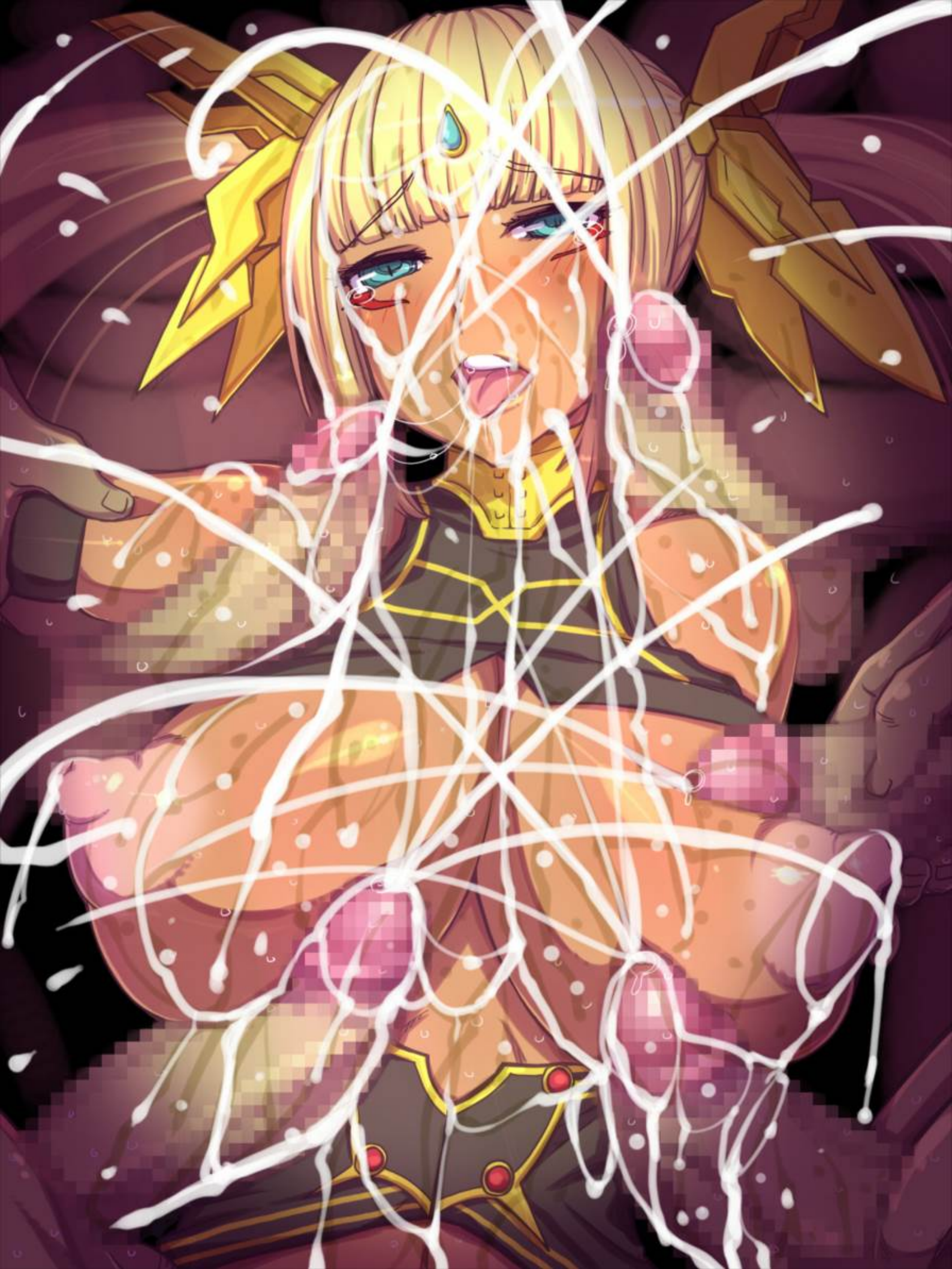








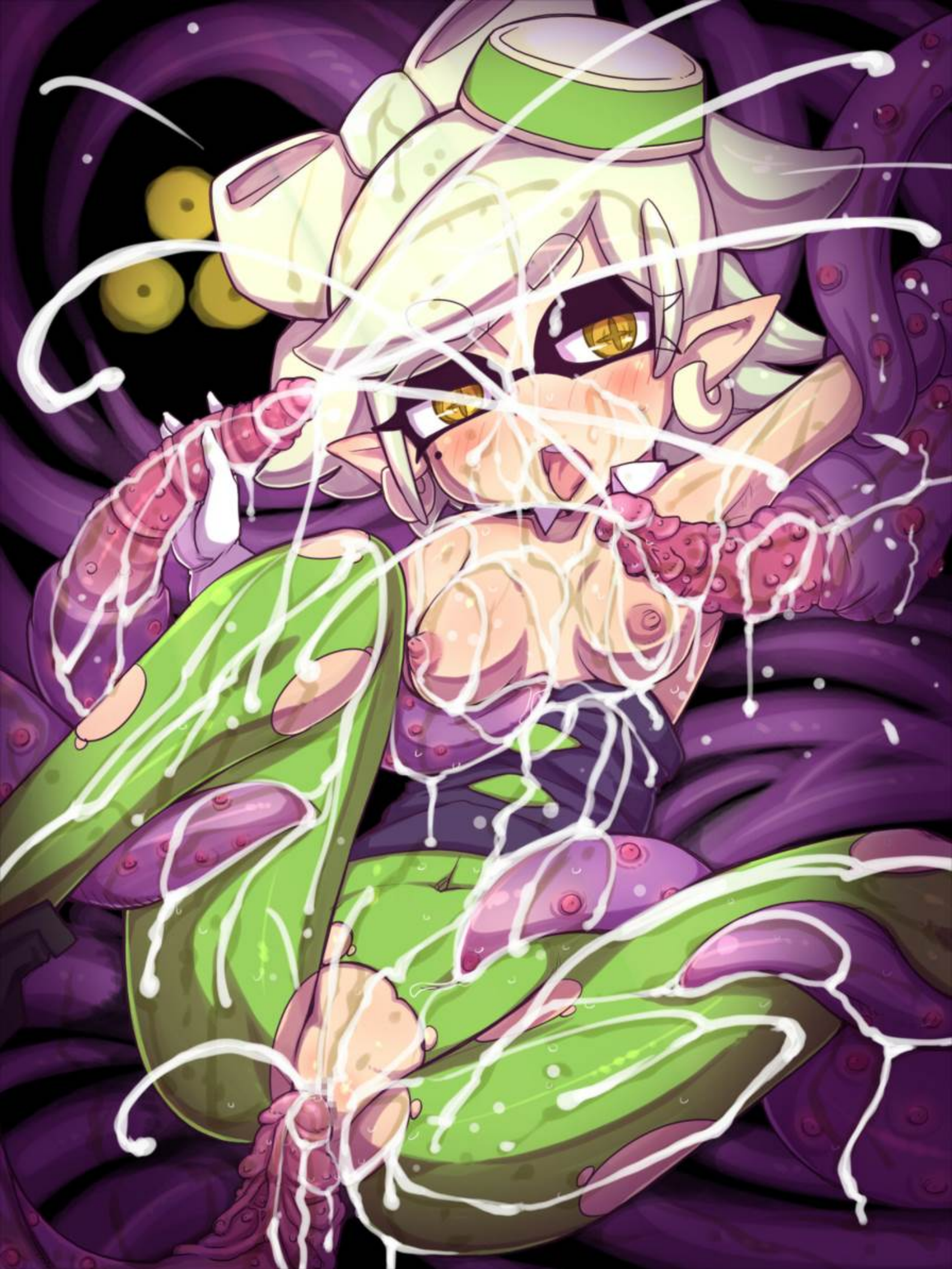




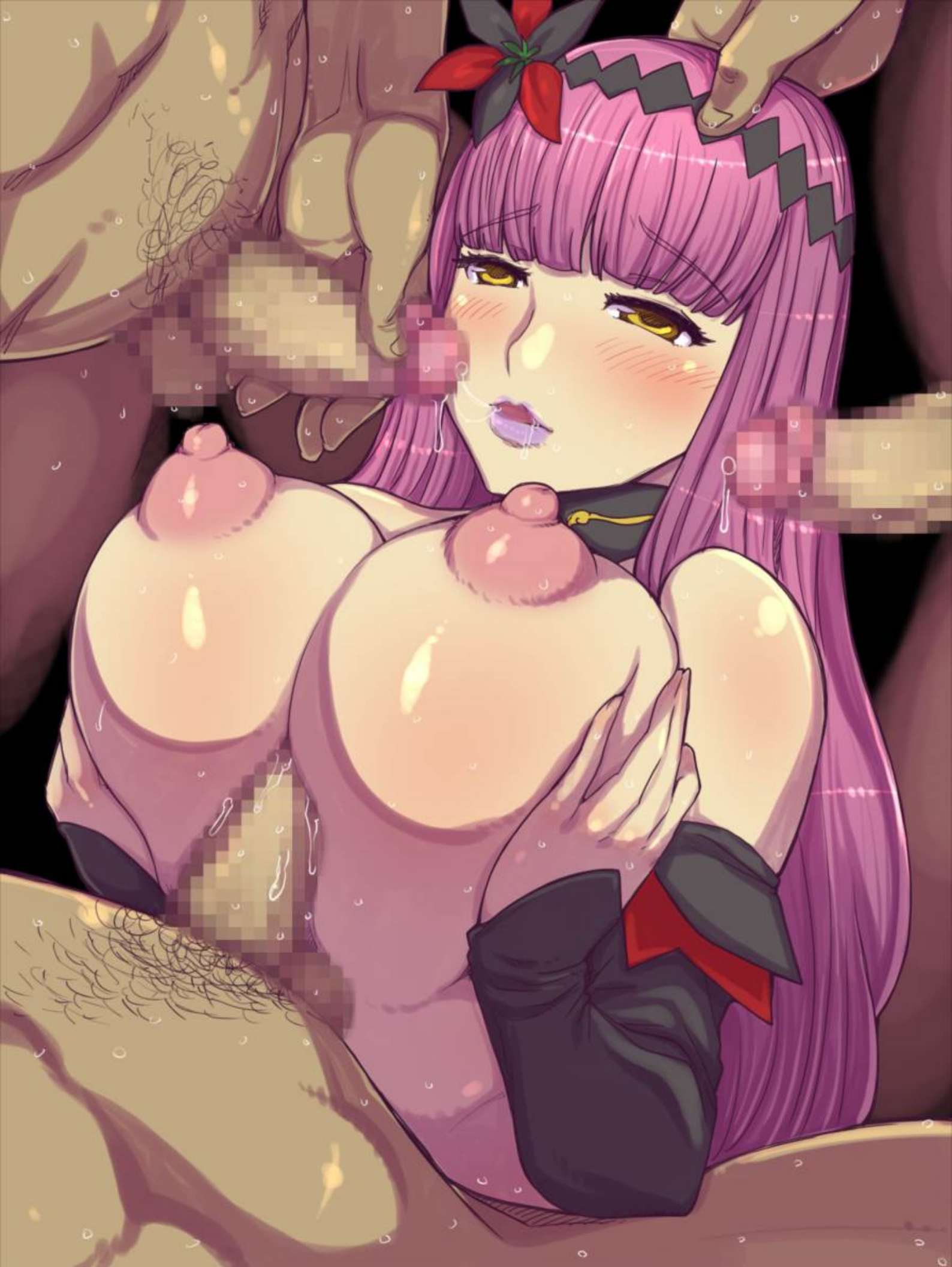




















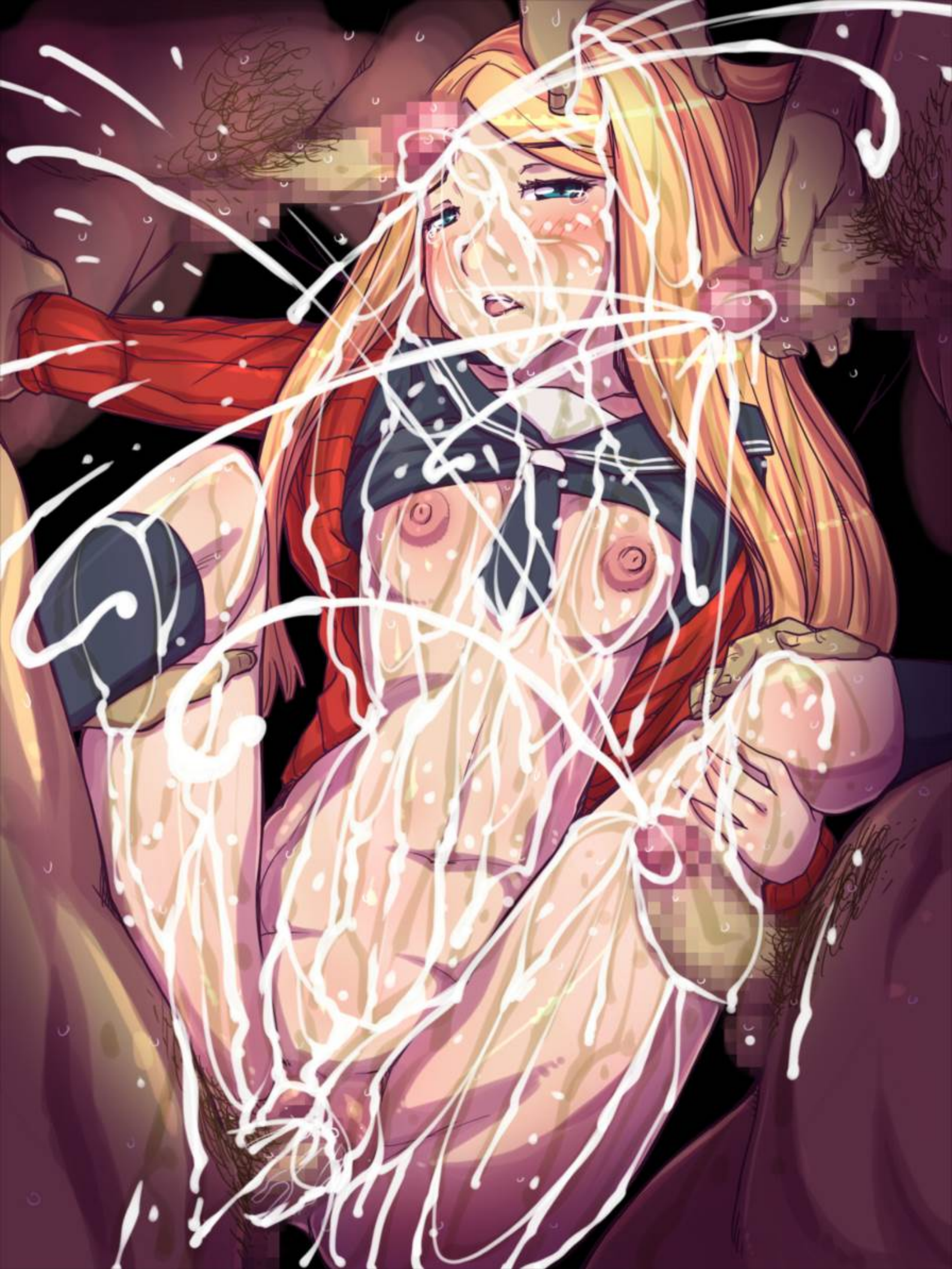








































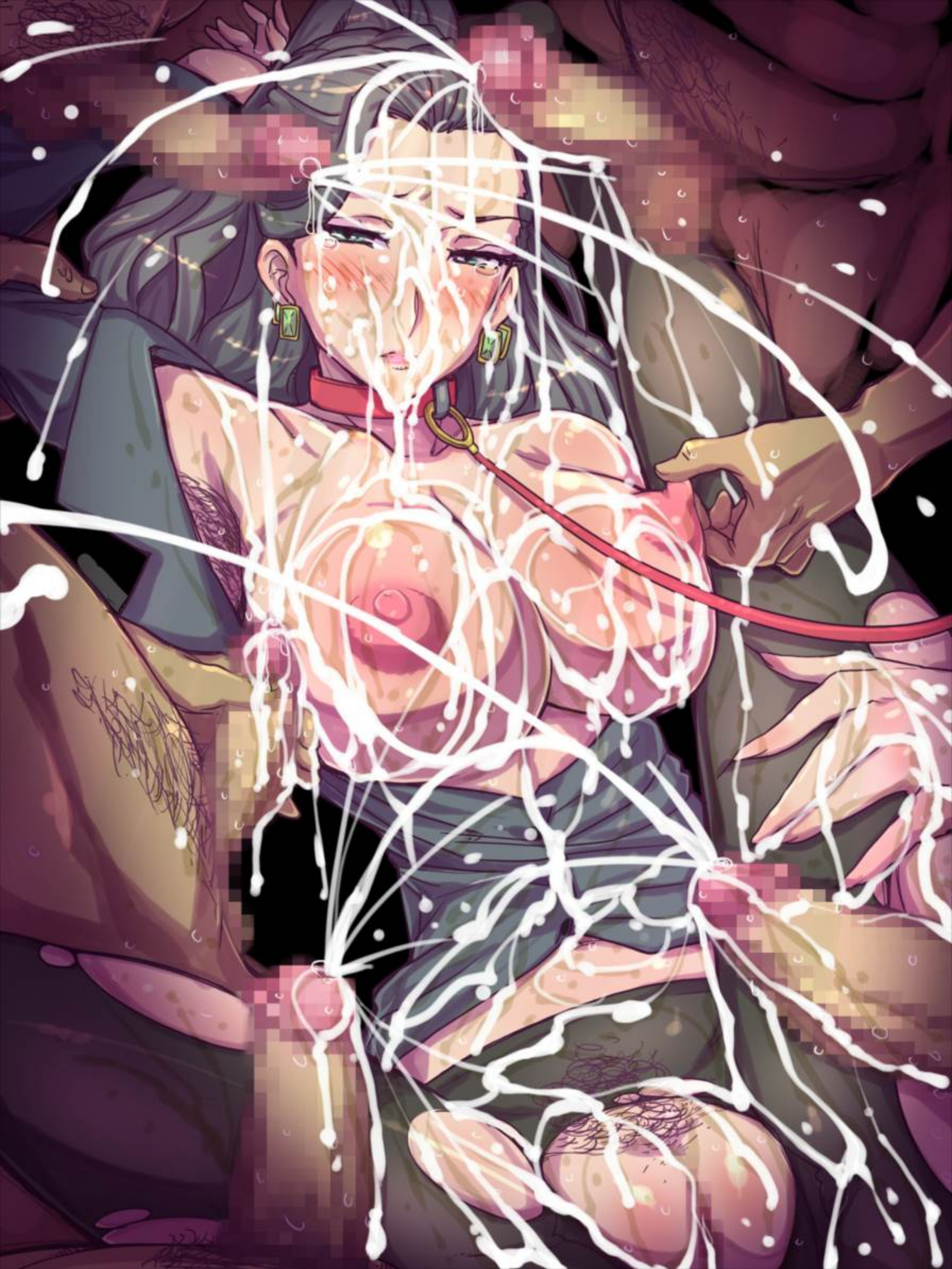








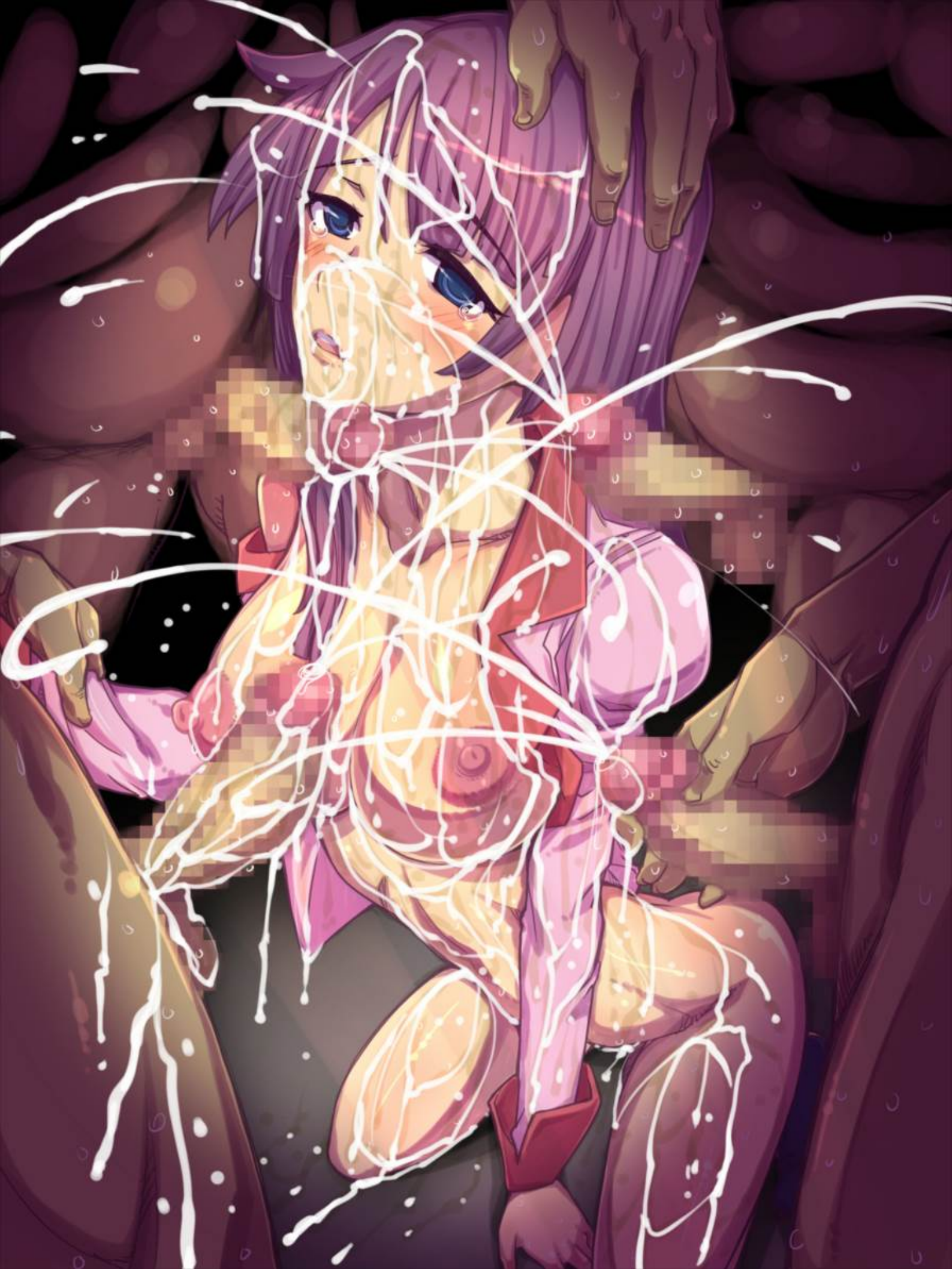




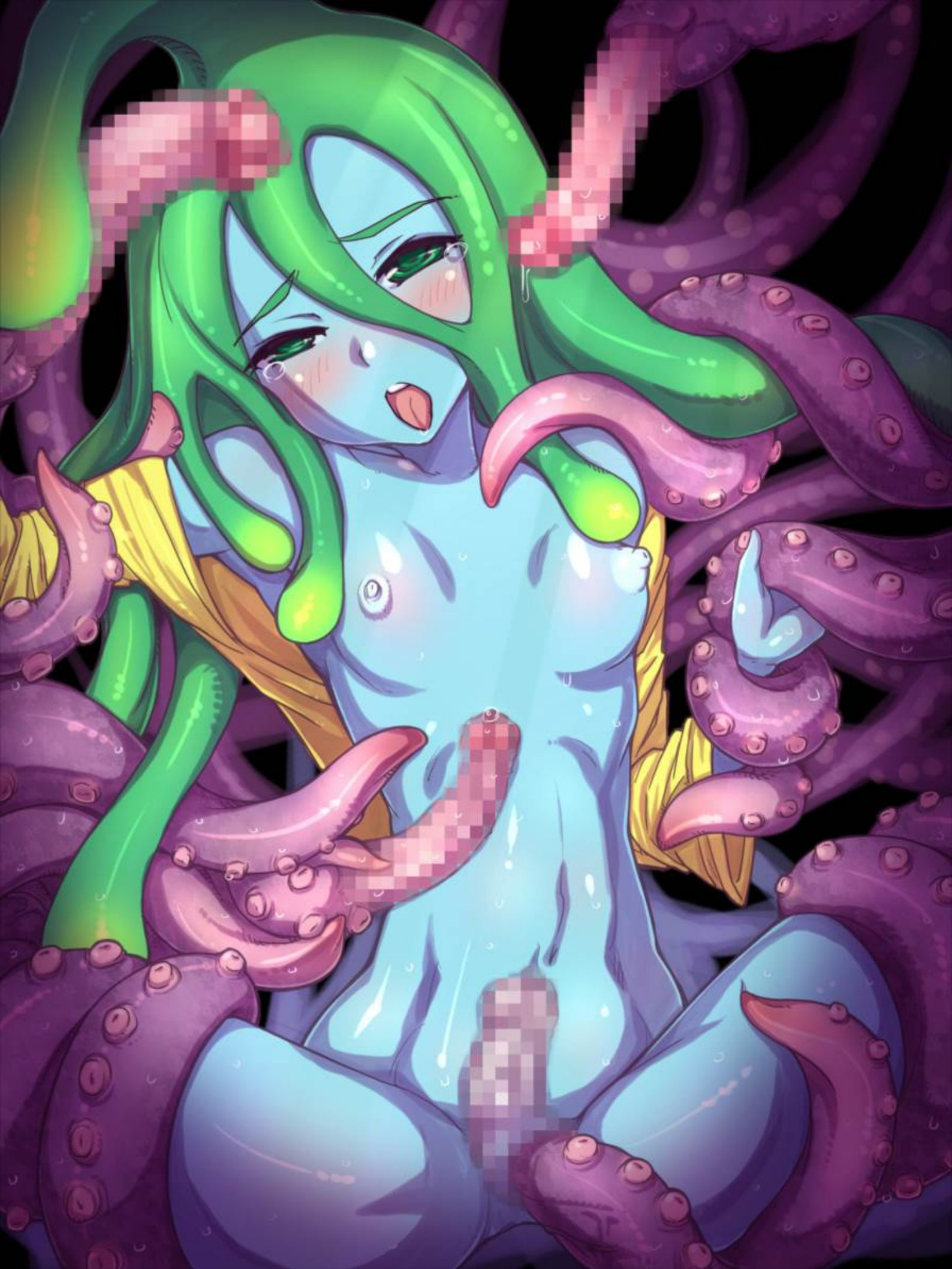




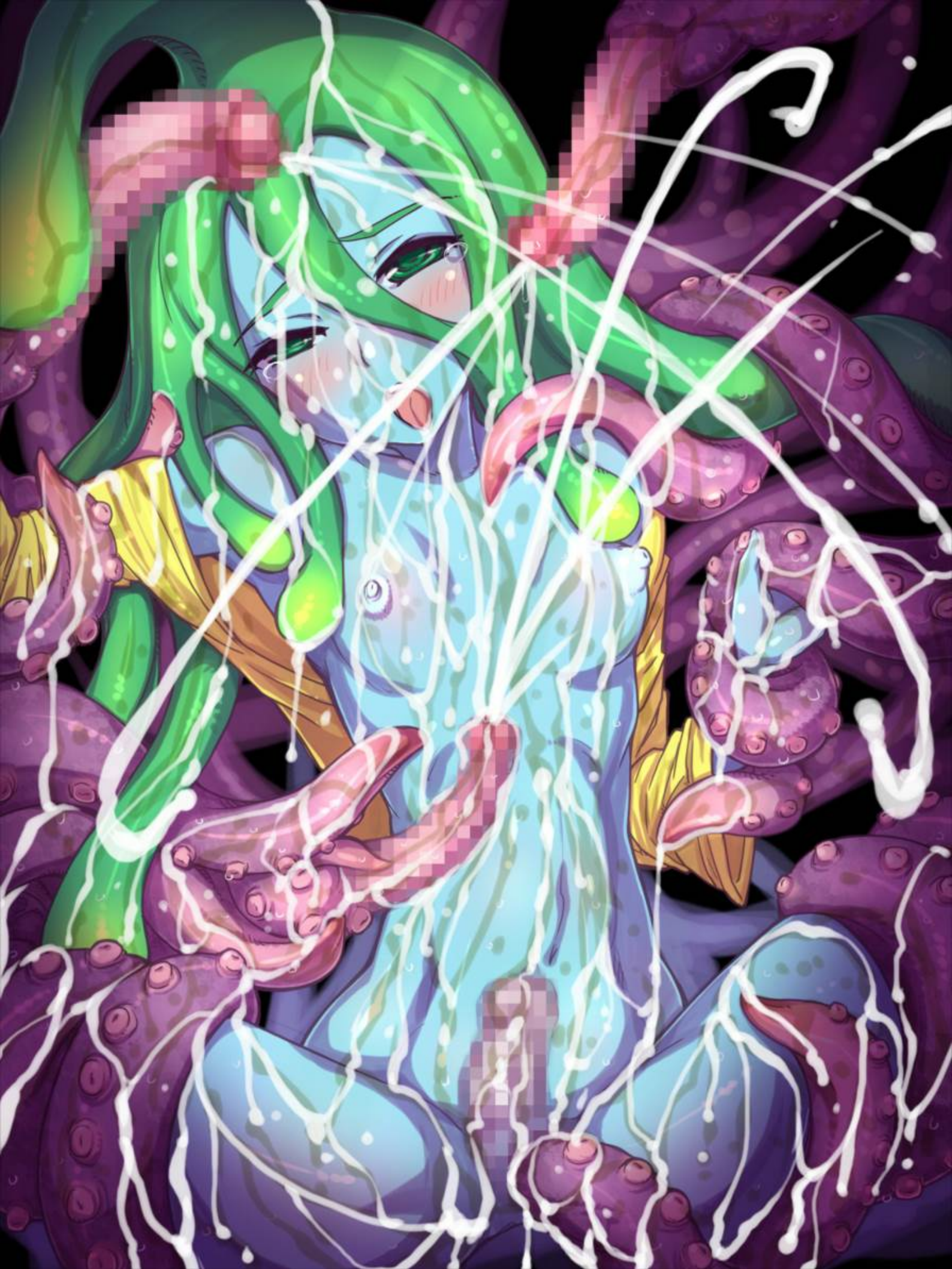
























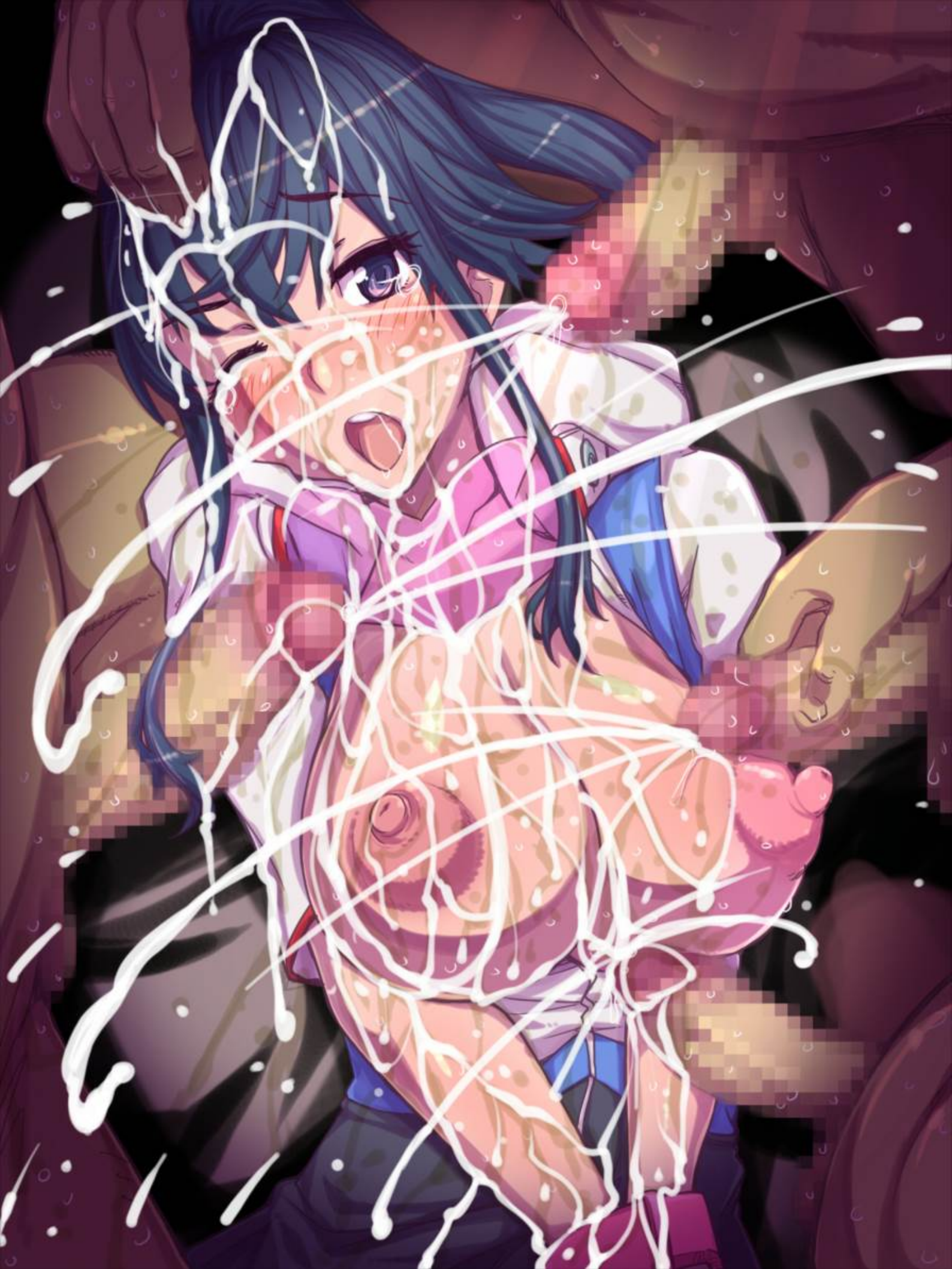








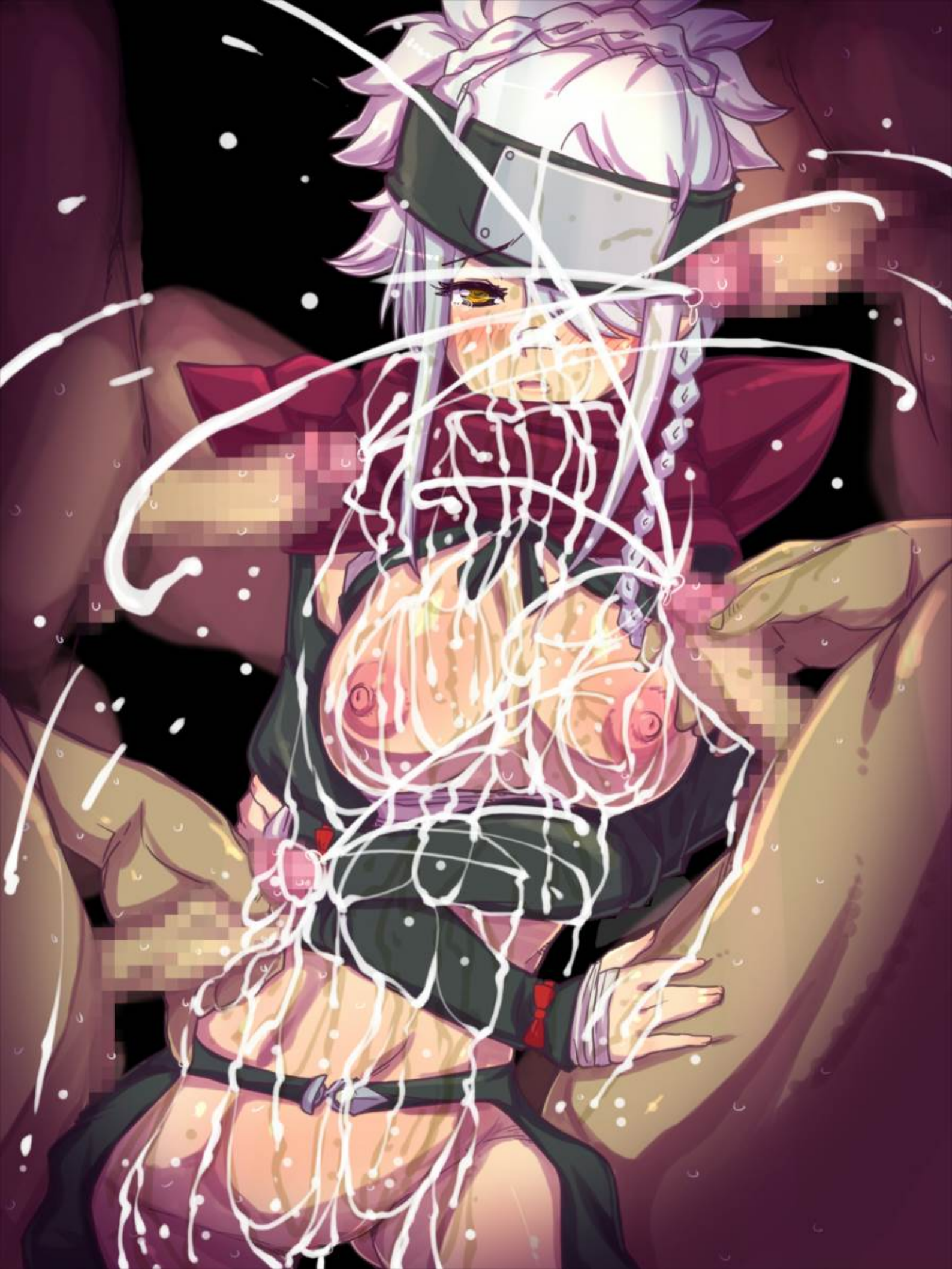




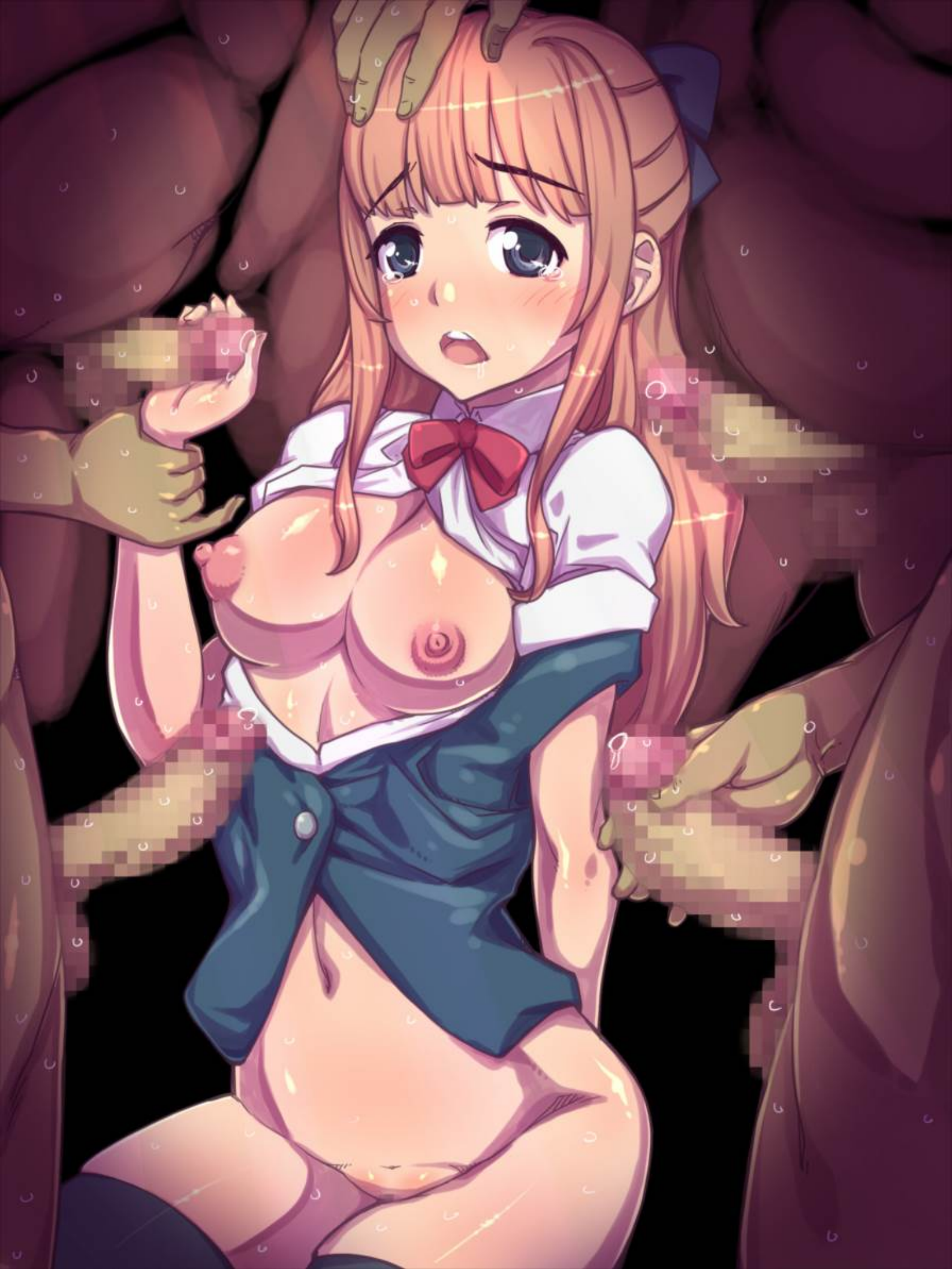




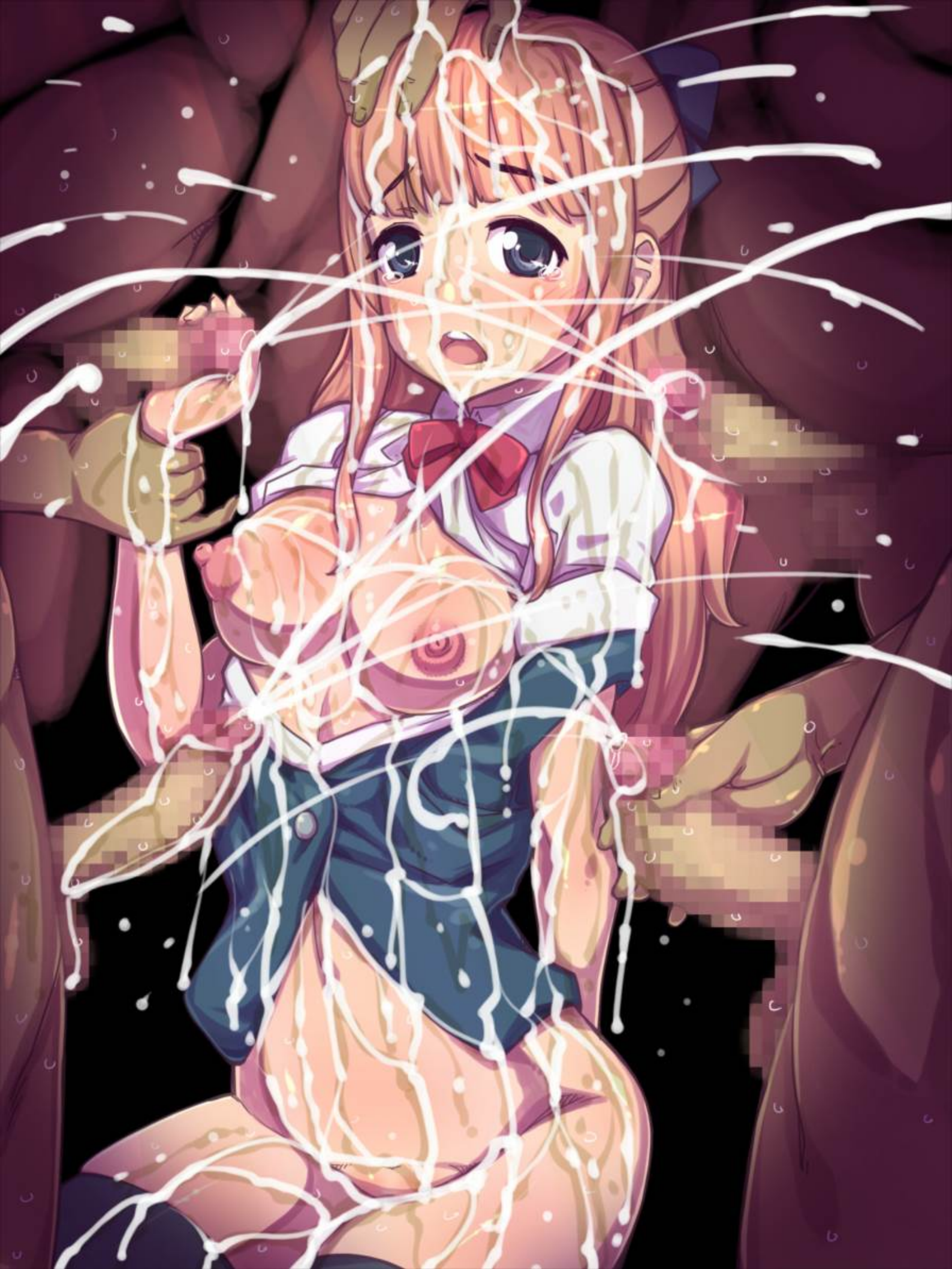




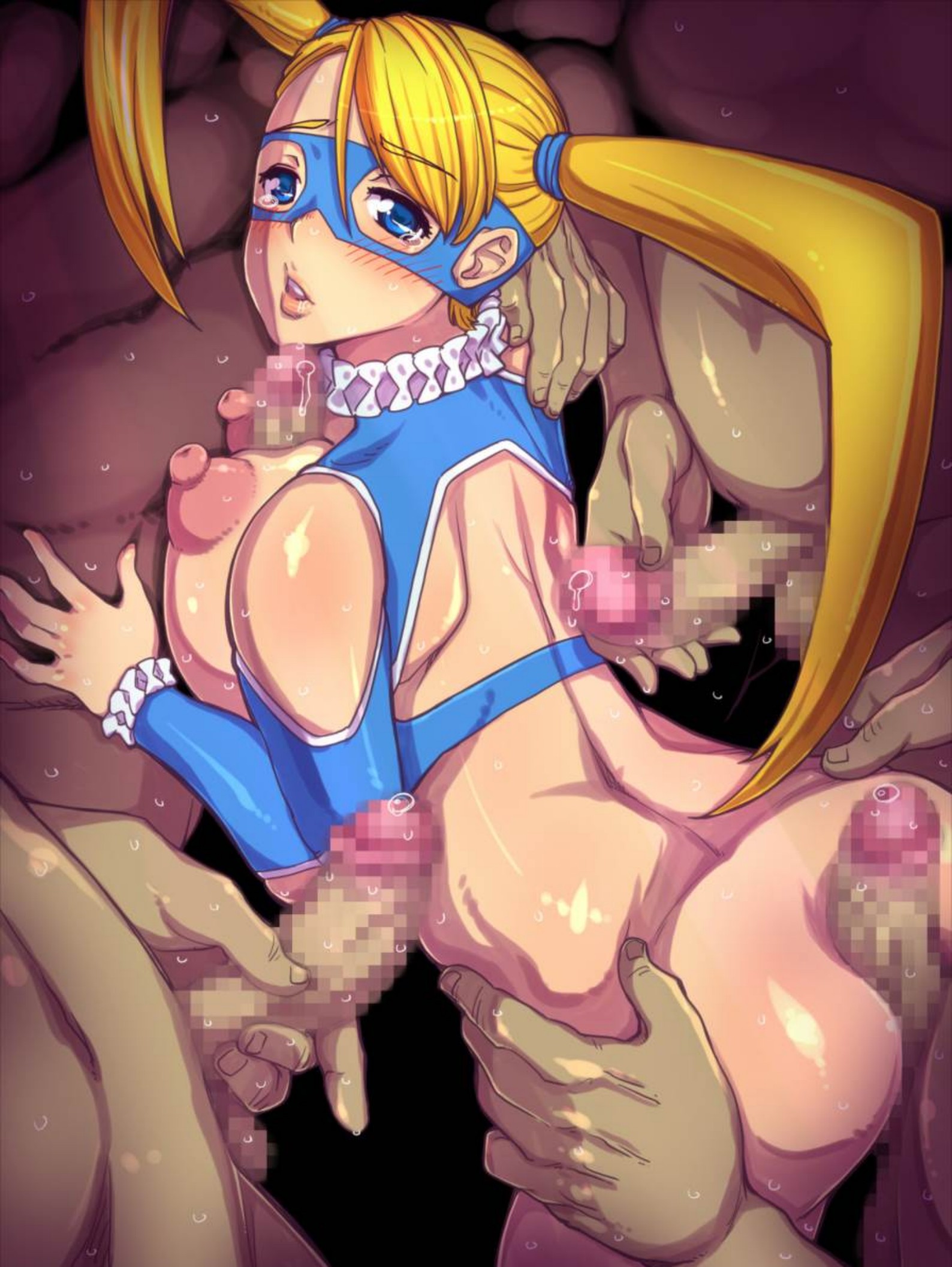














## 補汁要員

「あくう！ダメっすだめっす！いっちやうッ！いっちやうすう！  
いぐッ！いぐうう！あへえええ！」

体を震わせてだらしなく喘ぐ女。  
油まみれのマットに体をのけぞらせ、屈強な男立ちの愛撫にケダモノのように  
嘶きイキまくっている。

「あへええ！おちんぼくるっす！キクっすう！あひいい！  
ジブン、ヤバイっす！またッ！またいぐッ！いぐいぐおぐうう！」

ガラス張りのレスリングルームを見つめる研究員達は、  
幾つものモニタを通してこの女が全く「適していない」と思いため息をついた。

「ベガ様に言われたとおり検体をテストしていますが…  
こんなに肉欲に狂うようでは、作業員としては全然ダメでしょう」

「潜入工作が中心なんだから、キラビーのような戦闘員が欲しいのに、  
なぜパワーファイターを検体選ばれたのだ？」

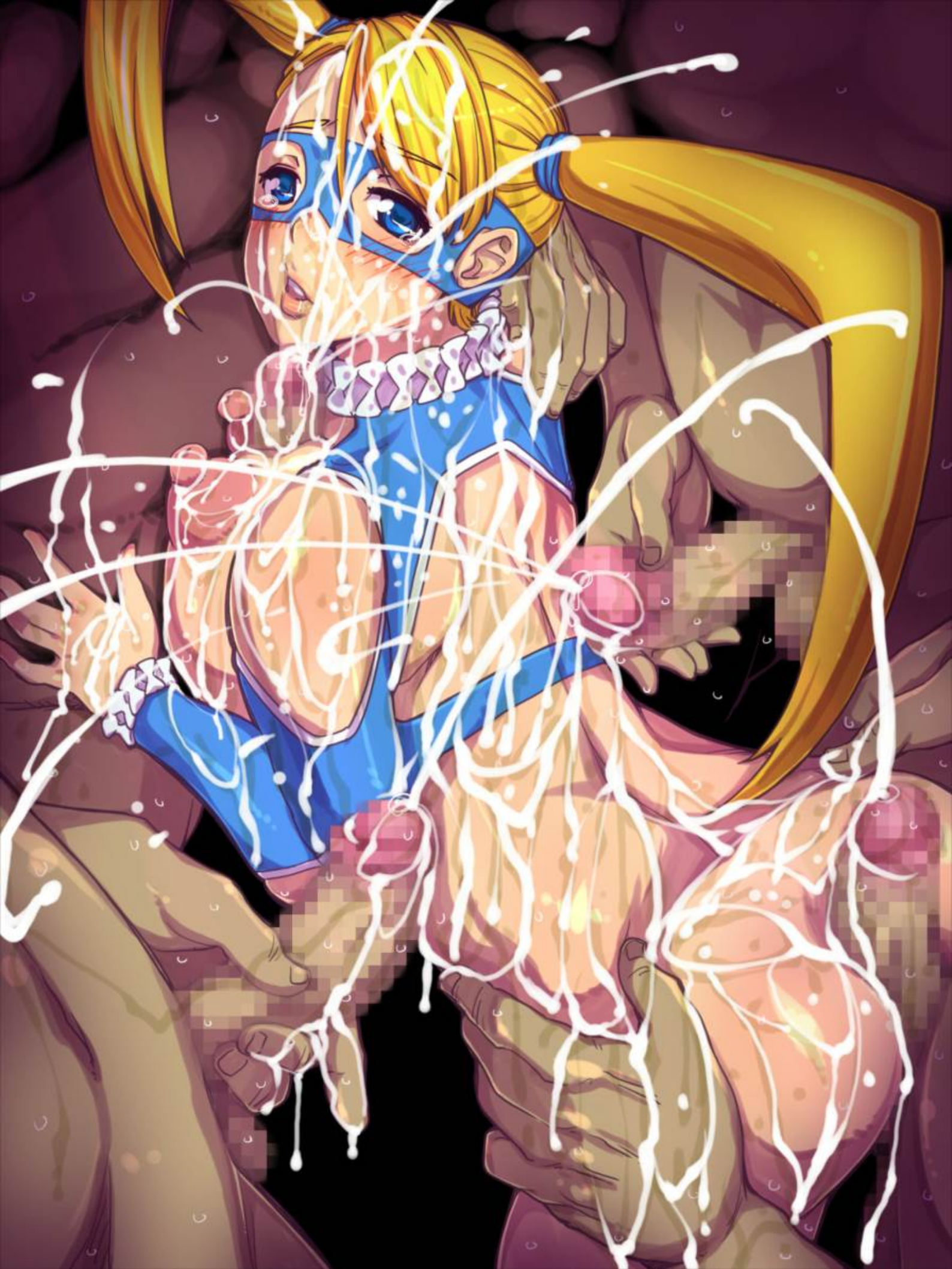
「ベガ様最近太られてから、女の趣味が変わられたともっばらの噂だぞ…？」

「口を慎めッ！」

仮面の男が研究員をにらみつける。しかし、  
一番大きいため息をつきたいのはこの男だった。

「醜いッ……こんな醜く喘ぐ女……みたことがない……  
男の検体に犯させて、快樂漬けののち、記憶がなくなったら排棄しろ……」







「ぐへへへえええ！この女ぐあいよすぎだぜえええ！おあおああ！」

一段と屈強なボクサー風の男、  
幹部のこの男は検体を犯して破壊するのが好きな  
仮面の男とはまた違ったサディストだった。

「これだけ乱暴に犯してもぶっこわれねえ玩具ッ！たまらねえッ！  
べがぁ！こんな女宛がうなら一生ついていくぜええええ！ウウッ！！！」

尻肉にペニスを挟み、卑猥な道具を扱うかのような乱暴な動きで射精する。  
がくんがくんと肉質溢れる体が揺れると、それにともない溢れる  
豚の嘶きの様な淫猥でエロティックな喘ぎ声がルームに溢れる。

「あひいいい！こわれるうう！いぐうう！いくっいくっ！  
あああジブンもうッ！いくっすう！あへえ！あへええええ！」

屈強な検体達もひたすらに射精し続けていた。  
改造された肉体は性欲を持て余し、今まで何体もの女検体を破壊してきた。  
しかしこの女はそれを飲み込み、さらによがり狂っている。

「はあはあッ！やべえ！とまんねえええぜえええ！  
もっと薬ッ！もってこい！コイツぜってええぶっこわしてやるウ！ムフー！」

世界レベルの格闘家が持て余したエネルギー。  
それは並みの女性では包み込めない。本気でセックスに望めば、女は破壊され、  
ボロボロになるのは目に見えていた。

若い頃女をぶっ壊した初めてのセックス、あれから今まで  
ボクサーの男は満たされない性交渉に甘んじてきた。

それが故に、自分が本気を出して壊れない女に出会えたことに、  
嬉しさより壊せないが故の格闘家としてのプライドが高まっていく。



「おらッ！オラッ！オラッ！ぶっこわれろおお！オウウウウ！」

「いくっっ！いくっす！イグイグイグウウ！」

体を震わせながら、女のムチムチな指につかまれたペニスは容赦なく精液を搾り出されてイク。

突けば突くほど、射精すればするほど、女の表情は恍惚に溢れ、より一層激しく乱れた声を上げていく。

「はあッ！はあッ！はあッ！ちくしょう！で、でるッうおおおう！」

情けない声を出し、体を震わせてイクボクサー。20回吐き出したその尻肉を痙攣しながら離すと、その場にガクリと倒れこむ。

「まだっすう！もっとイキたいっすう！あうんっ！あうあう！」

倒れこんだ男に跨り、腰を振る女。クリトリスを自ら弄りながら、力なくフニャったペニスを無理矢理に扱って勃起させ、下の口でくわえ込む。

「あへっ！ちんぽサイコーっすう！あへ！いくっす！いくいくいくう！」

「おああ・・・もう・・・もうやめれえ・・・ぐへあああ～」

ボクサーの男が情けない声を出し、21回目の射精をする。

「バルログ様ッ！ば、バイソン様のメディカルデータが・・・」

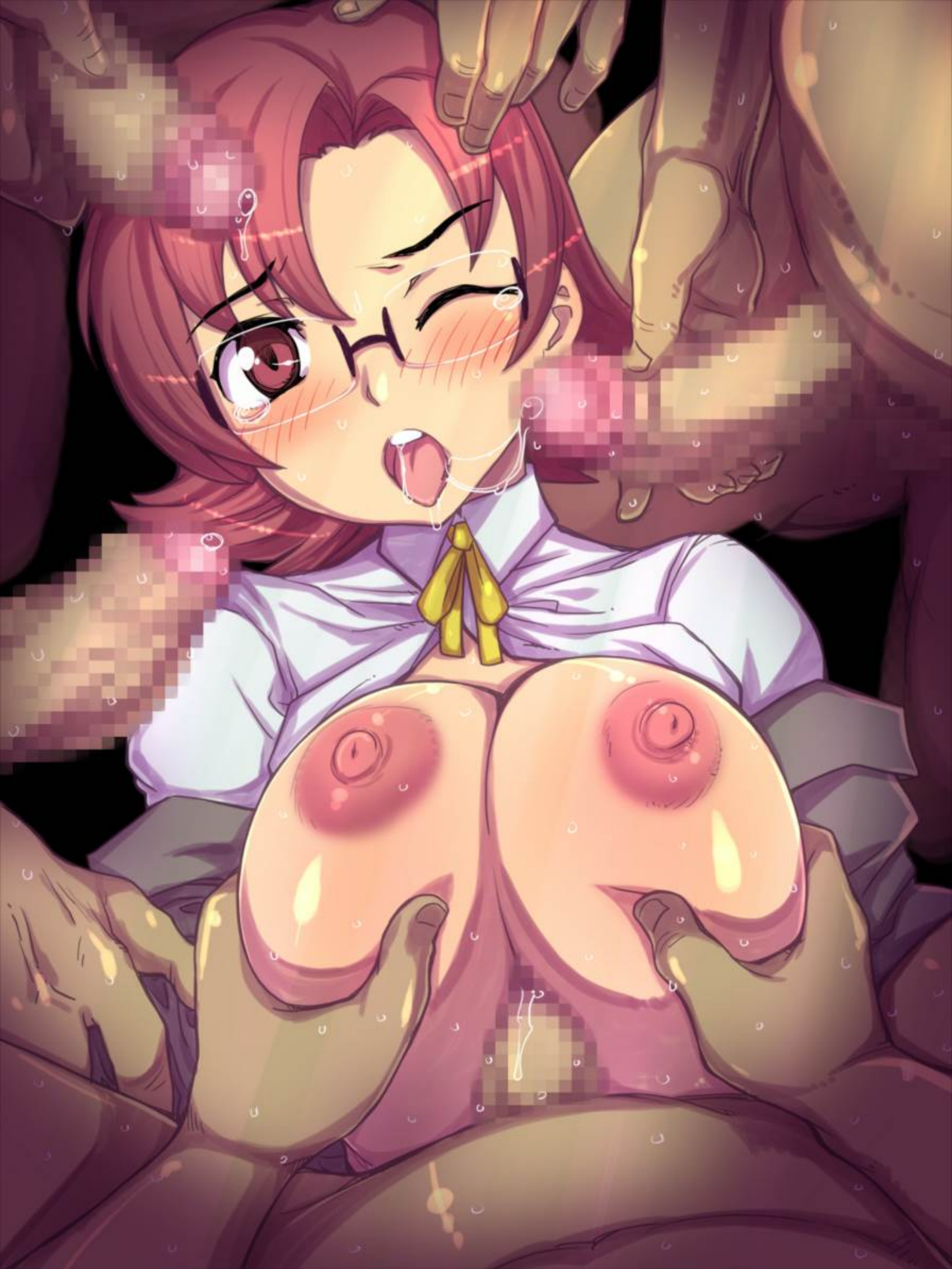
「あのバカッ・・・もういい、あの豚は適当なところで排棄しろ！セックスだけ強いケダモノなど、わがシャドルーにはいらんっ！」

それからと言うもの、負けると犯される女レスラーがいる、そんな噂が、格闘家界隈で囁かれたらしい・・・。

END

SS by チキン・フィレ雄







## 腐った娘さん

「え！？え！？おかしくないですかあ？  
なななんでこういう流れになってるんですか！」

腐女子のイベント後、打ち上げのサークルオフ会にしては男性がやたら多いとは思っていたが、赤城瀬菜はいつのまにか、気がつけば二次会のカラオケボックスでマイクの変わりにちんぽを握っていた。

「だあってさあ、ホモマンガにおけるペニスの正しい知識と描写を知りたいって言い出したの赤城さんじゃん？」

「そうそう、同人誌見たらわかるけどさ、赤城さんの描くペニスって兄貴とお風呂に入ってた頃の知識で止ってるよねえ～？」

「なななななんなんですかそれわ！私はホモではなくですねカップリング萌えひゃああ何やってるんですかヘンタイヘンタイヘンタイ！！！」

制服のブラウスを脱がし、豊満な胸を揉みしだく男達。乳首を咎め回したり吸い付いたり、舌が卑猥な生き物のように蠢く。

「やっばすっげでけえわ…乳首もぷりっぷりだし…あれ、感じてる？」

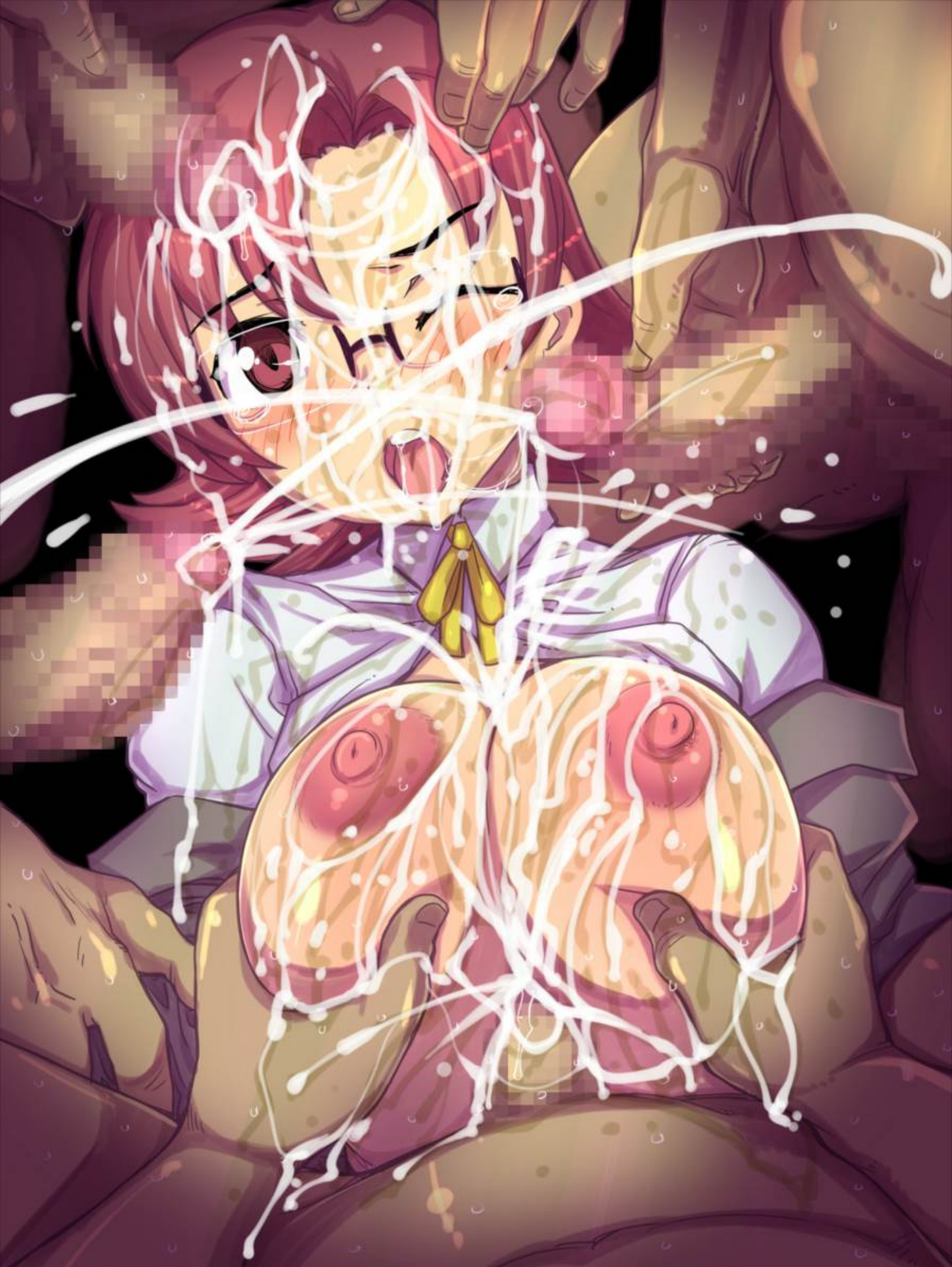
「やめてくださいッ！いやもうほんとうにまじで！  
ああああ、あのあの、あの私本当にそういうつもりじゃなくてですね」

「ああそう～ペロ攻め乳首受けは好みじゃない？  
てことは…あれか、ちんぽ責めのパイオツ受けならどうかな？」

男はぷっくりした瀬菜の乳首から舌を離すと、自身の勃起したちんぽを瀬菜の豊満な胸に挟んで腰を振り始めた。

「ああっ…これってパイズリ…じゃないですか…あっ…」







「違う違う！デカ勃起チンポ攻め地味隠れポイン受けのカップリングだよお  
ああ～やべえ・・・ちんぼ溶けそう・・・」

「そんなの・・・ちがう・・・ちがうって・・・」

周りの男達がズボンを脱いで、次々に瀬菜の体に押し付ける。

「これが大人の男性器なんだ・・・  
そして、私のおっぱい、すごい攻められてるう・・・」

自身に起こった悲劇を直視できず、思わず腐った妄想で現実逃避する瀬菜。

「ちんぼがオッパイせめてるう・・・ああ、略奪愛なのね・・・  
無理矢理はさまれて、感じてしまうオッパイ・・・」

「お、おれもうガマンできねえわ、ちょ、顔、顔に出させて・・・」

「お、俺が先だぞ！ほら、瀬菜ちゃん、大人の男の射精ってのはね  
こういう風に・・・ウッ！」

「ひゃあ！」

ぐいぐいと扱かれたちんぼが男達のため息のようなうめき声とともに  
白濁液を飛び散らす。臭い体液が瀬菜の顔に激しく降り注ぎ、  
汚されている実感を身をもって感じずにはいられない。

「あああ！しるっ！精液ッ！いやあああ！」

「お、おれもでるッ・・・ちんぼ、ちんぼおっぱいに攻め受け逆転で  
イクッ！ああ！いくいくいくううう！」

「ああッ！でてるっ！オッパイででてるっ！オッパイ攻めッ！  
あはあああ！」



瀬菜は攻められるキャラを妄想し、それを自身と重ね合わせて感じていた。

胸が必要以上に大きいことをコンプレックスに感じていたせいでそれを男達に激しく求められたことと、妄想したパイオツxペニスのカップリングがない交ぜになって、なんだか自分自身が激しく愛されているという妄想に走り出していた。

「ああ！かけてッ！オッパイでいって！いっぱい・・・いっぱいいくのお！  
いっぱい愛して・・・ああ！あはあああ！」

「おお？なんか急にノリノリじゃん！？」「おれ何度もイケるよ！瀬菜ちゃん！  
「おねだりして！だすよッ！顔に出す！だすっだすっだすっ！ウウウウ！」

体中で感じる射精のビクつき。男達の吐息。  
攻められて愛されることが、こんなにもアツくて激しい事だとは。

妄想では到達できなかったナマの温度に、  
瀬菜の肉欲と妄想はとめどなく溢れる  
蜜のように、濃厚で甘い感覚を覚えこませていく。

「ああ！あはあ！ だして・・・ねえ・・・めちゃくちゃに・・・犯してッ！」

「おいおい、めちゃめちゃスイッチはいつてるぞコイツ！」  
「お望みどおり犯してやろうじゃねえの！ パイズリかわれよ！」  
「お、おれもやらせてよお」「皆で朝までマワそうぜ！」

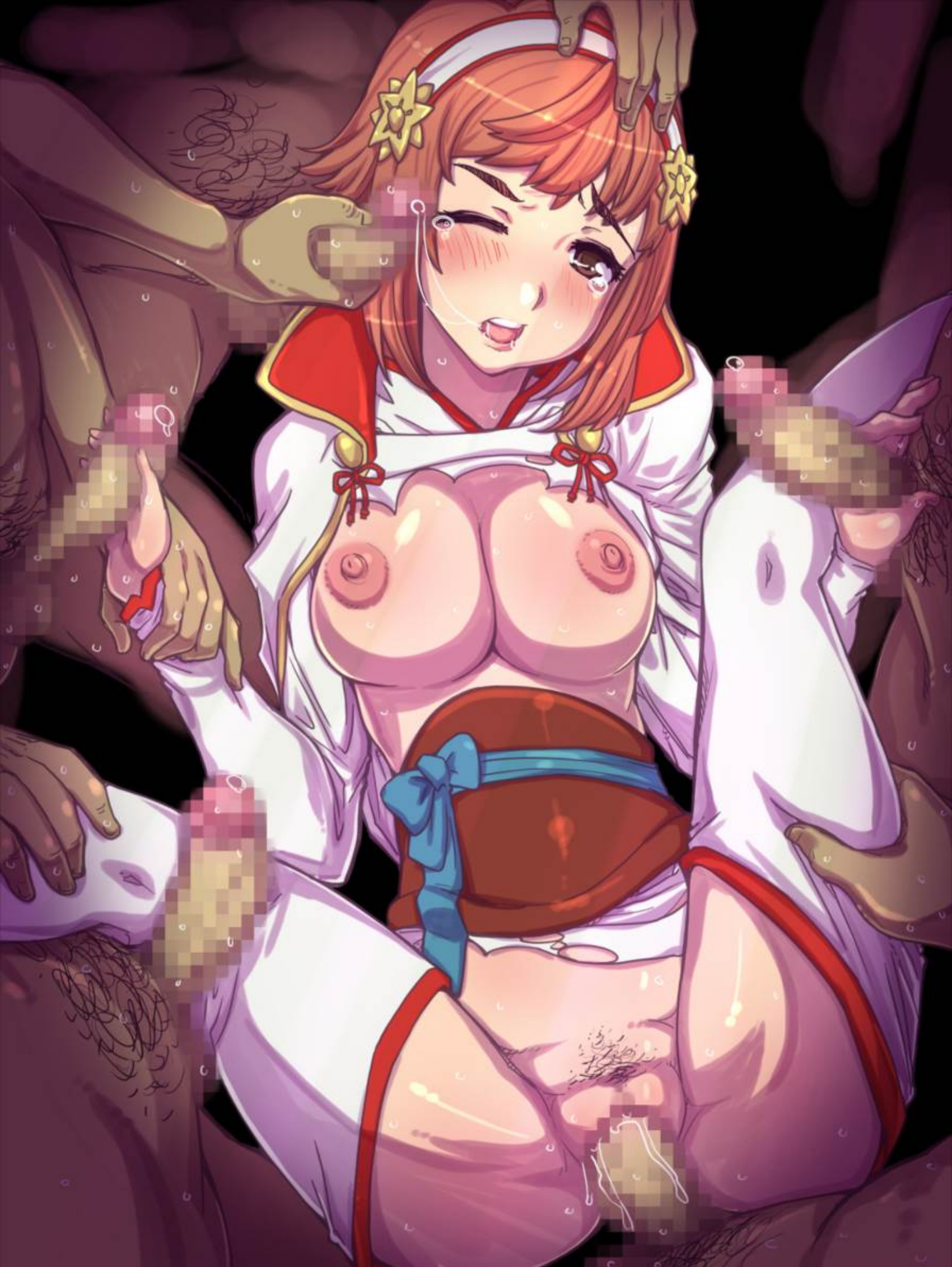
妄想と現実が重なる時、ようやく自分が今まで肉欲に求めていたものが  
激しく略奪される愛情だと気がつく。

その激しさを恐れていたからこそ、信頼できる異性、つまり兄に  
いつまでも依存していたんだということ。

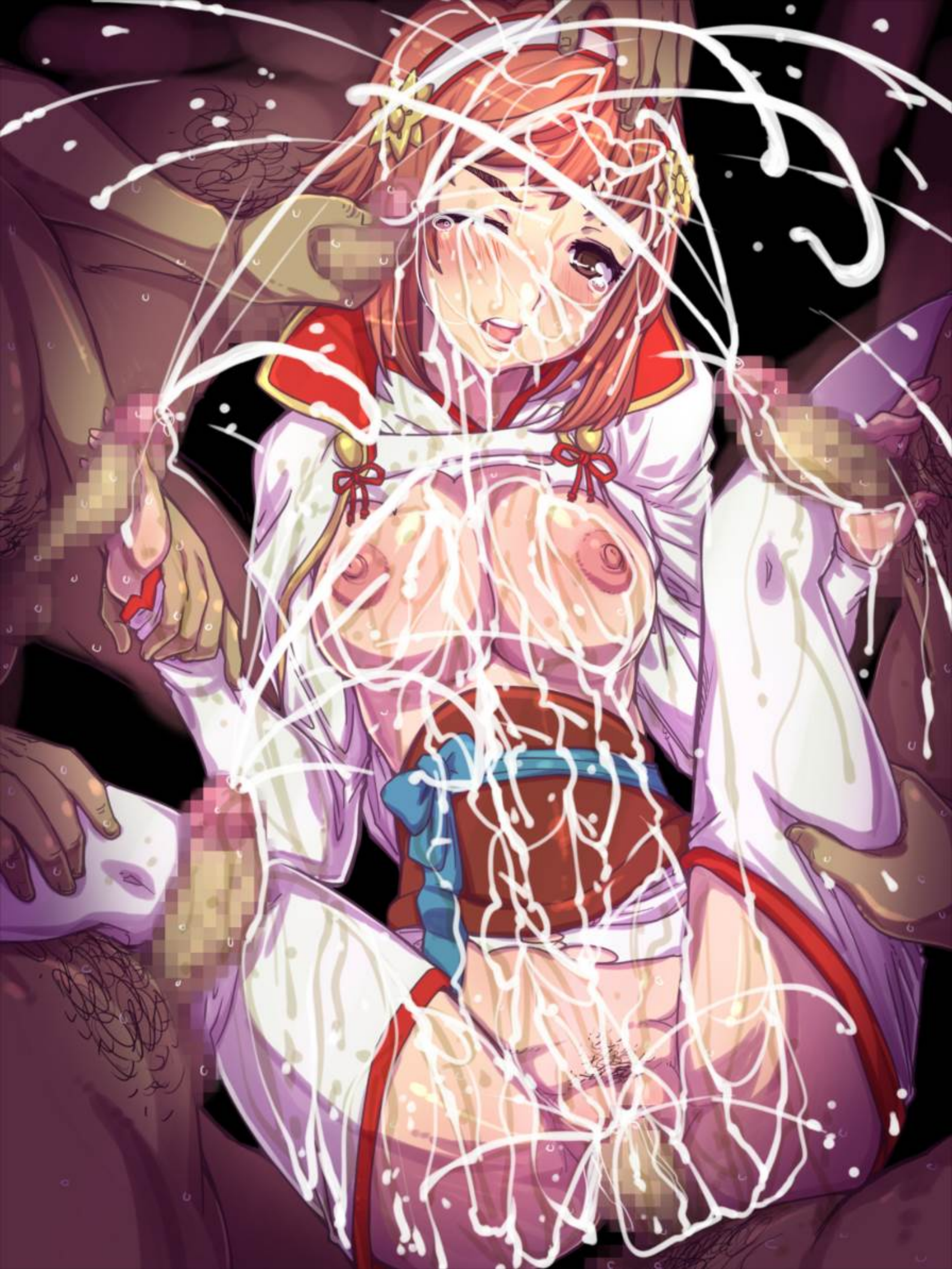
END

SS by チキン・フィレ雄















641枚 リクル・ヒカル

## 王国の終焉

Pick☆Up

アランダス連合王国は今や滅亡の淵に立っていた。  
長らく王国の安泰を守っていた国境の要塞『グレート・ウォール』はインゲルミアの軍の奇襲攻撃により脆くも陥落した。

敗走を余儀なくされ孤立した整備兵達は、インゲルミア軍の歩兵に包囲され  
あえなく拿捕される。元々整備兵であり戦闘教練もロクに受けていない彼女、  
「リクル・ヒカル」は、抵抗するすべもなく歩兵にテントへ連れて行かれた。

「はなして・・・捕虜になったんだからあ・・・ら、乱暴しないでッ・・・」

「なかなかおカタそうなねーちゃんじゃねえか」「フヒヒヒ！」

「堅牢な要塞にはお堅い女ってかあ？いいねえ～」

屈強なインゲルミア兵達はニヤつきヤジリながら彼女を眺めている。  
現時点で男達は紳士的ではないが、乱暴と言うほどでもない。  
彼女はこれから起こるであろう「乱暴な事」を想像し、恐怖していたのだった。

やがて小隊長と呼ばれるインゲルミア軍の将官が兵達の前に姿を見せた。  
部下の兵と二言三言と言葉を交わした後、無言で部下の兵達に頷いた。

色めき脱男達・・・それが饗宴の開始の合図となった。  
屈強な男達は乱暴に彼女の服を剥く。

「いやっ、やめてえ！いやあああ！」

「無駄な抵抗してんじゃねえ！こちとら何日も女を抱いてねえんだ」

「いい加減ここらでいい思いしねーとな」「やっば小隊長話がわかるぜ！」

戦場を駆け回った男達の汚れて黒ずんだ体とは対照的に、白く艶やかな肌が  
あられもなく露出する。知的な顔に違わぬ整ったいい大きさの胸、  
僻地ではお目にかかれない上品なネタに、男達の欲望は一気に燃え上がる。







「ああッでるう・・・」 「おいおい、いくら日照りが続いたっても早すぎ」  
「いや、おれも・・・ウツ」

男達は服を脱ぐや否や、銃が暴発するかの様に白い体液を吐き出した。

「えッ・・・うそ・・・なにこれ・・・いやっ・・・いやあああ！」

「うるせえよッ！おら、手で・・・しっかりしごけ！」

「顔こっちむけろ！デルッ！でるでるでるううう！」

レイプされる・・・想像していた行為とはかなり違うそれに彼女の思考は留まっていた。大人しい性格とはいえ、男が女に求める行為、無理矢理にでも行いたいセックスがとは全く違う、自らペニスを抜いて精液をかけるという理解しがたい行動・・・。

「いやっ、やめてえ…、あっ、やあああ…かけないでッはぶう！いやッ！！」

「ちっ、うるせえな、俺のチンポでも啜えて黙ってる！」

1人の男が自分の肉棒を強引にヒカルの口へねじ込んだ。  
ヒカルの小さい口に無理矢理肉棒が挿入され、苦痛にむせる。

「んむううううっ、うむっ、うぐっ、おっ、おぐっ、おごおっ！」

男はヒカルの頭を掴み、強引にイマラチオを始めた。

「オウッ！おうおうおうおう！いくぞッ！でるでるでるううう！」

「おぶううう！ゲホッ！けほけほっ・・・んくううう！」

強引なイマラチオに耐えかねた彼女は、肉棒と精液を吐き出し、むせこんだ。



薄暗いテントの端では拿捕された整備兵の「アカネ」と「カオル」の2人も男達の蹂躞を受けていた。

痛み止めに使うモルヒネで意識が混濁し、まるで肉人形のようにがくんがくん犯され轟く二人の姿が、徐々に暗闇に慣れたヒカルの目に映り始める。

「ああ、なんで…こんな事に…こんなひどいよ…」

今までの行為を眺めていた小隊長がヒカルの前に出てきた。ベルトを緩め、より一層そそり立ったペニスがあらわになる。

「勝者がすべて奪うのだ、金も、名誉も、女もな…  
それでは、戦利品をもらおうとするか…」

「うそ…それって…それって…お願い…私…まだ…」

ヒカルの哀願を無視するように『小隊長』は肉棒をヒカルの花卉に突き立てる。

「処女か？十分濡れてる…挿れるぞ…フンツ」

「いやっ、痛い、抜いて、抜いてえっ！」

体の中へ進軍するかのよう強引に入り込む肉棒。しかし痛みは思ったほどなかった。痛み止めの薬を、彼女も飲まされていた。

「んっ…んくっ…あっ…あっ、あっ、アッ！アッ！」

数分も経たぬうちに、痛みは消え去り、快楽のリズムに支配されていた。

「脆いものだな…この女も『グレート・ウォール』も…」

見かけが堅牢であっても突破口さえ突けば、  
だらしなく受け入れるようになるものだ…」

小隊長が力強く抱きかかえたヒカルの耳元で囁く。アランダスの大地を染める赤い夕日が彼女の顔を照らしたが、彼女の返事はもう堅牢なものではなかった。

「もっと、もっと突いてえ！あひい、あへえ！」

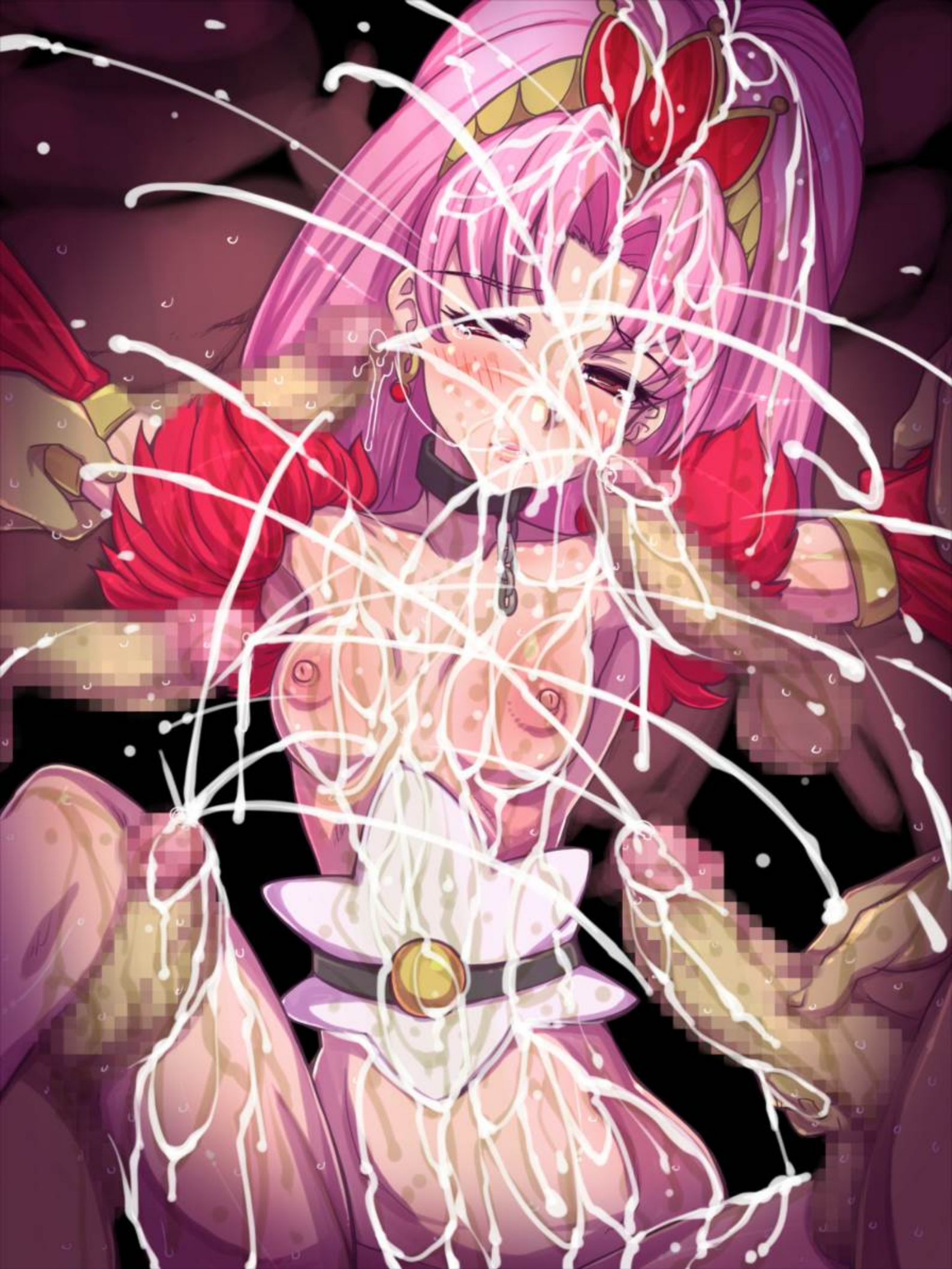
END

SS by メガネスキー





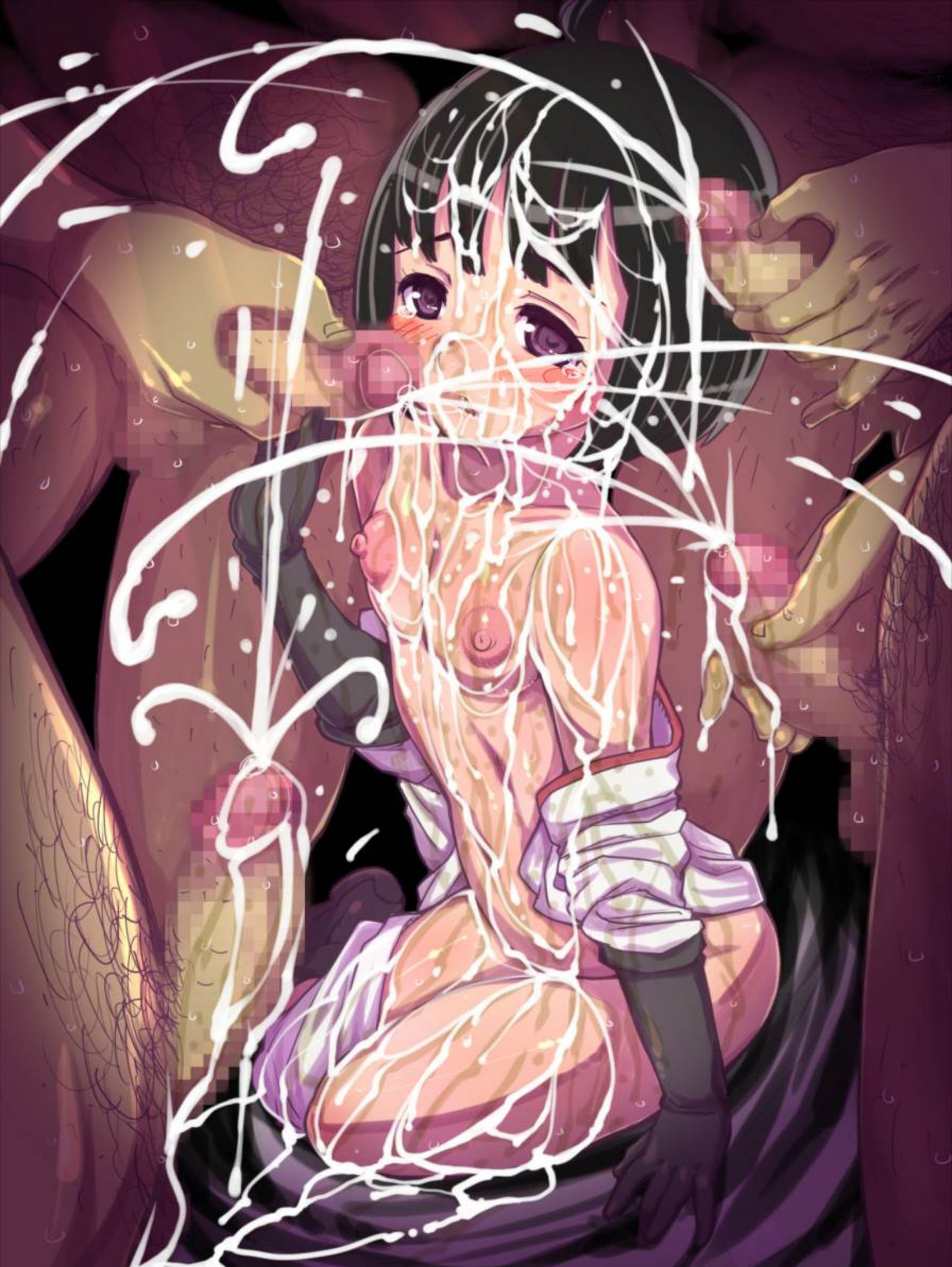




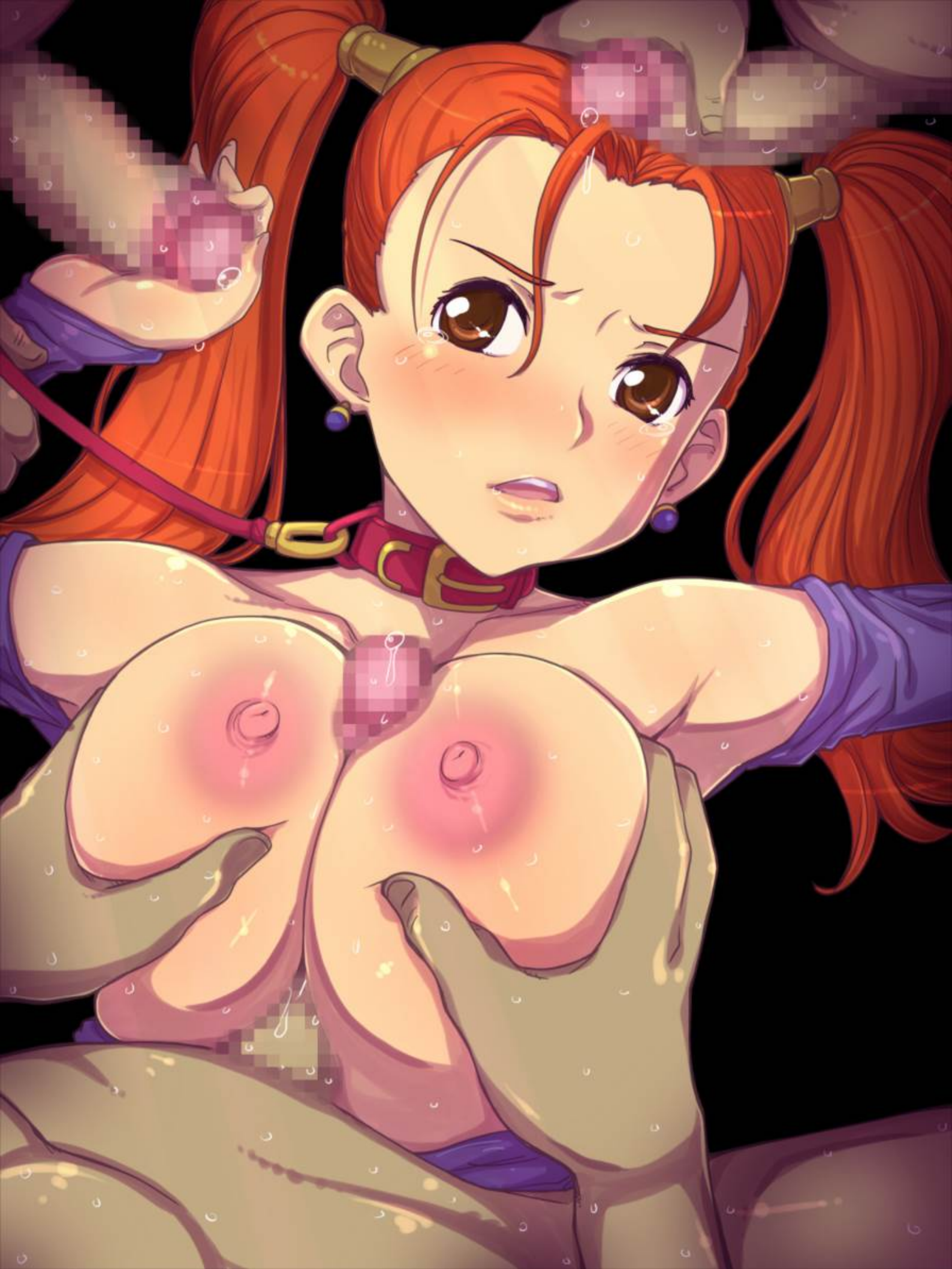




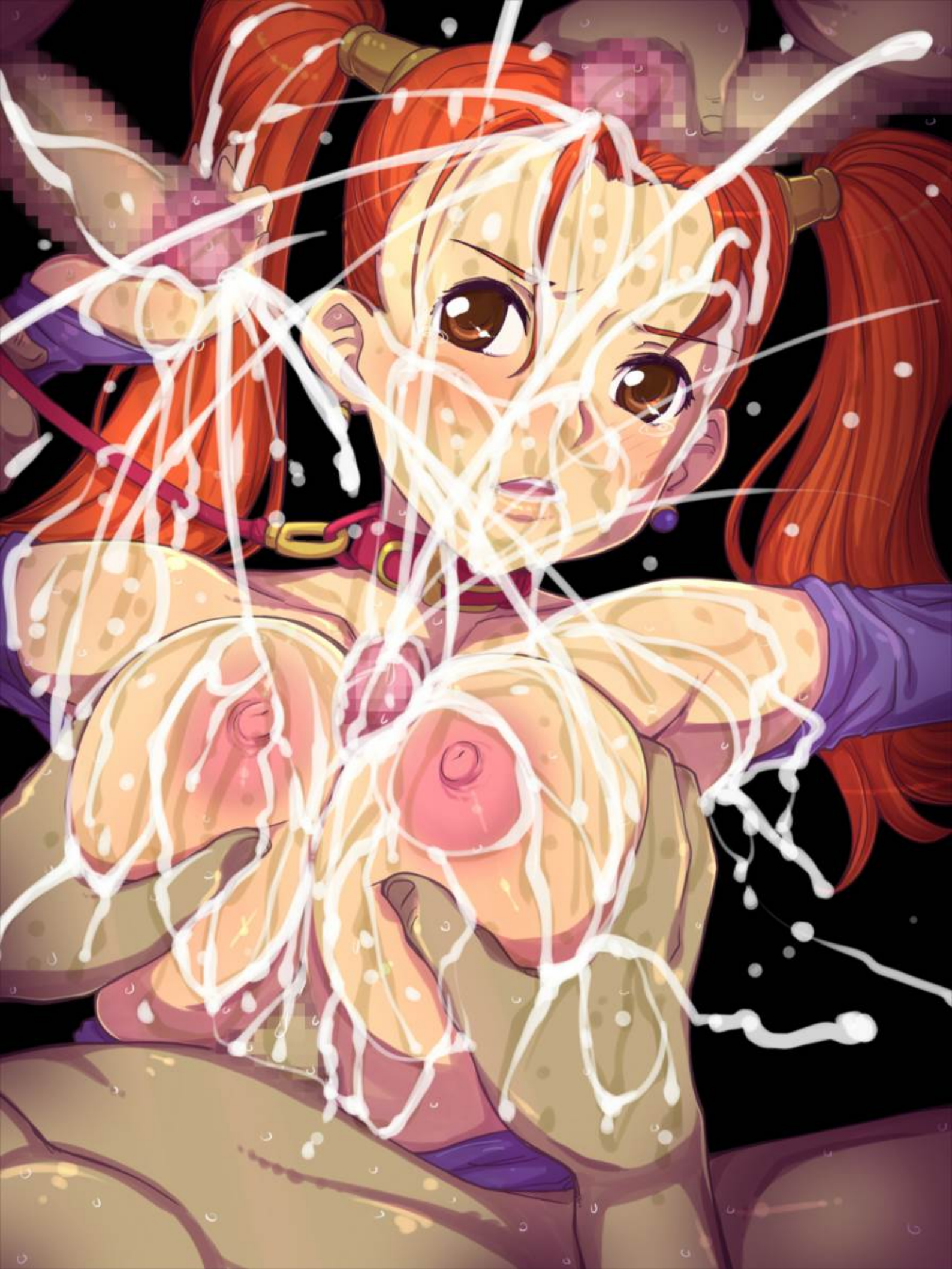




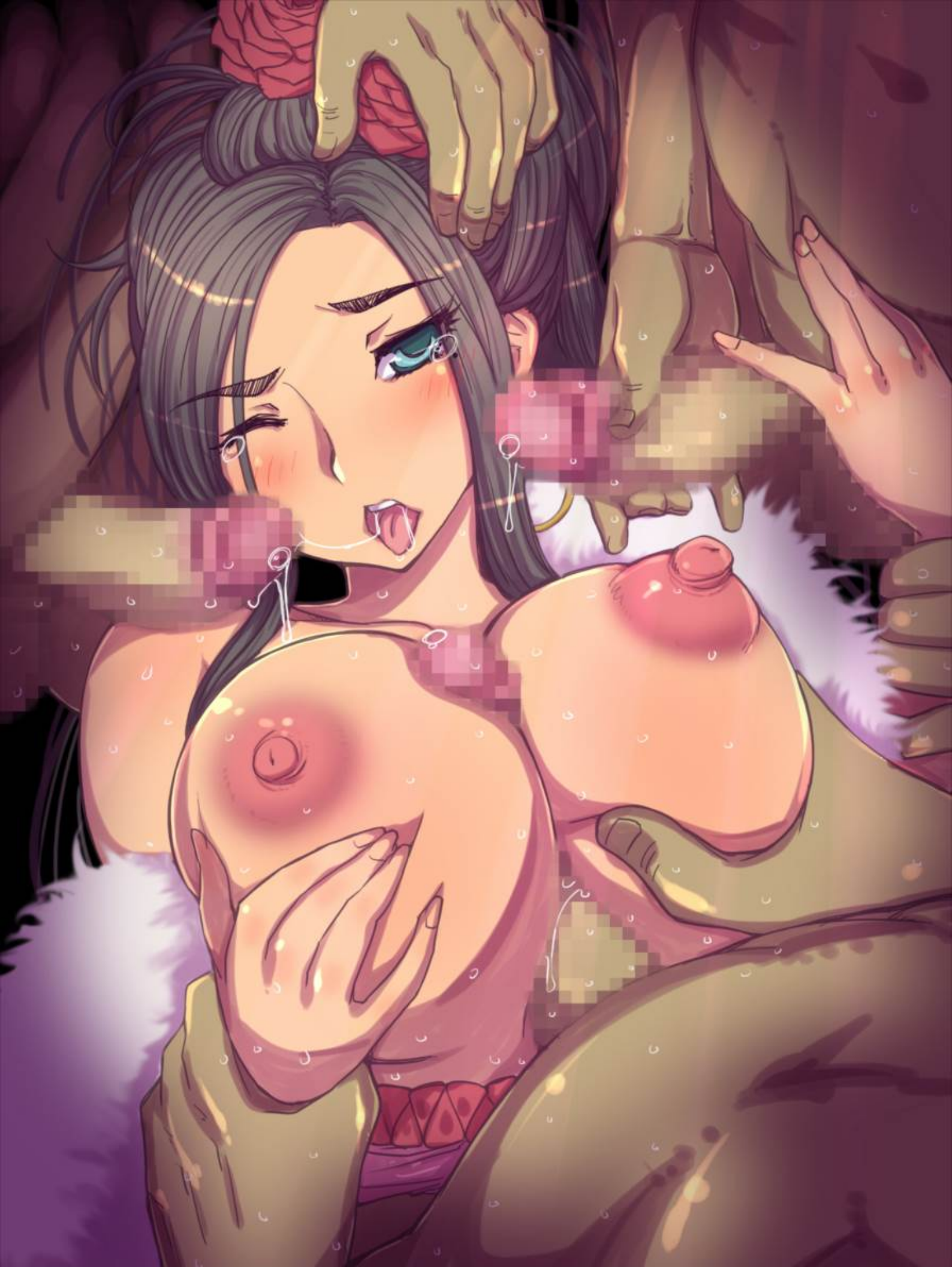














## 捨てられた花束

「あの人はどこにいるのよ！でてきなさいよッ！  
いやッ！はなせッ！この豚ども！はなしてええ！」

寝坊しただけなのに・・・朝起きると、結婚したはずの男は消えていた。  
自分だけベッドに寝たのが気に入らなかったのか？  
小魚みたいと言いつけたのが、そんなにカチンときたの？

そんなはずはない、言わなくても私があの人を愛していることは  
ちゃんと分かってくれてる、あの人も私の事、きっと愛しているはず・・・

「ねーちゃんよお、どっかのお嬢さんだかなんだかしらねえけどよ、  
おめえの旦那が2万ゴールドでおめえを売ったんだわあ」

「かわいそうになあ～おじさん達がいっぱい可愛がってあげっから、  
あんな魔物つれた男の事なんてわすれなよな？うへへへへ」

醜い・・・あの人を連れ歩く魔物なんかよりもっと醜悪な肉体の男達。  
中年のだらしない腹に、毛むくじゃらの腕や胸。人間の形をしているが故に  
美しく、白く長い自分との比較で、その醜さが一際目立つ。

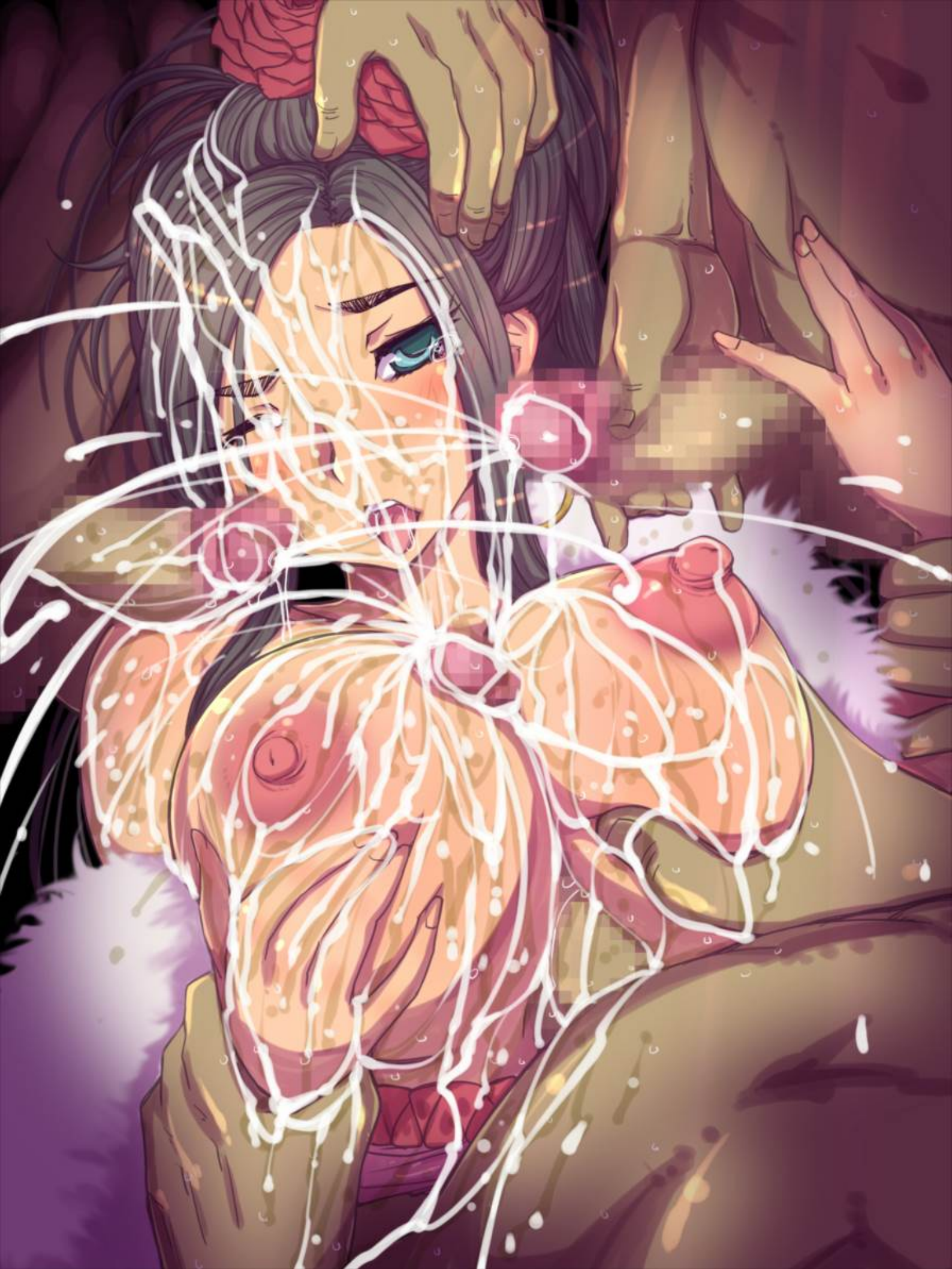
「よらないでえ！ いやっ！あああ！」

ビリリイイッ！ぶるんツツ！  
衣服が音を立てて裂け、爆乳といえるほどの大きな胸がはじけ揺れる。

「綺麗な肌してんなあ～これで2万ゴールドは安い買い物だぜ」  
「とりあえず一発5ゴールドでいいな？ パイオツは10ゴールドだ」  
「オマンコは20ゴールドか？おれ、今日5回は中田しするぜえ！」

「やめて！やめてえ！たすけてっ！  
うそっウソッ！ウソッ！！ウソッ！！！！」







逃げ場のない狭い宿屋の一室で、準備万端に興奮した男達が  
デボラの体を無理矢理押さえつける。  
到底認められない現実、無駄だと分かっているにもかかわらずにはられない。

「あッ・・・はぶううう！」

「でるっでるうっ！あああ！」 「どけよ！俺が顔にだすう！ウツ！」  
「オラッ！おらああ！こっちみろ！おうおうおういくううう！」

今まで遊んできた男達とは全く違う、下品で醜い男達。  
股間からは口にするのも汚らわしい体臭を漂わせ、その匂いの発生源で  
あるかのような陰茎を肌の柔らかい部分に押し付けてくる。

「いやっ！いうっ！うヴう！」

懸命に顔を背けても、執拗に精液を浴びせかけられ、息継ぎすらも  
醜悪な匂いと混る体液のぬめりにやられてままたまらない。

「ああ～たまんねえ・・・良いとこのお嬢様は肌の吸い付きが違うぜ」

「昨夜酒場でメシ食ってるの見たけどよ、コイツ品のねえ女だったぜ？  
商売女だと思ったがよ、旦那だったのかあの男・・・」

「一晩いくらか聞いた時はよ、あいつすげえ怒ってたのになあ  
よほどオイタがすぎたのかねえ？ぐっへっへっへ」

「おねがい・・・ゆるして・・・ゆる・・・ッ！」

デボラの目に見知った男が映る。  
にやけた小姓のような男、自分の町にいた使いっぱいりの男性だった。

「たすけッおねがいたすけて！あの人ッ・・・！フ、フローラに言ってッ！」

男はニヤァと薄気味悪く笑みを浮かべて言った。  
「デボラさん・・・おれえ、今日全財産はたいて貴方を犯しますよお」



「いやっ……ひい……」

捨てられた……愛していた男だけでなく、故郷からも……絶望が彼女の感覚を鈍くし、男立ちのたけり狂う性の狂乱が遠くの国で起きている夢のように思えるほど、激しい眩暈が襲う。

「やめ……やめて……許して……ゆるッ……んはッ」

「ウッ！でる！こっちむけ！顔ッ！顔ッ！ぬうう！」  
「あああ～パイオツすげえ！こいつのパイオツすげえヌケるう！オウッ！」

ガタガタと震えるしか出来ない貧弱な女に、容赦なく精液を浴びせかける男達。けして許されない、見逃してもくれない欲望のケダモノたち。

世界を覆う魔物たちなんかより、はるかに醜悪で恐ろしい生き物。自分より醜く弱いものなら、無限に残酷になり、ワガママな欲望をぶちまける生き物。

「あッあう……ああ……わたし……私ッがっ……ああ……」

それは自分だと今更気がついた。素直になれなくても、自分は美しいから、どんなにそっけなくしても周りにはちやほやしてくれる。

醜い男に貢がせたり、地味な妹を罵ったり、ただ綺麗な外見を傘に着てひたすらにワガママだった自分。

もうすべてが遅すぎたことに、デボラは気がつき始めていた。ようやく素直になれそうな男に出会えたのに……

「あうっ……ゆるッゆるして……あうっあッあうっ……」

美しさは罪である。数日前まで美しく彩られた花束が、道端に捨てられている。

蟲がたかり、自然に分解され、粉々になって、その美しさがなくなるまで……それが美しかったことを許される事は、決してないのである……。

END

SS by 辻善







## ホントの気持ち

日は暮れて、人も殆どは帰宅しているある学校の一刻……。教室の照明は殆どが落とされ、辺りは静寂の闇に包まれていた。しかし、学校外れにある体育倉庫ではそんな空気とは正反対の、異様ともいえる様な熱気に包まれ、無数の男子生徒達が目を血走らせていた。そんな彼らの中心にいる女生徒、成瀬順はまるで子犬の様に震えている。

「俺え……前から成瀬の事好きだったんだよなあ……へへへ……」

「ああ…、これが女の子のおまんこ……おっぱい……ああ……」

「ちんこっ、俺のっ、ち、ちんこっ、握ってくれよお…！」

男子生徒は、勃起した自らのペニスに手を添えて彼女に向けていた。鈴頭からは、だらだらと先走り汁が糸を引きながら、地面に零れ落ちていた。

「や……あ……い……っ。 いや……っ」

成瀬順は、元来の大人しい性格と、今日の前で繰り広げられている光景による戸惑いから、いつも以上に声は小さく、うち震えていた。男子生徒のペニスから発せられる悪臭に、何度も嘔咽もしている。しかし、そんな彼女を気遣う素振りすら見せず、男達は自らの欲望を彼女に向けている。

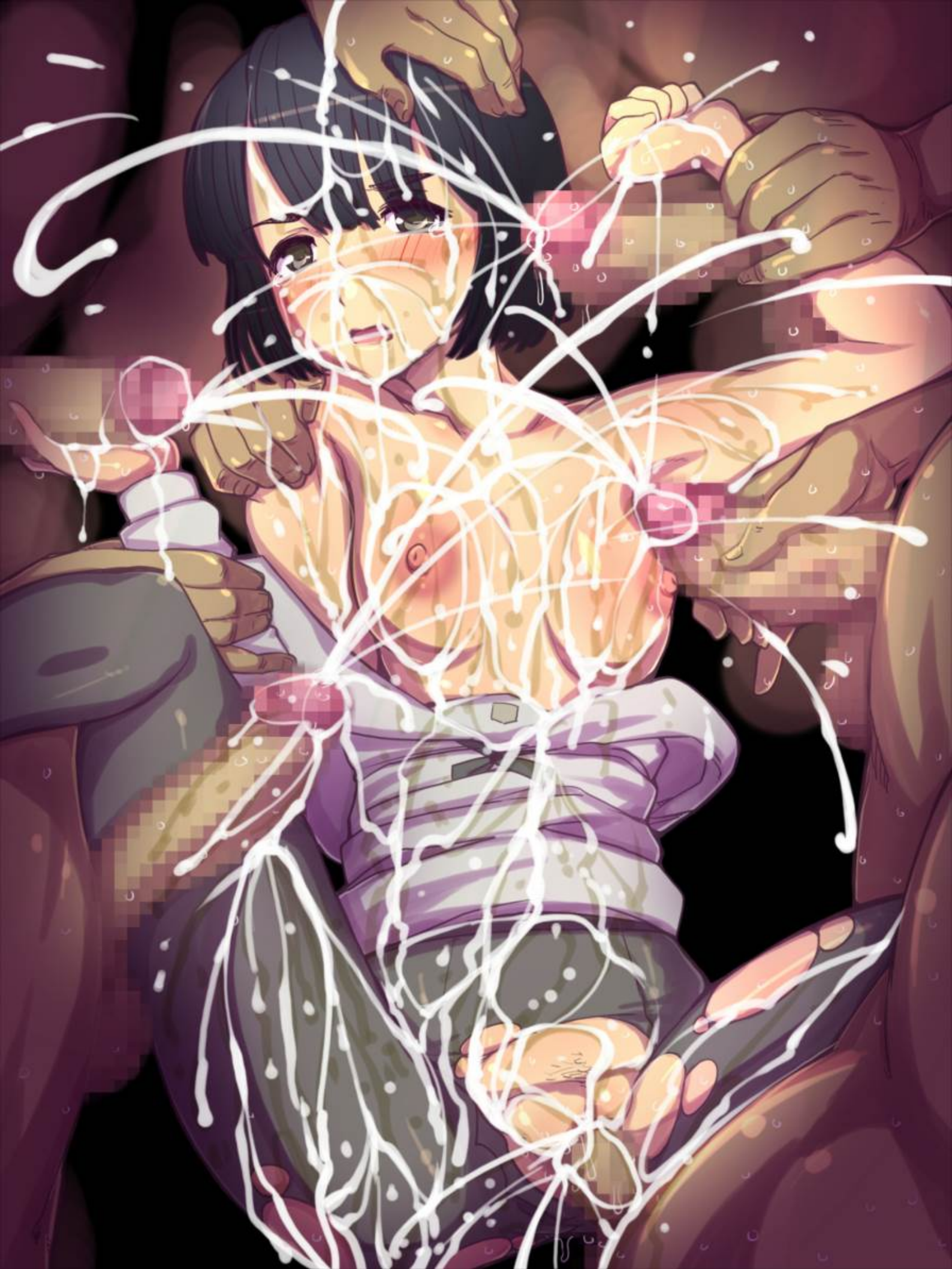
「だ……め……っ……やめ……て……ひっ!？」

必死に声を張り上げ、男子生徒に懇願する成瀬順であったが、その願いを踏みにじるかの様に、男子生徒の一人がペニスを無理矢理握らせるのだった。

「あああ……このプルプルと震える手……中々気持ちいい……」

成瀬順の手に勃起したペニスを握らせ、男は腰を乱暴に振る。嫌がる彼女に無理矢理自分の欲望をぶつけている征服感から、男の表情は快楽に満ちていた。それを見ていた周りの男子生徒も、遂に緊張の糸が切れたのか、成瀬順の体に、自らの欲望をぶつけんが為に飛び掛かるのであった。







「あ……がっ……！ ひ……ぎ……っ！ …っ…あっ……あ！！」

成瀬順を、経験した事のない痛みが襲う。彼女の頭の中は真っ白になり、痛みと息苦しきで、まともな思考が出来ずにいた。しかし、そんな彼女を気にも留めずに、男子生徒は次々と彼女の体を汚していくのだった。

彼女の小さい両手には溢れんばかりの大ききのペニス、彼女の口には乱暴にペニスがぶち込まれ、彼女の幼さの残る体は、まるで二の腕と見間違える程に膨張したペニスが、無慈悲にも彼女の体を串刺しにしていたのだ。

「あっ……あっ……がっ……！ ……い……や……っ！」

息も絶え絶えになりながら、彼女は声にもならない声を上げる。男達の乱暴な腰遣いに彼女は何度も何度も咽び、また、肉と肉がぶつかる音、体液と体液が濃密に絡み合う音が合わさり、体育館倉庫には卑猥な音が木霊し続けるのであった。

「ああ……いいっ…いいっ…これがおまんこ…これがセックス…！」

「あああっ…あの成瀬が俺のちんこ舐めてる…美味しそうに舐めてるよお！」

「俺のちんこ気持ちいいっ？気持ちいいよねっ…いっぱい中に出してあげる！」

男子生徒は身勝手な欲望を彼女に対しぶつけ続ける。まるで、獣のような性欲を、成瀬順の幼い体に対しぶつけているのだ。

男子生徒の腰遣いは衰える事を知らず、どんどんと動きは早くなっていく。すると、成瀬順の体を貫いていたペニスが一段と大きく膨張する。

「はあはあはあ……もう出るっ…出る出る出るう！！！！」

成瀬順の身体を、男の醜く汚れた性が満たしていった。



「あ…っ！…あっ……！ んんんんっつっ！！！」

あれからどれ程の時間が経っただろうか。成瀬順は、休む間も無く男子生徒から犯され続けていた。身体のあらゆる箇所は、男子生徒から放たれた精液で、白濁に染め上げられていた。彼女の淫らな喘ぎ声が周囲に響き渡る。

「はははっ、最初に比べて成瀬もいい声出すようになったじゃねえか…っど！」  
「あの大人しかった成瀬が、今は俺達のちんこを必死に頬張ってるなんてよお」  
「はあっ…はあっ…口に出すからっ……全部飲めえ…！」

男子生徒は談笑しながら、次々と成瀬順に向かって精液を迸らせていった。彼女の口からは飲みきれなかった精液がゴボゴボと零れ落ち、彼女の身体は熱い体液で焼き焦がれたかのように火照っている。はあ…はあ…と息を切らす成瀬順だったが、彼女に膣には次の男子生徒のペニスが入り付けられ、そして一気に彼女の身体を貫くのである。

「あああああっつっ！！！！ んっ…んっ……っあん！」

身体を大きくビクンと跳ね上がらせ、成瀬順は再び大きな喘ぎ声を上げた。自ら腰をくねくねと動かし、男子生徒のペニスを愛おしいかの様に咥えている。それを見ていた周りの男子生徒も、また再びペニスを大きく勃起させ、彼女の目の前に向かって勢いよく突き出した。

「あんっ…あんっ…もっと……もっとお…んんんっ！…あはあ……」

成瀬順は、目の前に無数にあるペニスに一つ一つキスをしながら、鈴頭からだらだらと垂れている先走り汁をごくんと飲み干した。男子生徒達にとって、彼女は性欲を発散させる道具に過ぎないかもしれない。しかし、それでも自分が必要とされている事に幸福感を感じ……。そして、彼女は男子生徒達の大量の性器を浴びながら笑うのであった。

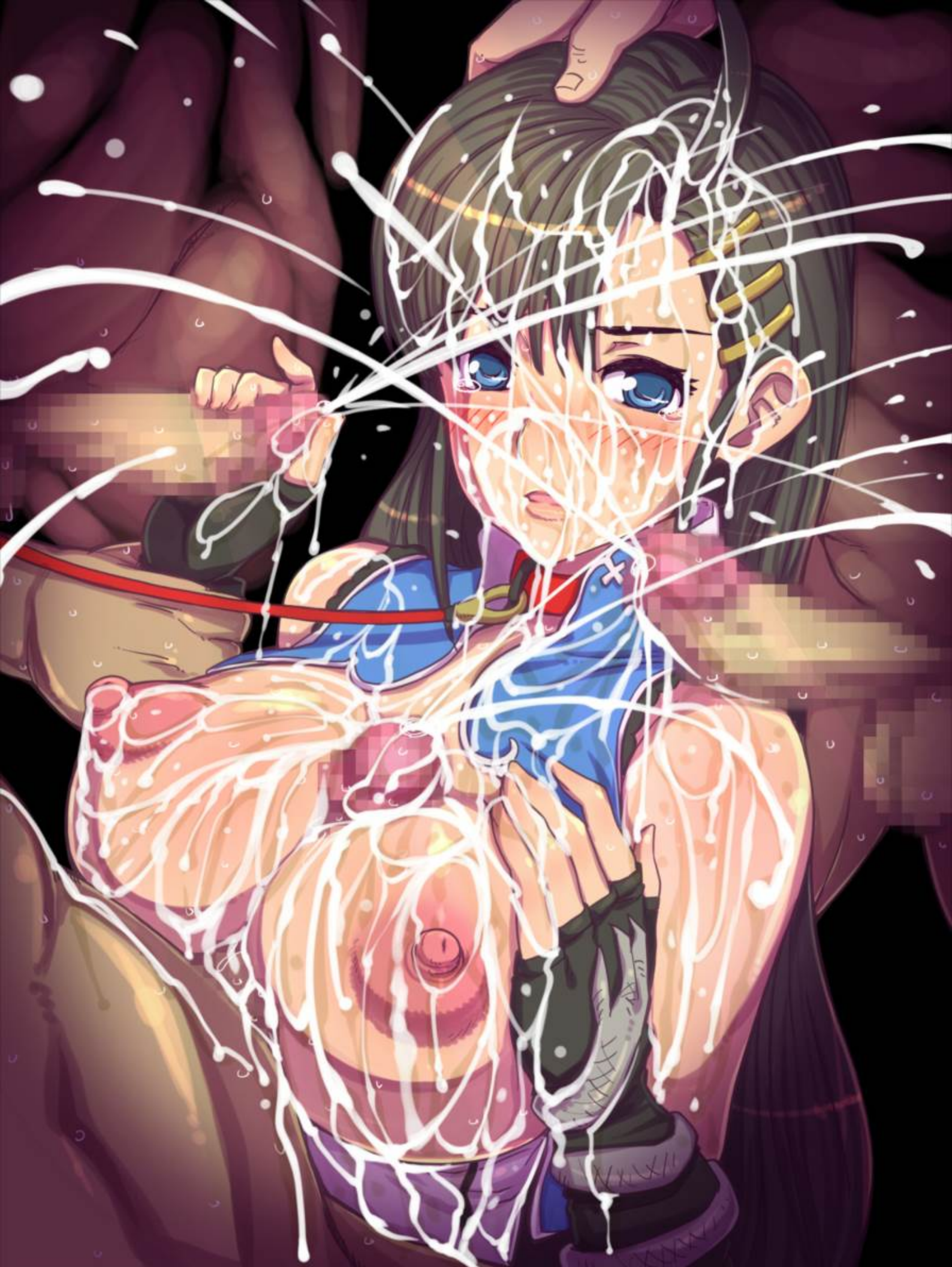
END

SS by クスフィアス









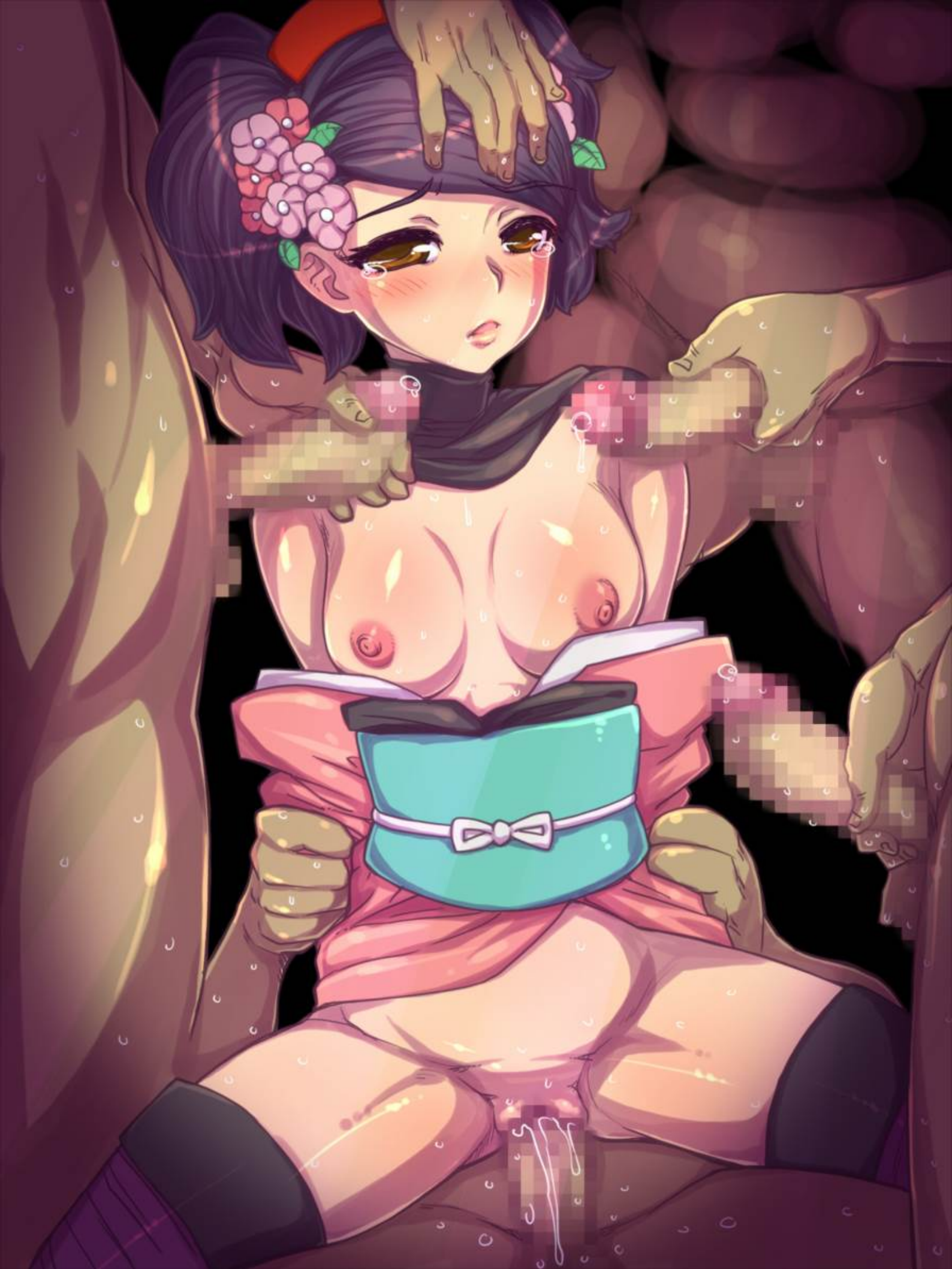




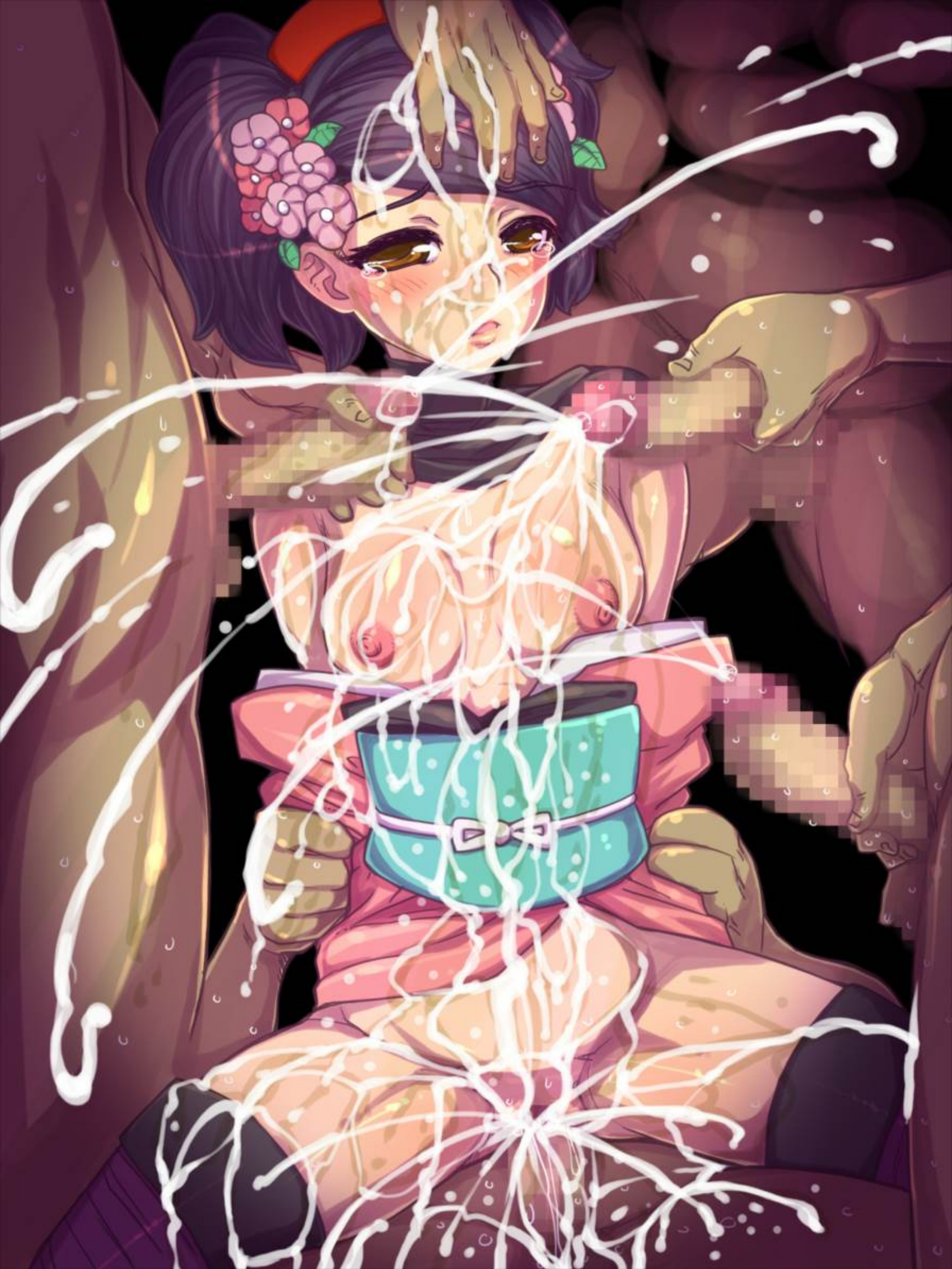












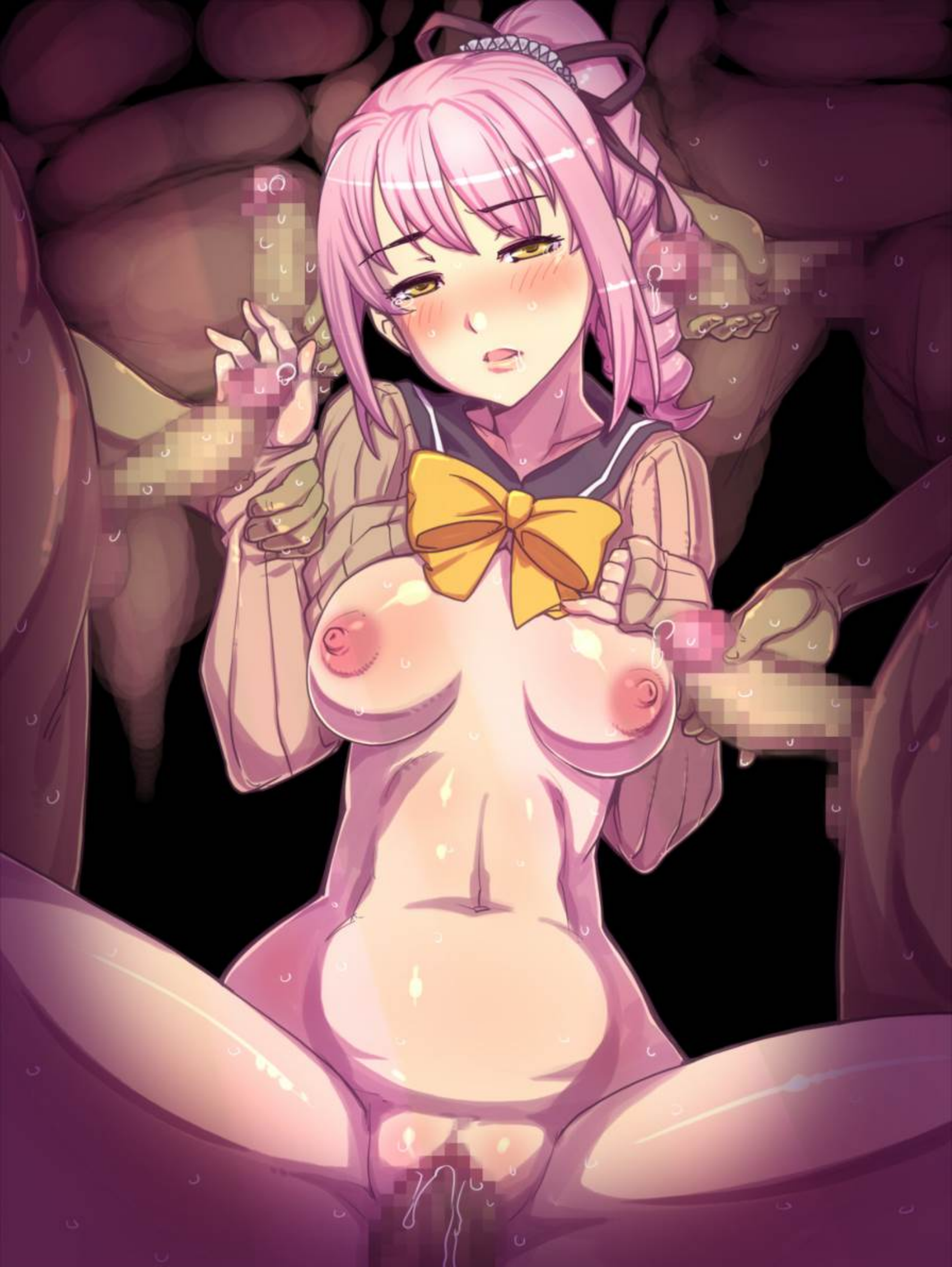




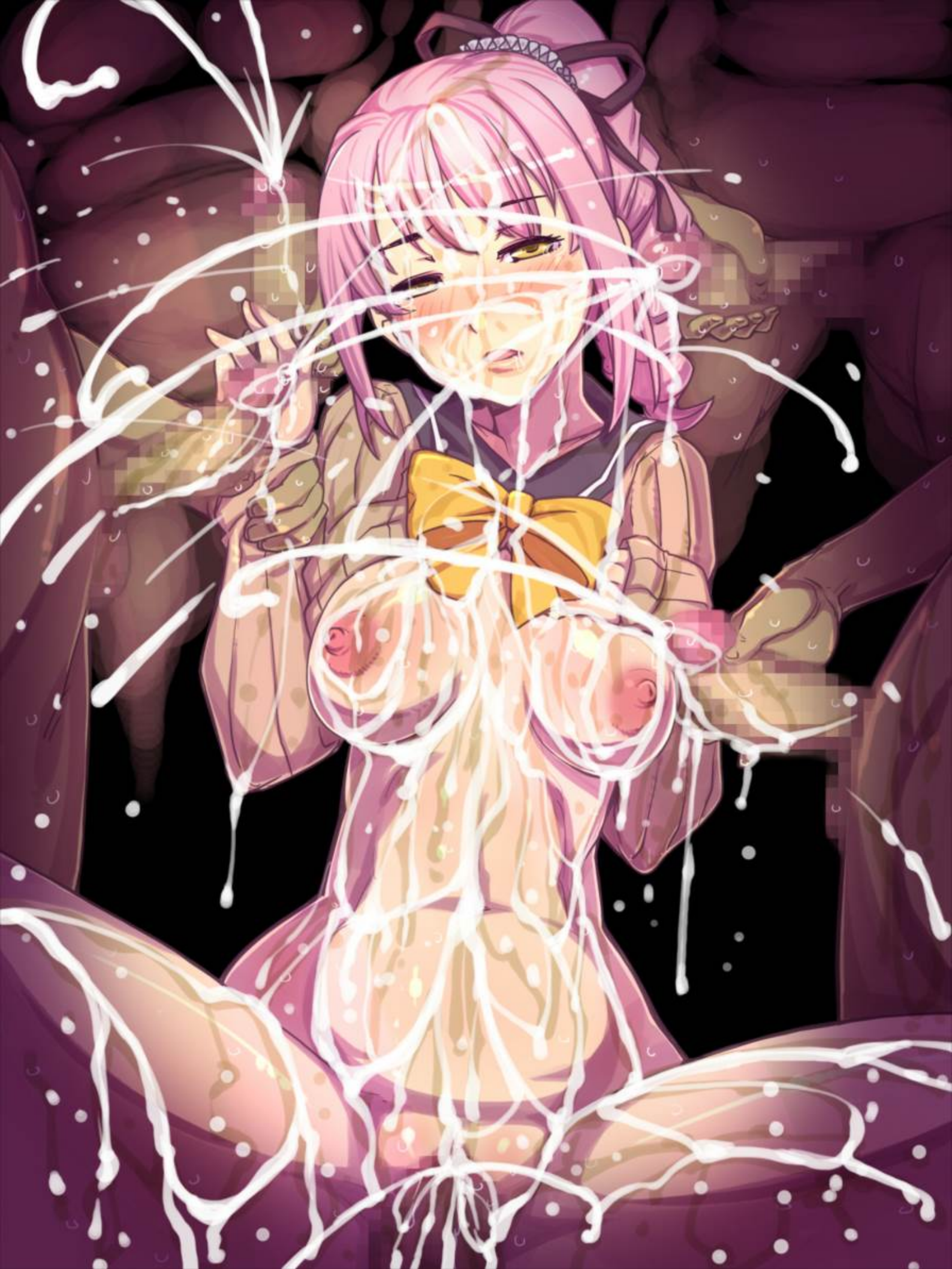




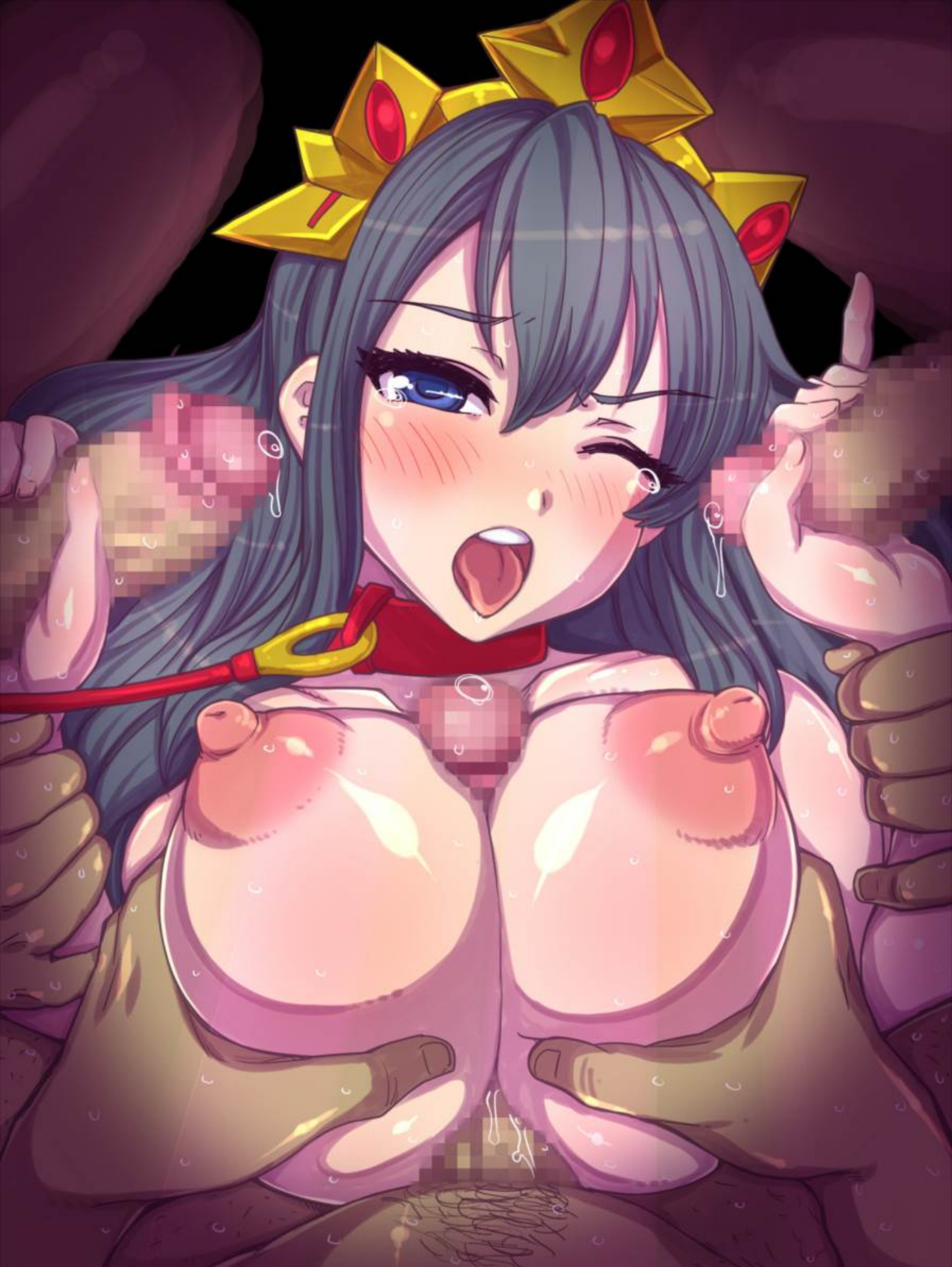














652枚 マリナ・ソフィア

Pick☆Up

# 俺たちへの 誕生日プレゼント！ ～白濁姫と化したお姫様～

「誕生日プレゼントは何がいいか？  
じゃあね・・・賢者モードについて、教えて欲しいわ」

俺達は互いに顔を見合わせて、まるで何か吹っ切れたように  
彼女を押し、服を引き裂き、倒し、そして跨った。

「ちょっ！なにをするのよッ！どいてッ！いやっ！いやああ！」

俺たちは彼女に振り向いてもらいたいが為に尽くしまくった。  
だが彼女の目にはあの醜く平べったいカエルにしか映っていなかった。

貢だけの存在、触れることさえ許されず飼い殺しの日々。  
この無邪気から発せられた言葉を聞いて、俺たちの中で何かが弾けた。

「いやっ！はなしてッ！いやっ！いやああ！ゆるしてっ・・・！アアッ」

出会った時から良いようにあごで使われる日々。  
あの服が欲しいと言われりゃ生活費数ヶ月分のドレスを買わされ、  
遠出がしたいと言われりゃ俺たちが代わる代わる足になった。

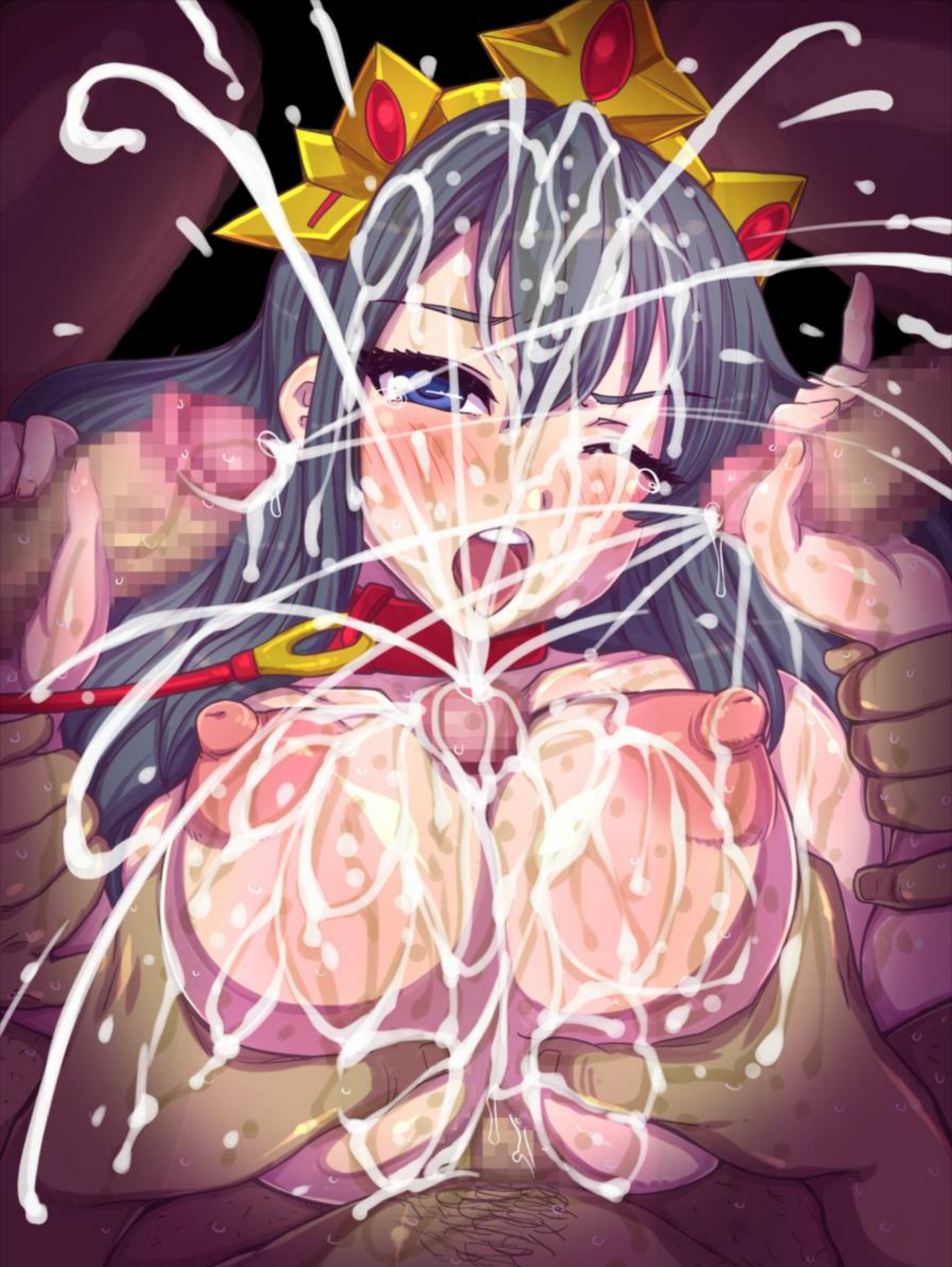
はじめはその無邪気さに癒しを覚えた、しかし男としてすら見てもらえない  
そんな日々は俺たちの心を乾かし、そしてあの言葉でその感情は爆発した。

お望みどおり見せてやろうじゃないか！

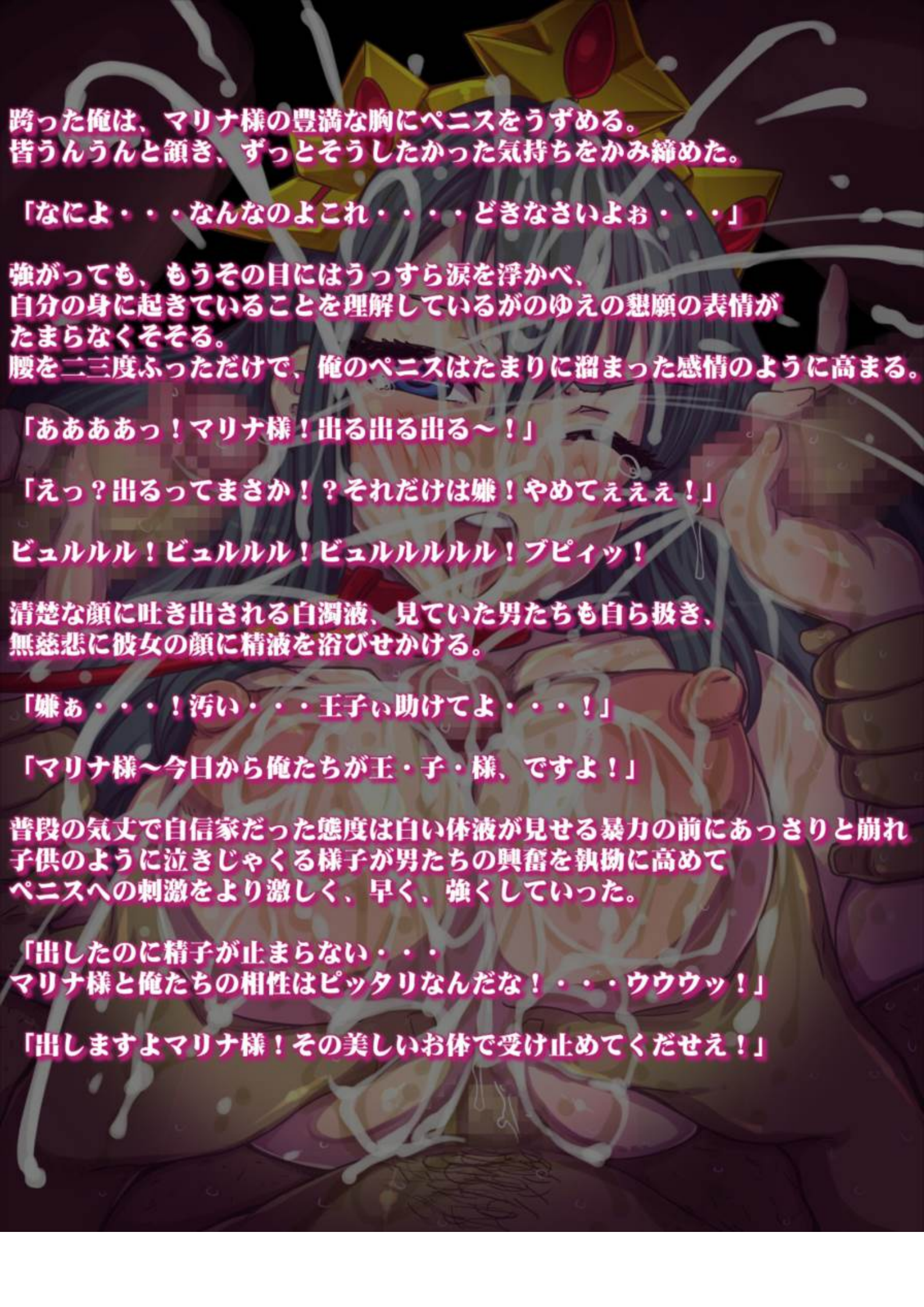
彼女でザーメンを出して出して、出しまくって賢者モードを超えた  
俺たちの大賢者モードを体に刻み付けてやるッ！

姫に手を出せば死刑は免れないだろう、  
しかし捕まるまでに大賢者になるだけの慰み者にしてやるんだッ！









跨った俺は、マリナ様の豊満な胸にペニスをうずめる。  
皆うんうんと頷き、ずっとそうしたかった気持ちをかみ締めた。

「なによ・・・なんなのよこれ・・・どきなさいよお・・・」

強がっても、もうその目にはうっすら涙を浮かべ、  
自分の身に起きていることを理解しているがのゆえの懇願の表情が  
たまらなくそそる。  
腰を二三度ふっただけで、俺のペニスはたまりに溜まった感情のように高まる。

「ああああっ！マリナ様！出る出る出る～！」

「えっ？出るってまさか！？それだけは嫌！やめてえええ！」

ビュルルル！ビュルルル！ビュルルルルル！ブピィッ！

清楚な顔に吐き出される白濁液、見ていた男たちも自ら扱き、  
無慈悲に彼女の顔に精液を浴びせかける。

「嫌あ・・・！汚い・・・王子い助けてよ・・・！」

「マリナ様～今日から俺たちが王・子・様、ですよ！」

普段の気丈で自信家だった態度は白い体液が見せる暴力の前にあっさりと崩れ  
子供のように泣きじゃくる様子が男たちの興奮を執拗に高めて  
ペニスへの刺激をより激しく、早く、強くしていった。

「出したのに精子が止まらない・・・  
マリナ様と俺たちの相性はピッタリなんだな！・・・ウウウッ！」

「出しますよマリナ様！その美しいお体で受け止めてくださいませえ！」



俺達の憤りが白いスープになって、更にマリナ様の体を彩る。  
下品に料理された姫と言うメインディッシュ。  
人生最後の晩餐にはうってつけた。

「ああ～癖になりそうじゃ～」 「どけよ、今度は俺が胸を使って・・・」  
「じゅんじゅんにしてやっからよ」 「見る横の顔、精液まみれだぜ！うへへ！」  
「気持ちいい～」 「おれ、まだでるわ～！でるでるでるうう！」

射精された多量の精液は強烈な臭いを放ち  
大賢姫と呼ばれたマリナの聡明な理性を黄ばんだ濃い白濁液でけがしていく。

「あっ・・・嫌・・・嫌あっ！」

その匂いに顔を背けるように、マリア様が悲痛に叫ぶ。  
しかしその叫びの中の艶やかさに、彼女の中で灯された肉欲の熱を  
俺たちは長く世話をしたが故に、感じ取っていた。

「マリナ様え～ひょっとしてレイプぶっかけて感じてるんじゃないですかあ？  
ん～？おい、マンコ濡れてるなあ！ペニスぶっさして欲しいってかあ？」

「あっ・・・それだけは嫌・・・！許して！何でも、何でもするから！」

「おっ！今何でもするって言ったよね・・・」

「じゃあマリナ様で筆下ろしだ！誰がマリナ様を孕ませるか勝負しようぜえ？」

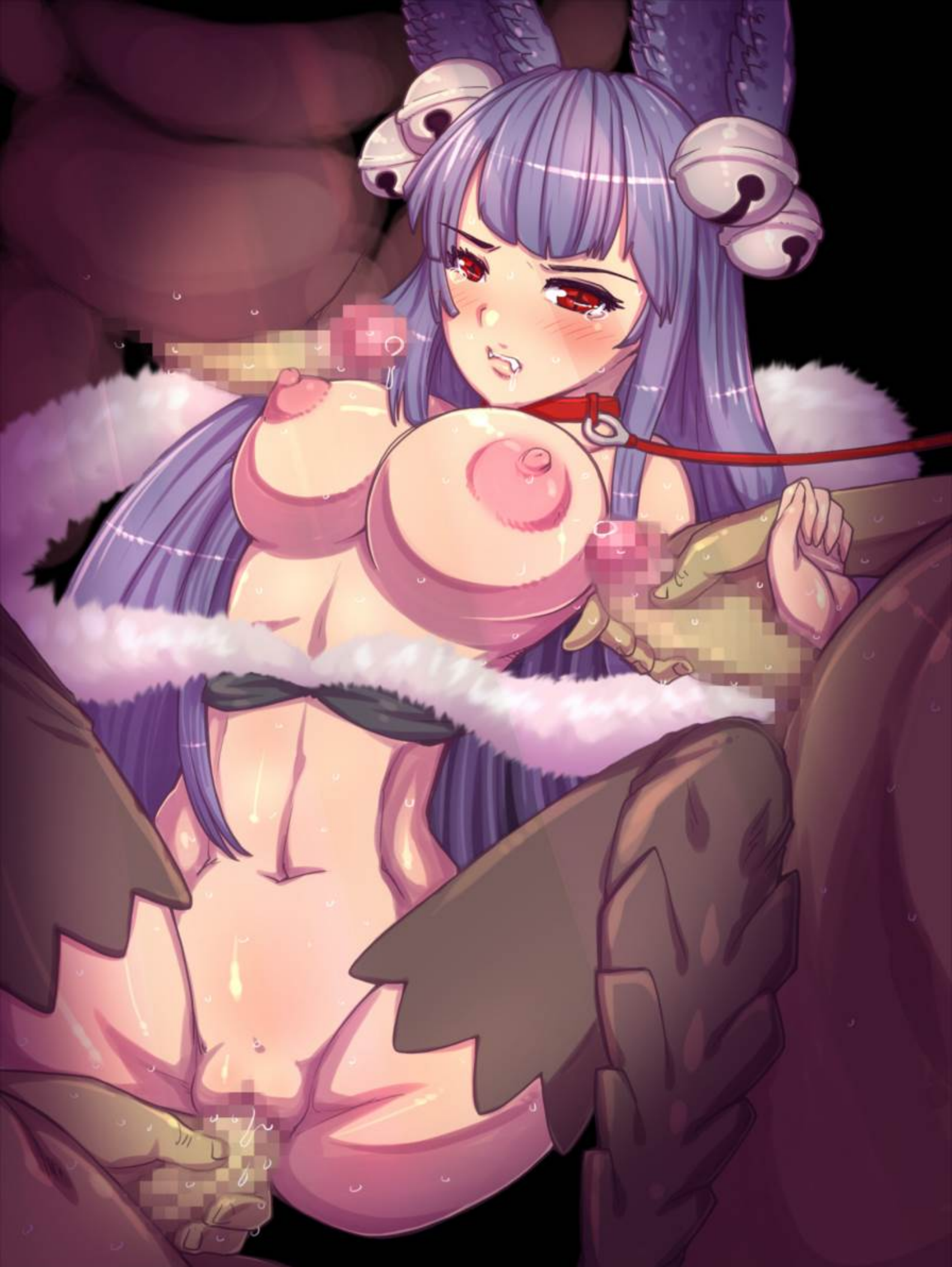
「いいゾ～それ！じゃあぶち込んでやるぜ！」

マリナ様の目から希望の光が消え、力なく開かれた唇から唾液が漏れる。  
俺たちが大賢者になるより先に、姫の方が先に、悟ってしまったようだ・・・

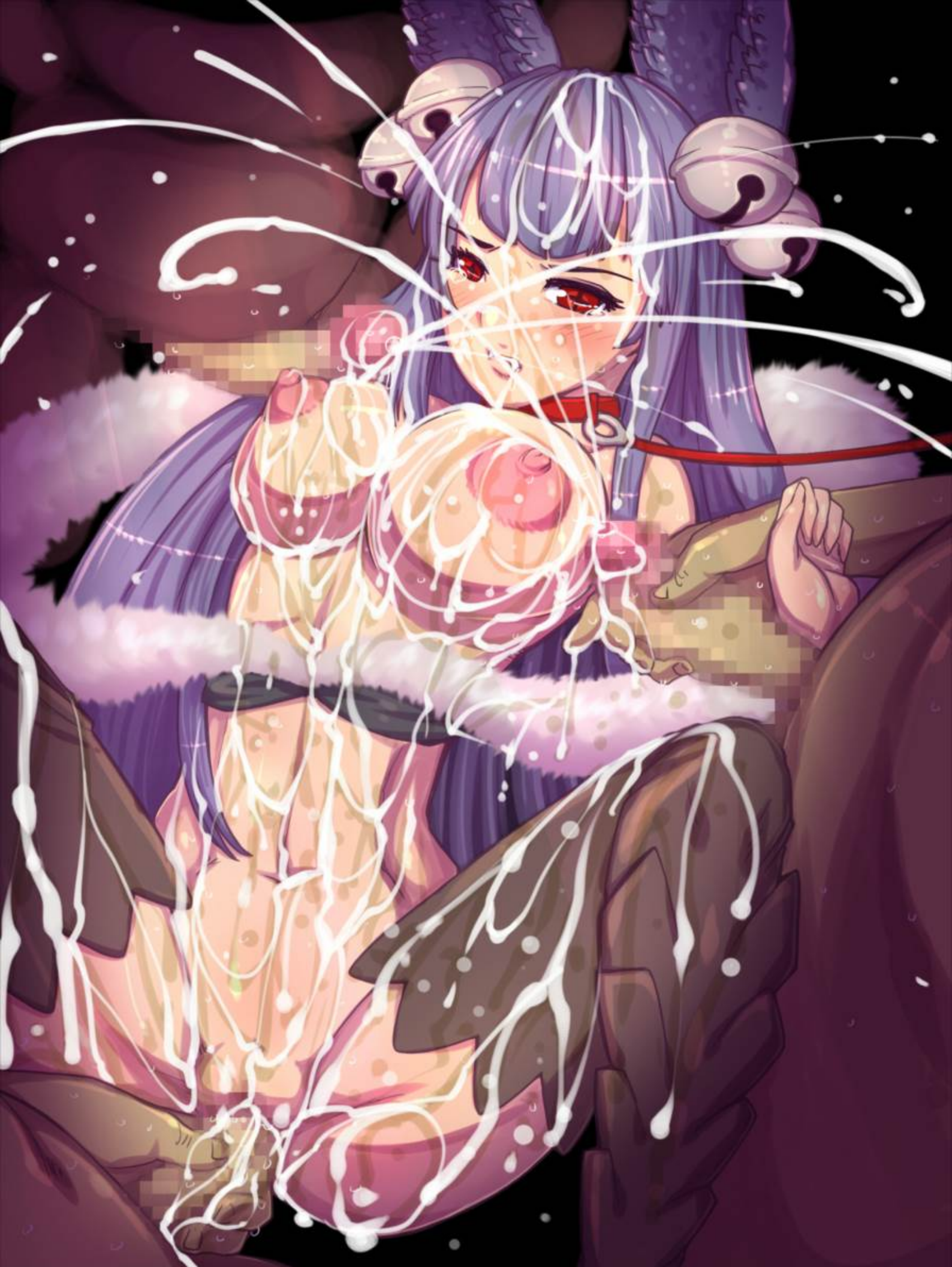
END

SS by PYU









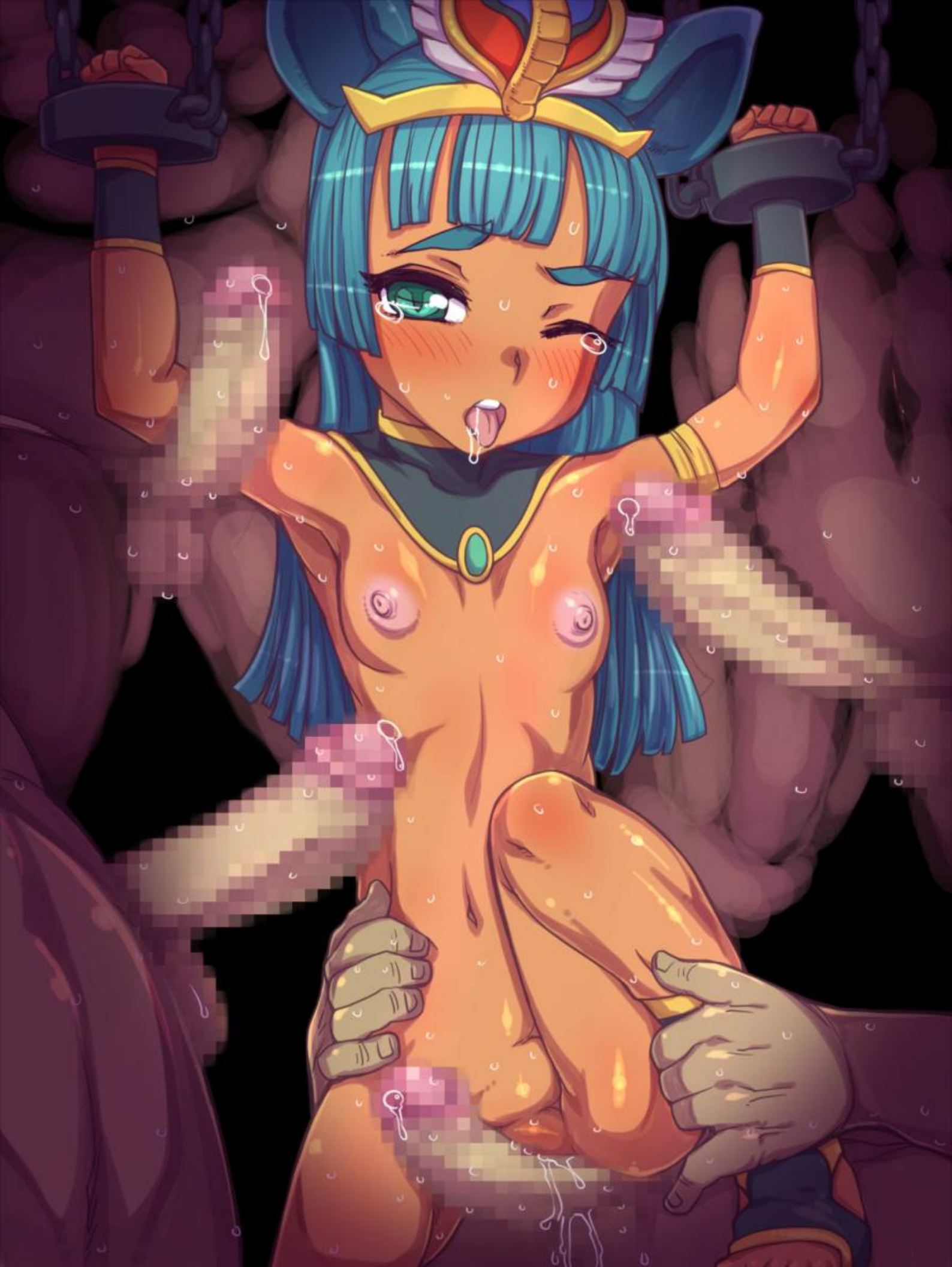




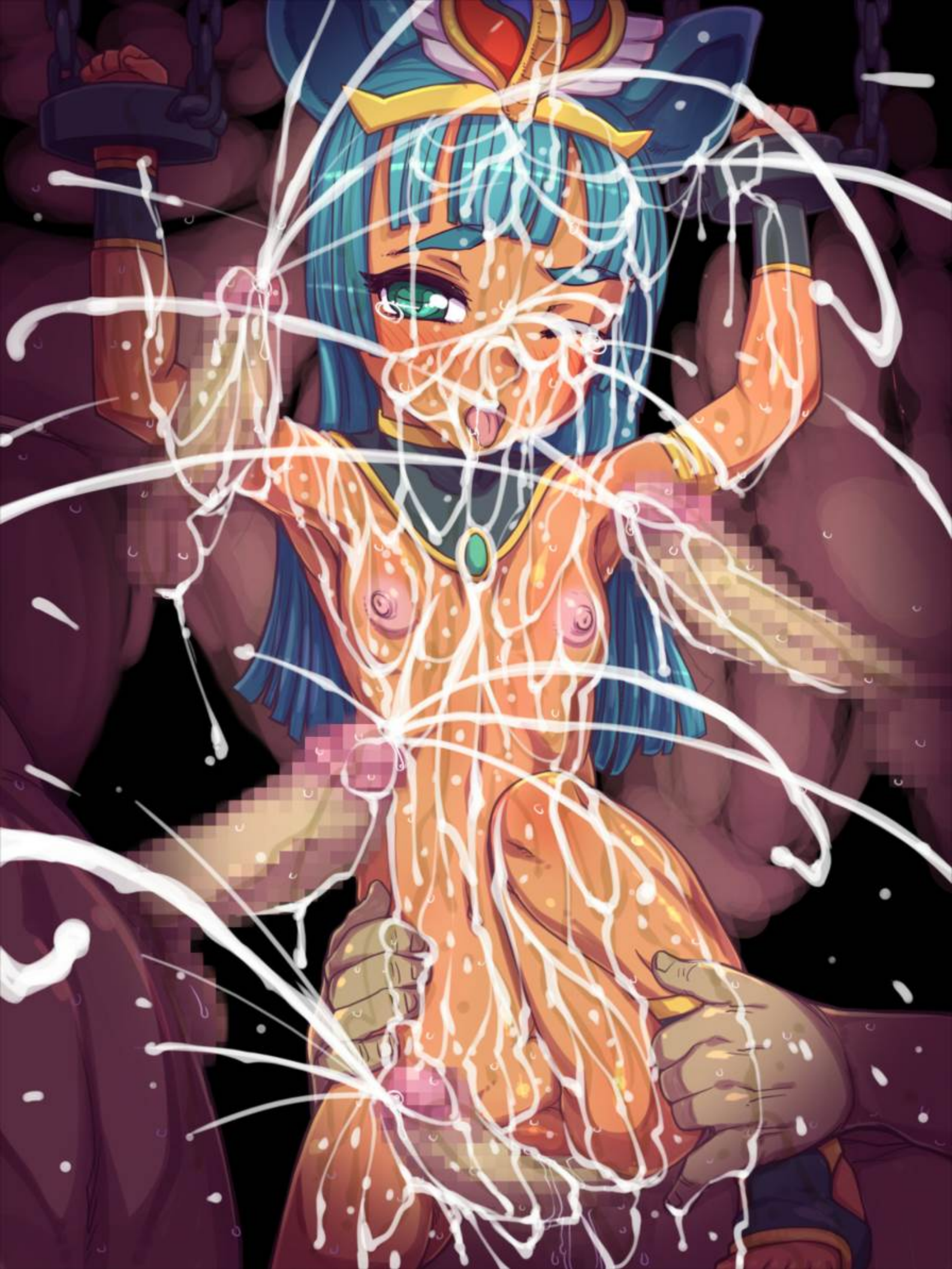




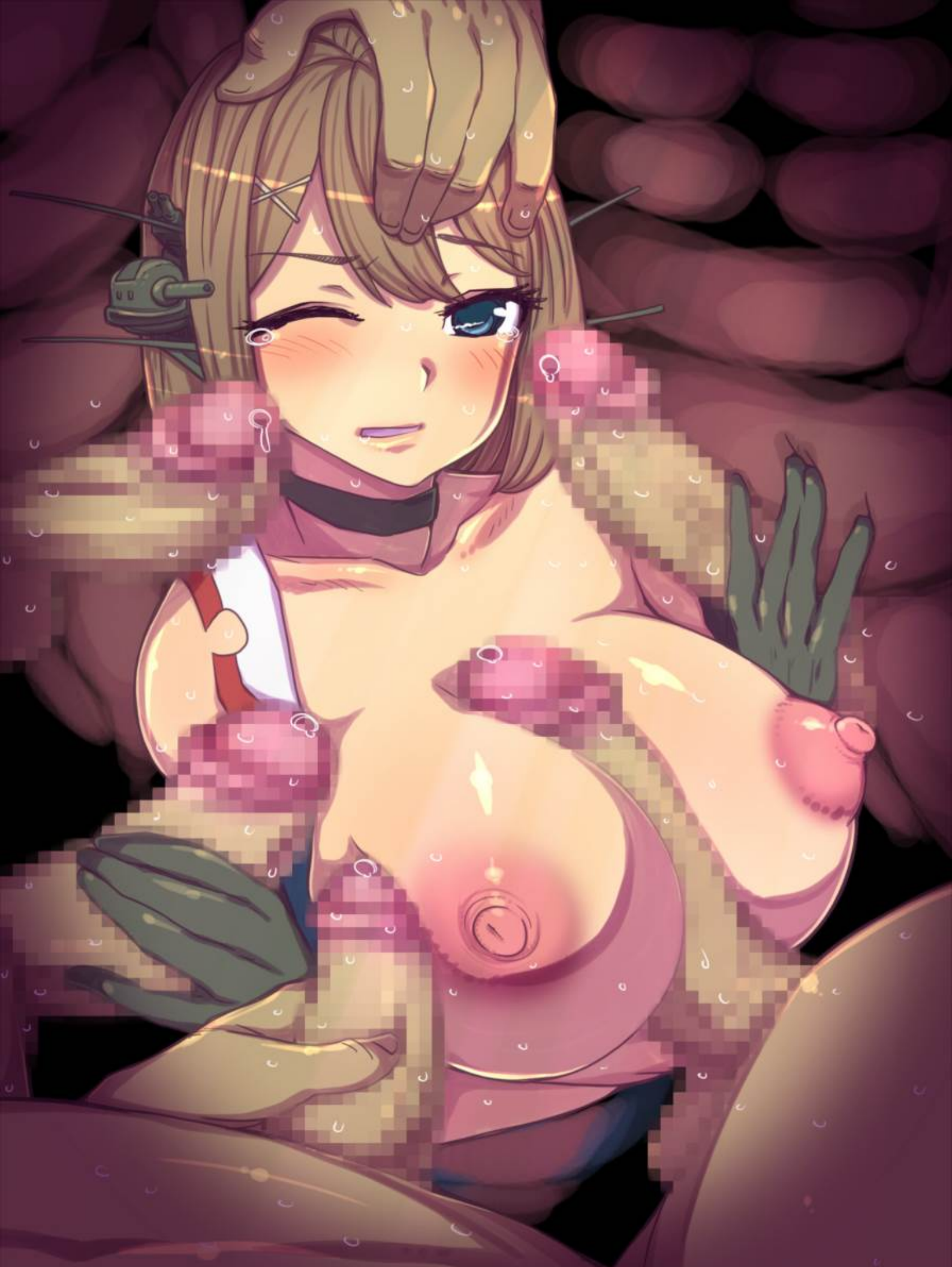




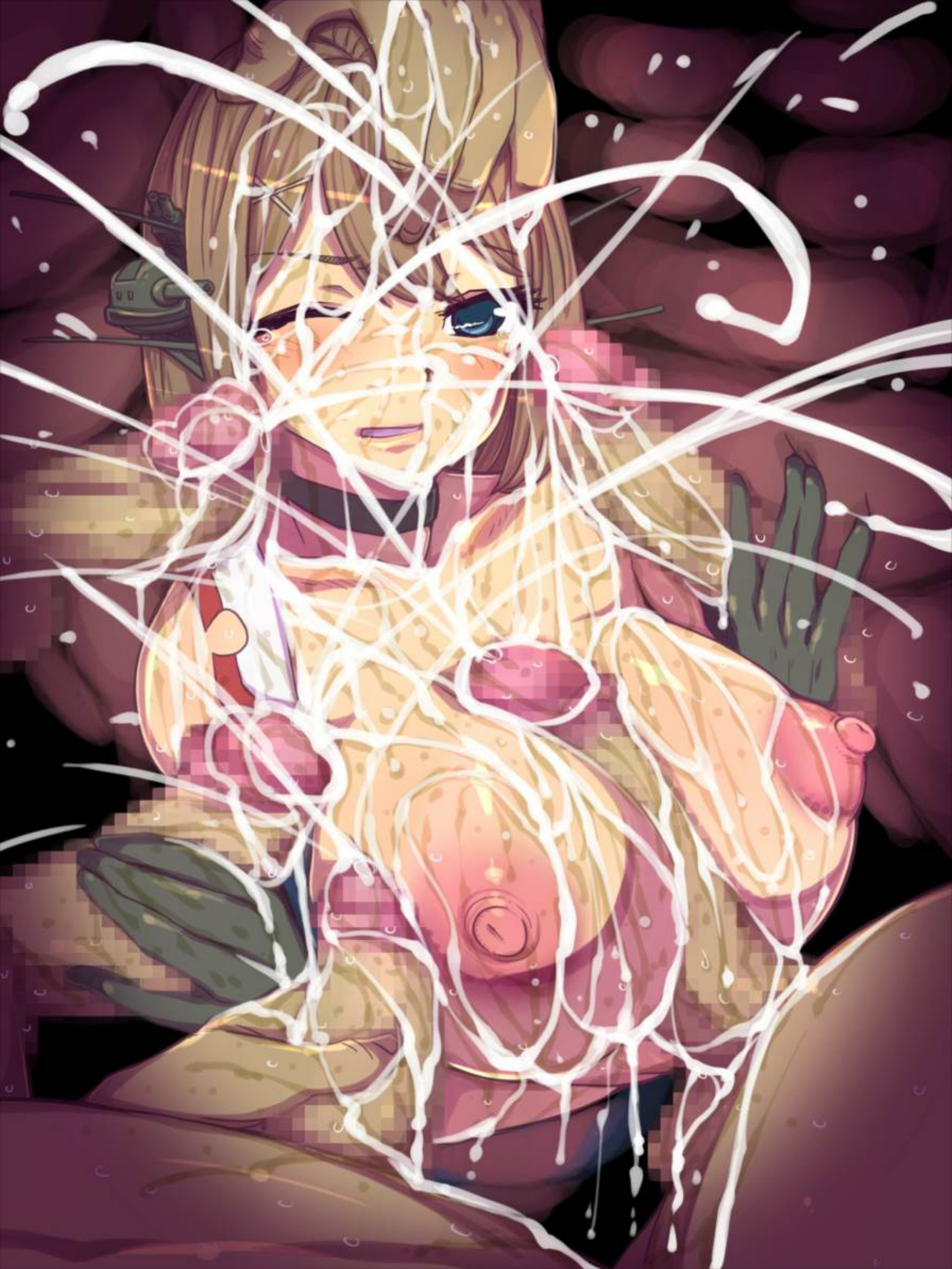








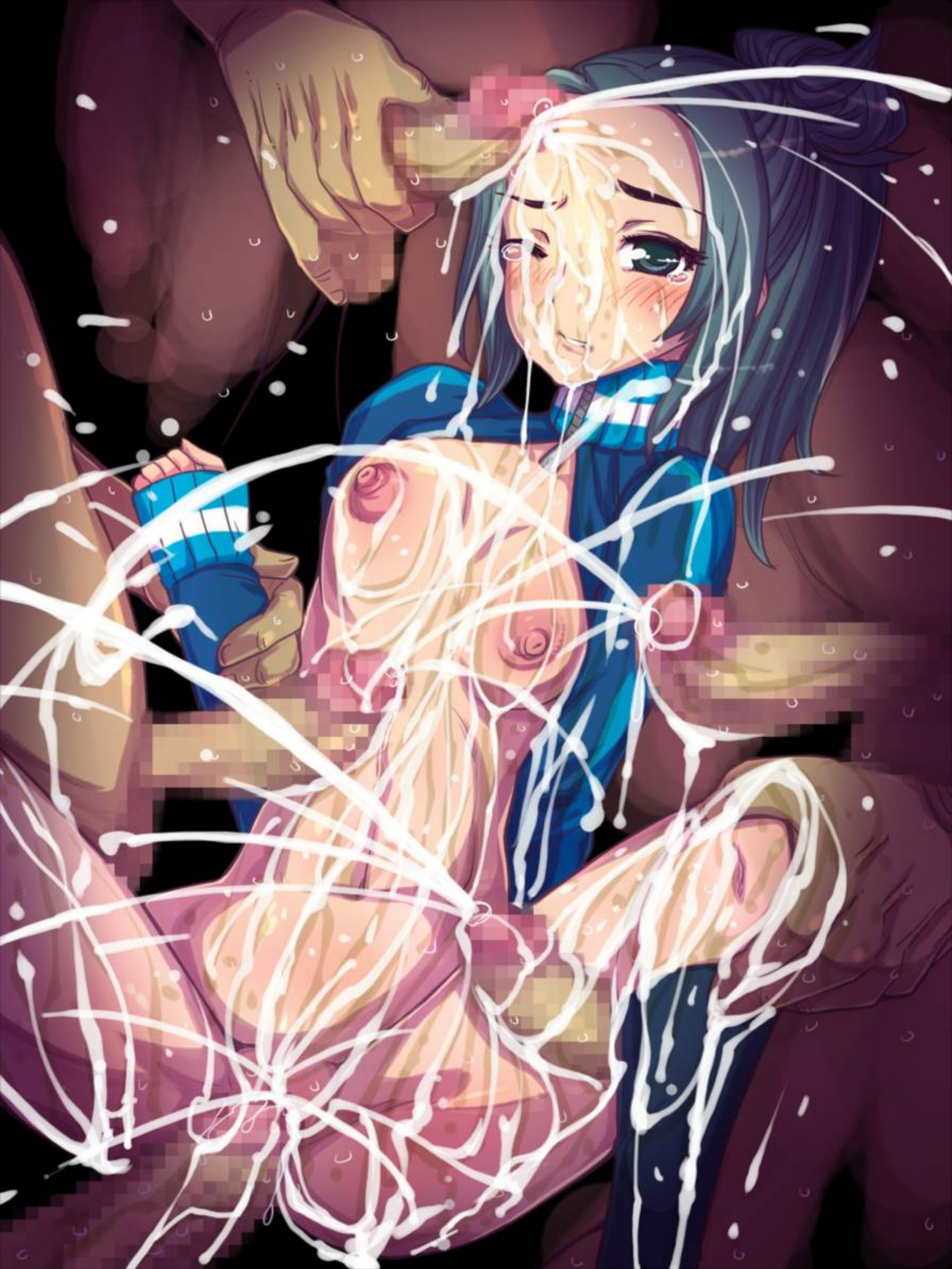








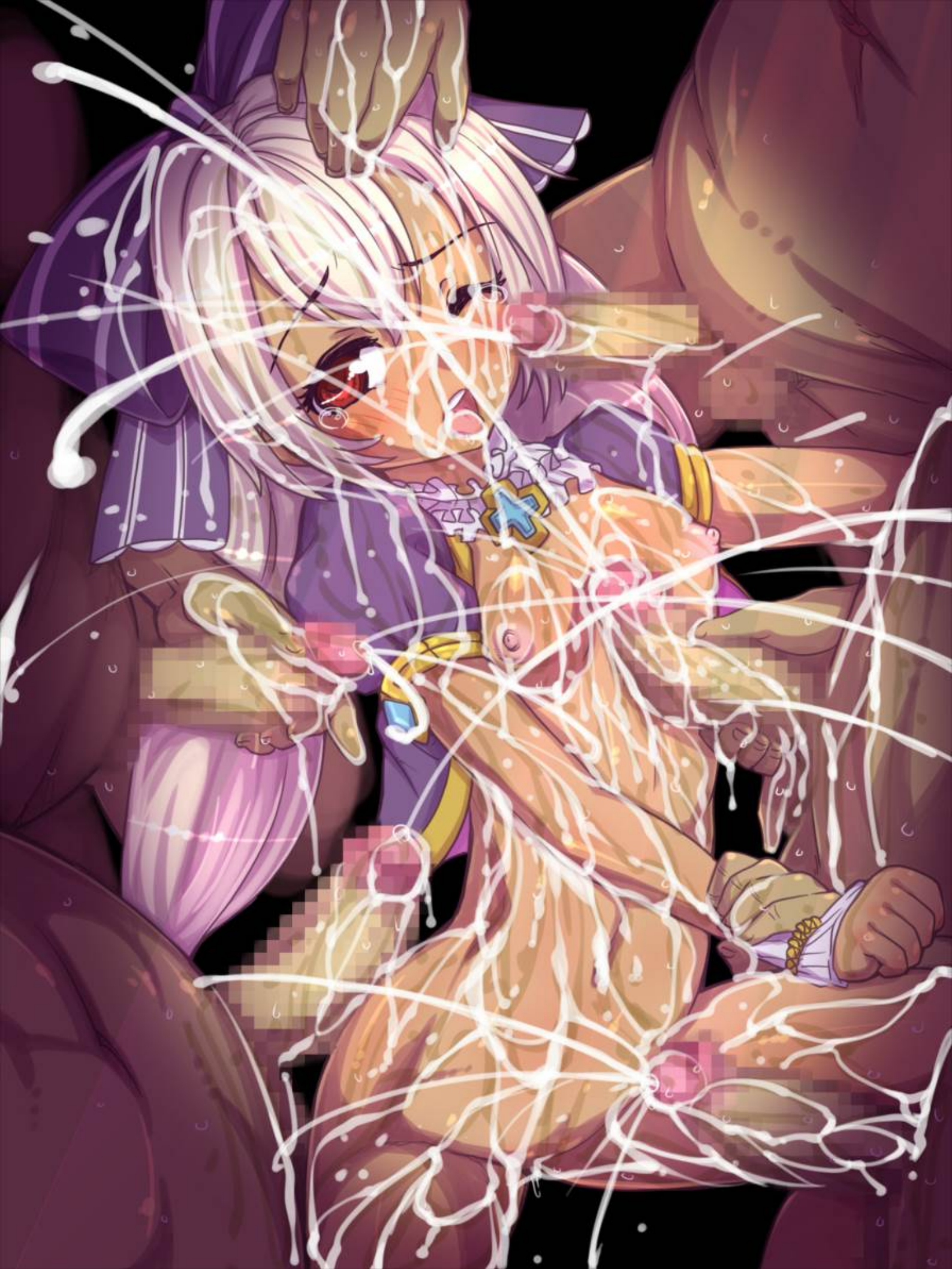








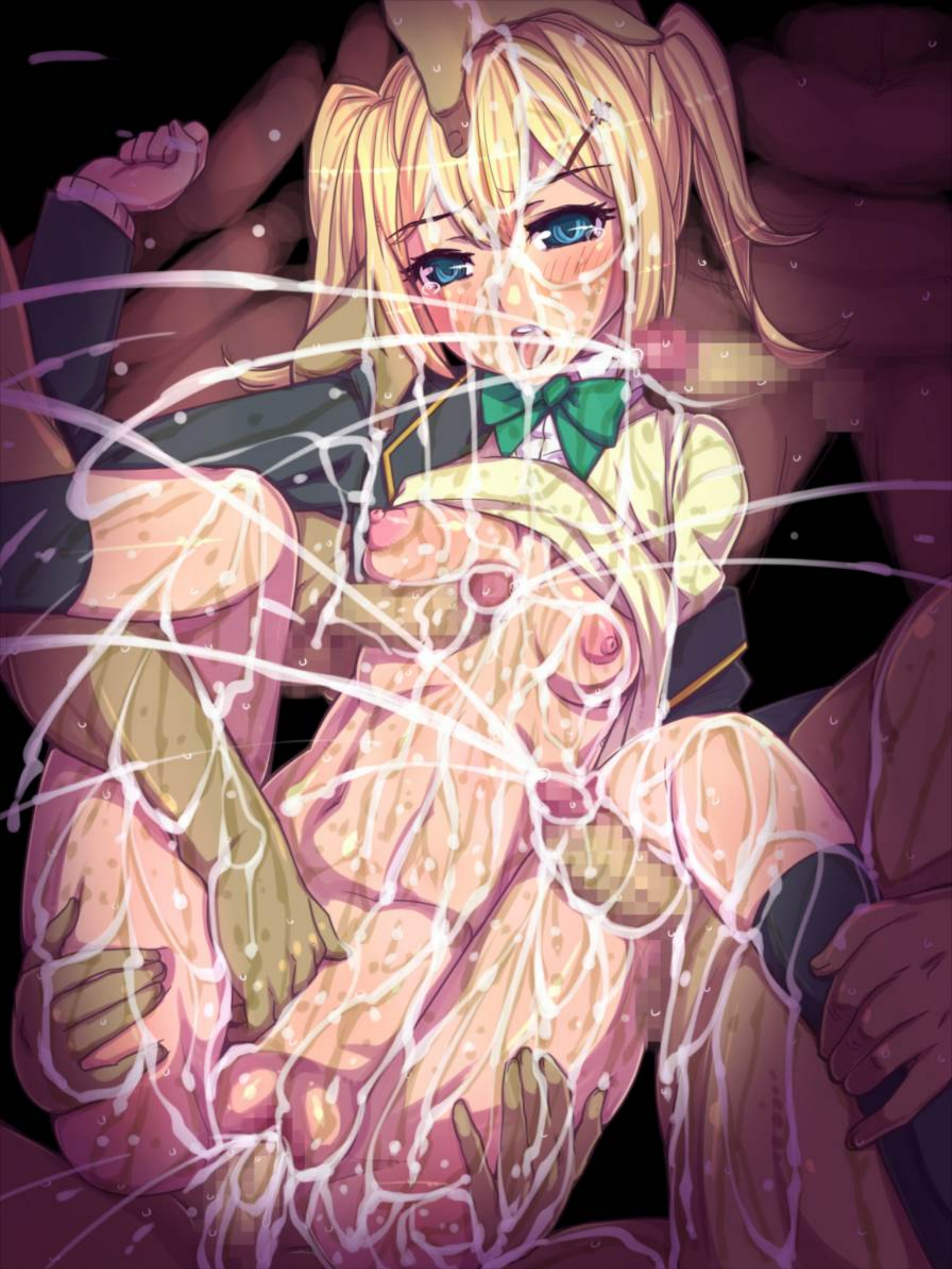




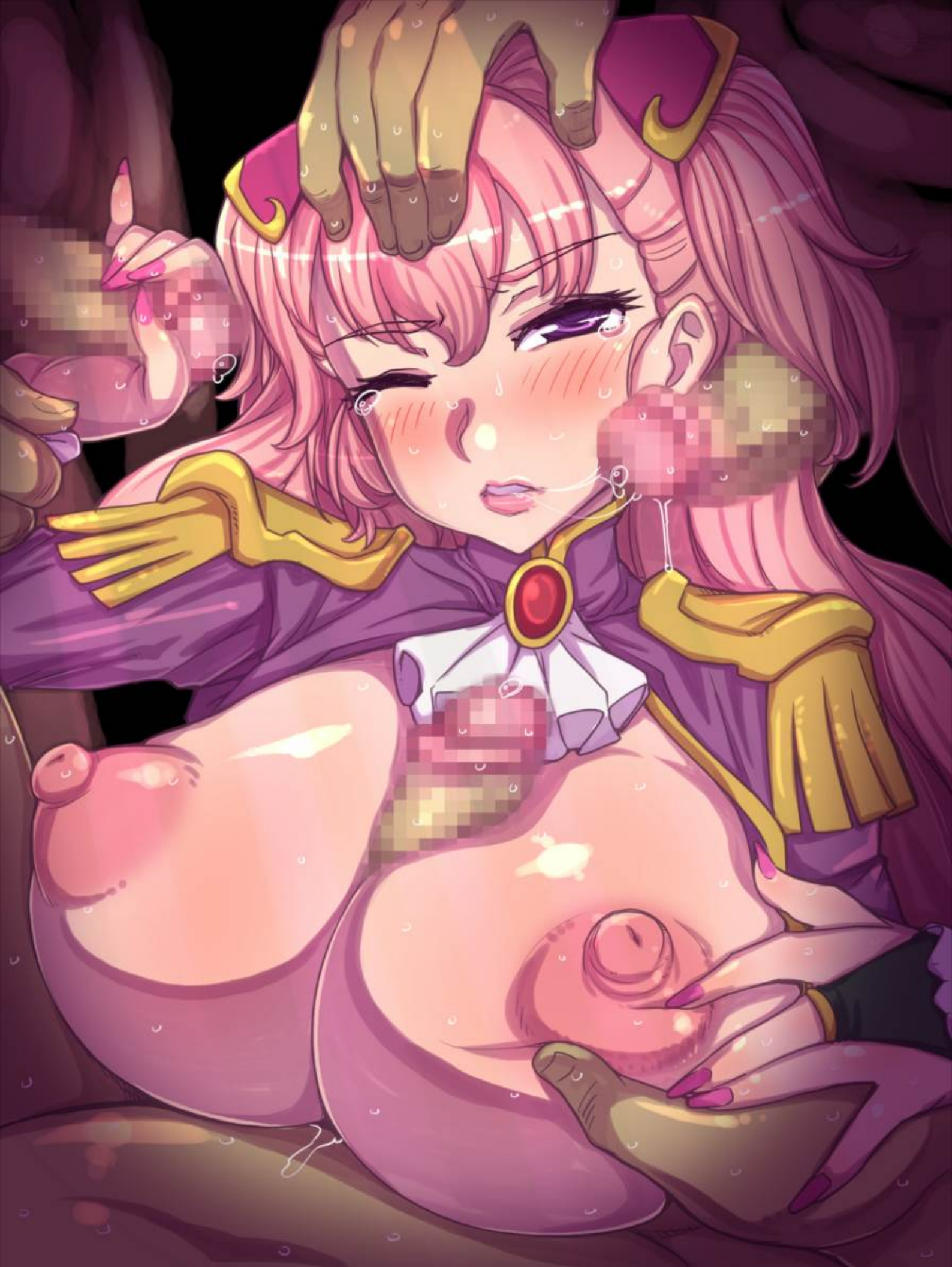




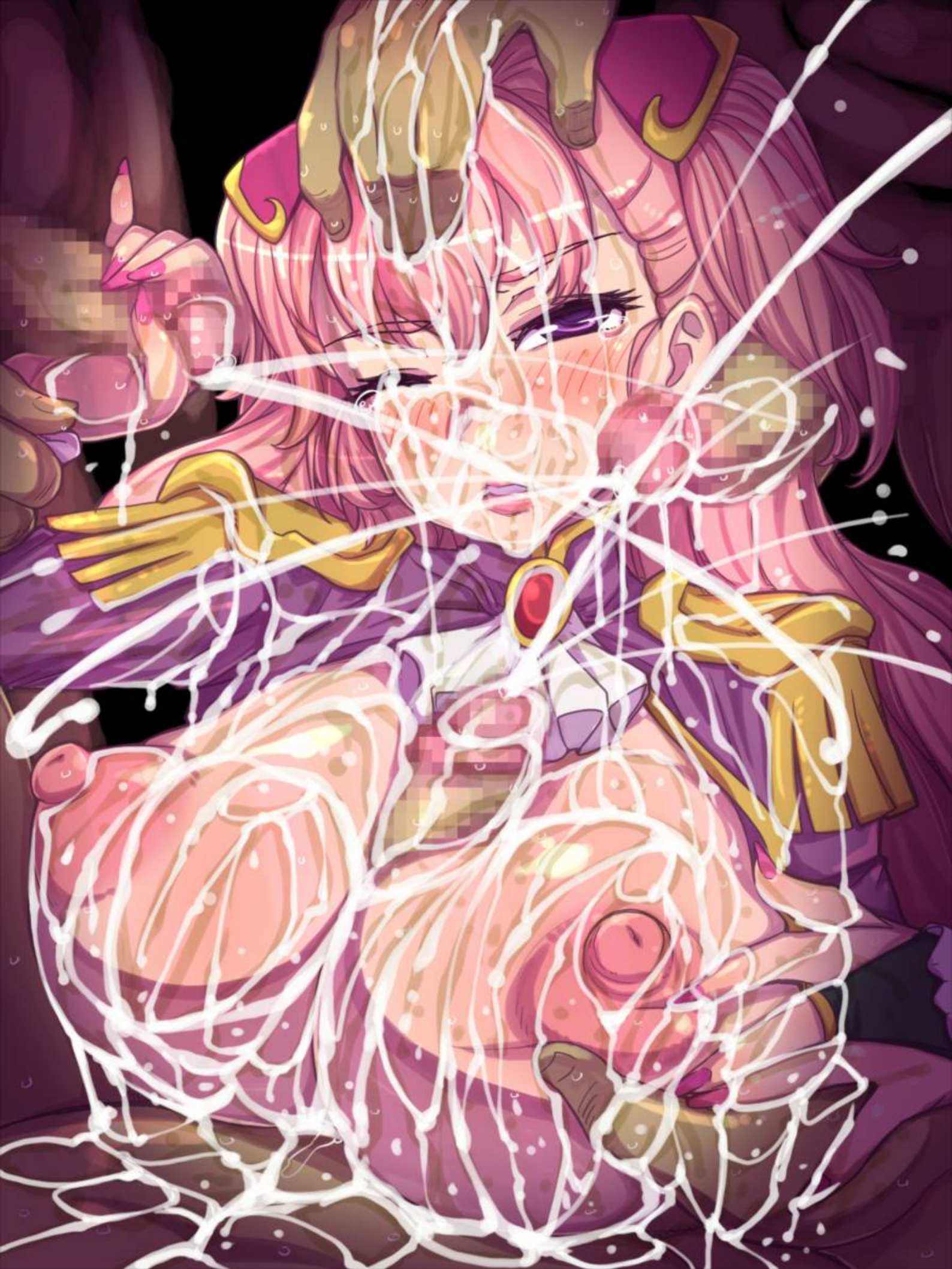




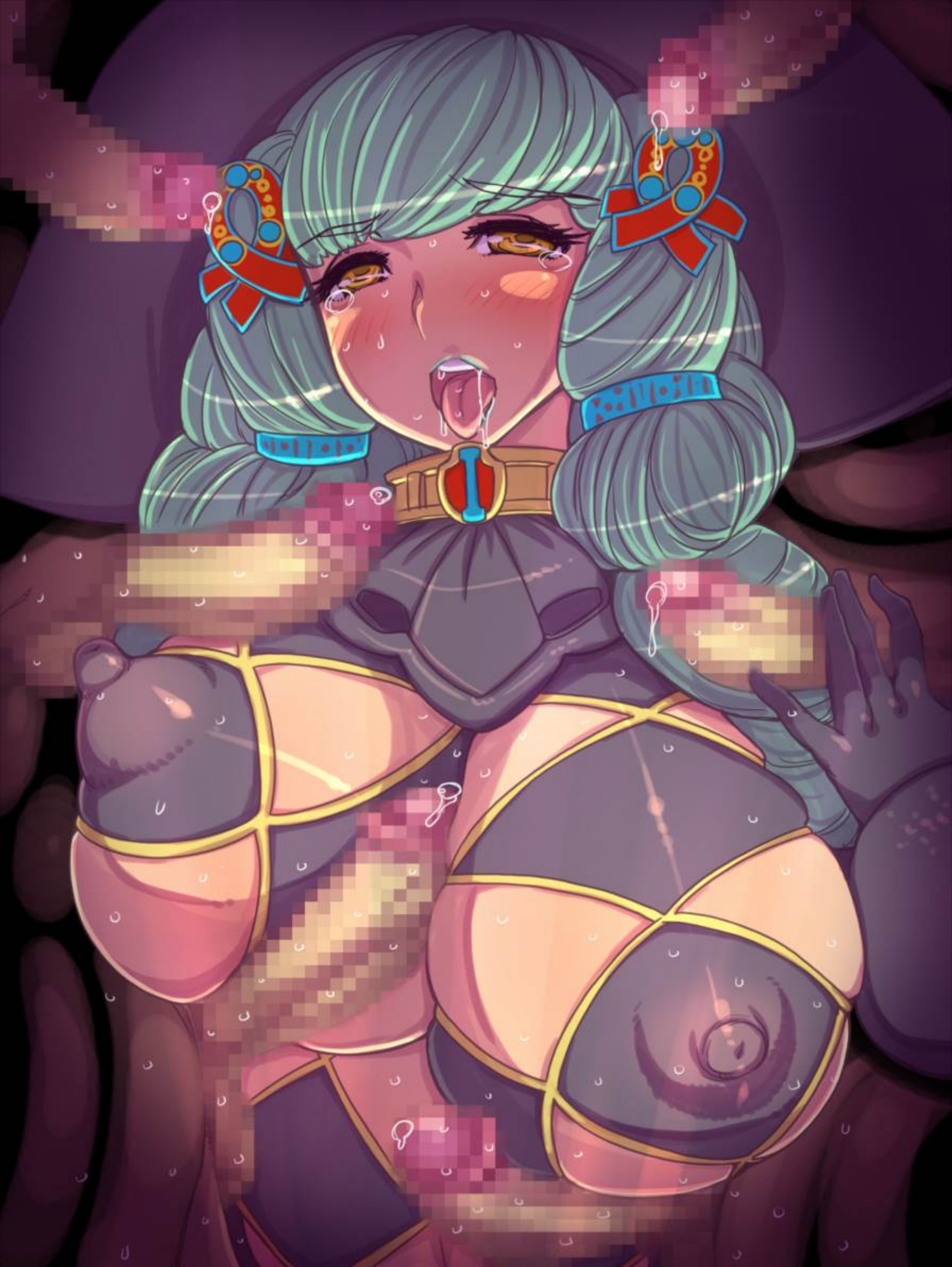




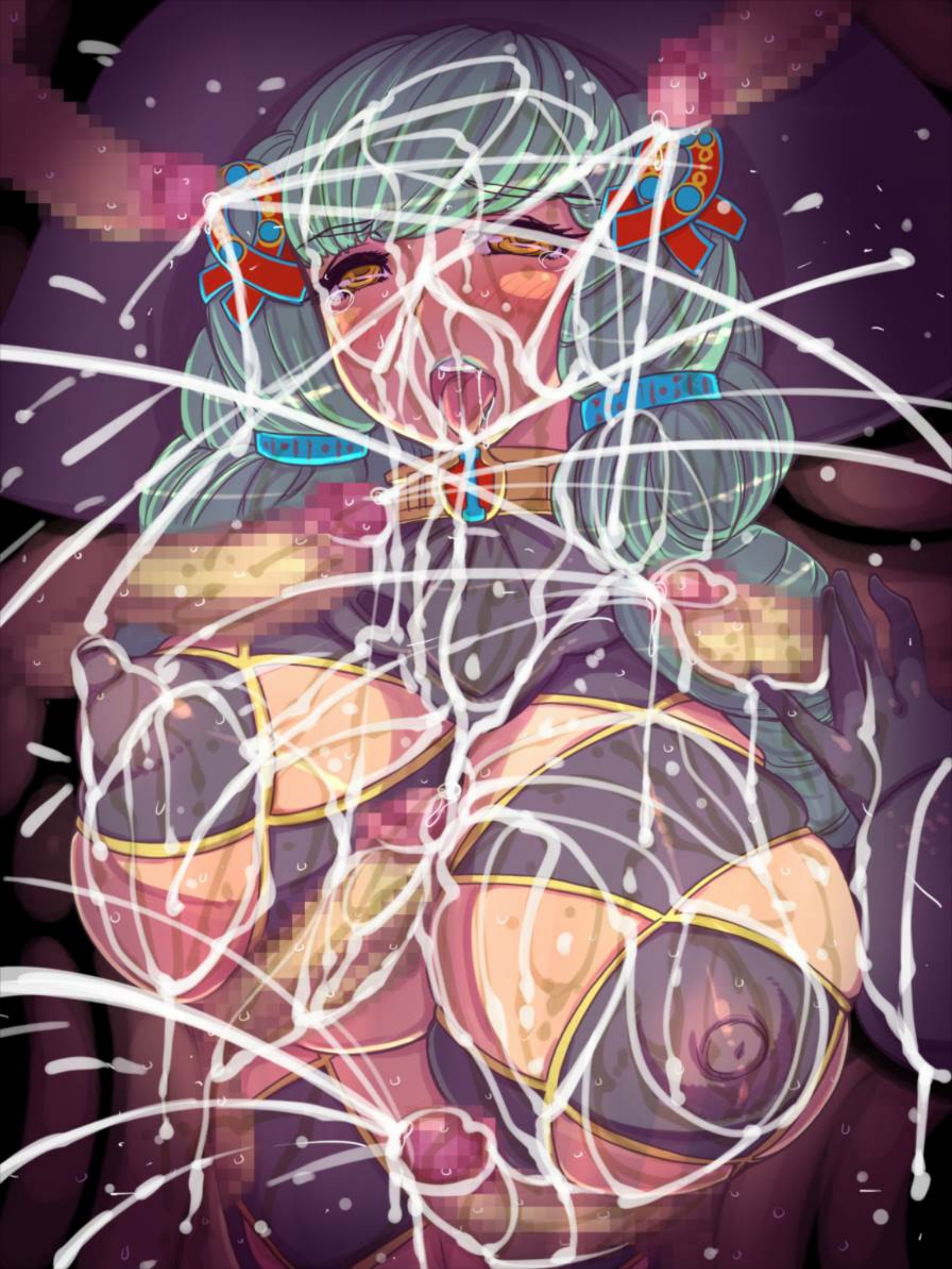


















## 奮え、我らの性槍

「……くっ、殺せ……！」

とある戦場にて、鮮やかな褐色色の裸体を曝け出していた母里太兵衛は彼女を取り囲む兵士たちを、キツク、鋭く見つめていた。戦に敗れた彼女は敵兵に囚われ、こうした辱めを絶えず受け続けていた。自身のペニスを扱きながら、男達は下卑た声で母里太兵衛に話しかける。

「負けた奴が何言ってるんだあ？お前はもう、俺達のモノなんだよお！」

「へっへっへ……見ろよこの胸……たまんねえぜ……」

「あああ……最近溜まってたんだよお…なあ、もういいだろ、なっ!？」

今にも飛び掛かりそうなほど男達の息遣いは荒く、母里太兵衛の鼻にはツンとした悪臭が刺激を与え、思わず彼女は咽返ってしまう。

「こんな奴らに捕まるとは……不覚……！」

ギリギリと歯ぎしりを立て、母里太兵衛は男達を睨みつける。しかし、そんな些細な抵抗も虚しく男は、彼女に繋がれた首輪の紐をグイッと引き寄せ、彼女の眼前に自身のペニスをちらつかせた。

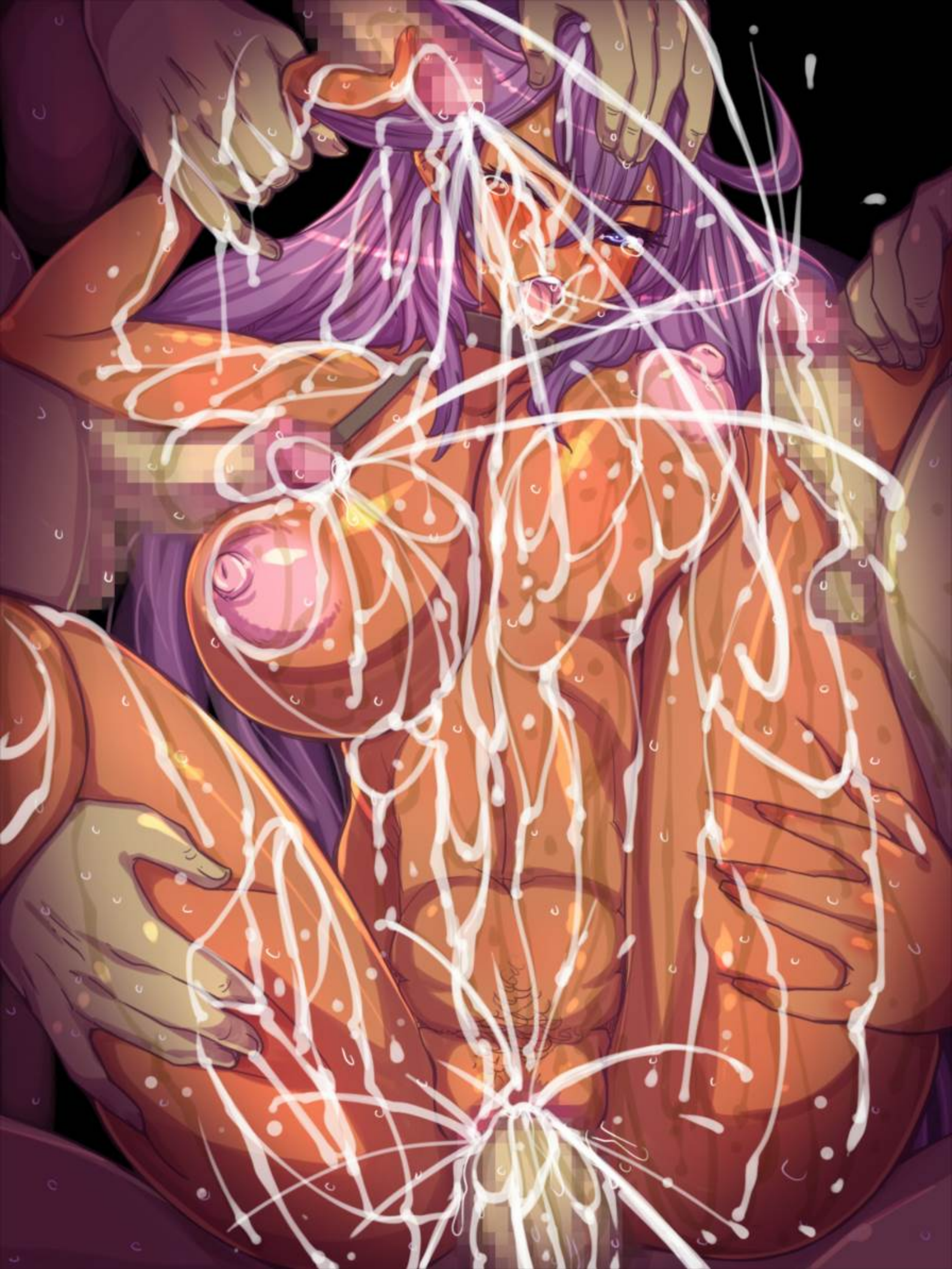
「おーおー威勢のいい……だがよお、そんな顔もいつまで持つかなあ？」

ペニスで母里太兵衛の頬をペシペシと叩き、大きな笑い声を上げる男。彼女の頬にはべっとりと、男の龟头から垂れている先走り汁が付着している。ネバネバとした感触が、彼女の身体全身に駆け巡り、母里太兵衛の身体は反射的にビクンと仰け反る。それを見て、男達はまたゲラゲラと笑う。

「さあて、そろそろお楽しみのお時間と行こうか……野郎ども！」

そして、男の叫び声を合図に一斉に母里太兵衛の裸体に男達は飛びついた。







「ひぎいっ！……貴様っ…ら…っ！ やめ……んんっ！！」

彼女の身体を、男のペニスが一気に突き破り、肉と肉のぶつかる音が周囲に木霊する。彼女の鍛え抜かれた身体が、男のペニスをぎゅうぎゅうに締めつけ、その圧迫感から男の方も思わず声を上げるのだった。

「おっほお！なんだ、このまんこお！超締め付けてきて、すげえっすごっ！」

男は今まで経験した、どんな女よりも締め付けてくる母里太兵衛の膣にすっかり虜になってしまっていた。情けない声を上げながら、されど腰は目にも止まらぬ様な速さで動かし続けている。体液と体液が濃厚に絡み合い、母里太兵衛の肉体と男の肉体が、妖艶にぶつかり合うその姿を見ている回りの男達も、思わず息を飲んでその光景を見つめている。

「あああっ…もう出る…出ちまう…孕めっ…孕めよううううう！！！」

程無くして、男は母里太兵衛の体の中に大量の精液をぶちまけた。ドクンドクンと、彼女の中でペニスは長く長く精液を出し続けている。そして、だらんと彼女の膣からはペニスが抜け落ちその刹那、だらだらと彼女の身体からは精液が溢れ出てきたのだ。

「ああああ……そんな……我がこんな……ああ……」

永遠とも思えるような時間がようやく終わり、母里太兵衛は自身に降りかかったこの光景を受け入れきれずに、気の抜けたような声を上げるしかなかった。

しかし、彼女の目の前にはペニスをギンギンに勃起させた男達が起っている。そう、母里太兵衛にとって悪夢ともいえる様な凌辱は始まったばかりなのだ。

「あ……ああ…止める……来るでない……止めてえー！！！！」

母里太兵衛の悲痛な叫び声が、周囲に響き渡る。



「おごっ……っあ！…あっ、あっあああああっ！」

あれから数時間は経っただろうか。母里太兵衛は今もまだ犯され続けている。彼女の褐色の肌も、男達の醜く汚れた精液で真っ白に染められている。母里太兵衛の穴という穴は、男達のペニスを受け入れる肉壺と化していた。

「はあはあ…出るう…俺様の精液、全部飲み干せやあ！」

「あああああ……このまんこ最高だよお……ちんこが蕩けちまう……」

「てめえ、早く変わりやがれ！さっきから尻の穴しか犯してねーんだぞ！」

男達は、次々と母里太兵衛の顔に、胸に、尻に、膣に、己の精液をぶちまけ続けている。その度に、母里太兵衛の意識は朦朧と消えかかり、しかし休む間もなくぶち込まれる男達のペニスが、それを許さなかった。

「あ……がぁ……っ！　もう……許し……んあああっ！…あっ、あっ……！」

母里太兵衛に、まるで立派な槍の如く鋭いペニスが深々と突き刺さる。一突き、一突き、彼女の身体を貫く度に、母里太兵衛の頭の中に電流が走る。

「がっ……っ……こ……んな……っあ！……深……っ……こ……わ……っ……れ……っ！！」

ずん！ずん！と、この日一番の肉と肉がぶつかり合う音が響く。母里太兵衛は息も絶え絶えとなり、言葉も途切れ途切れに発する事しか出来ない。身勝手に腰を振り続ける男と母里太兵衛。傍から見れば、まるで獣に犯されているかの様な光景であった。

そして、彼女を貫くペニスが一段と大きくなり……母里太兵衛の中で爆発した。

「あっ……あああああ……っ！！……ああ……こ……ん……な……」

母里太兵衛から抜き出されたペニス。大量の精液が、零れ落ち続けている。寝そべり、放心する彼女であった。しかし、無慈悲にもその身体を男達は起き上がらせ……そして、再び母里太兵衛を何度も何度も犯し始めるのであった。

END

SS by クスフィアス





















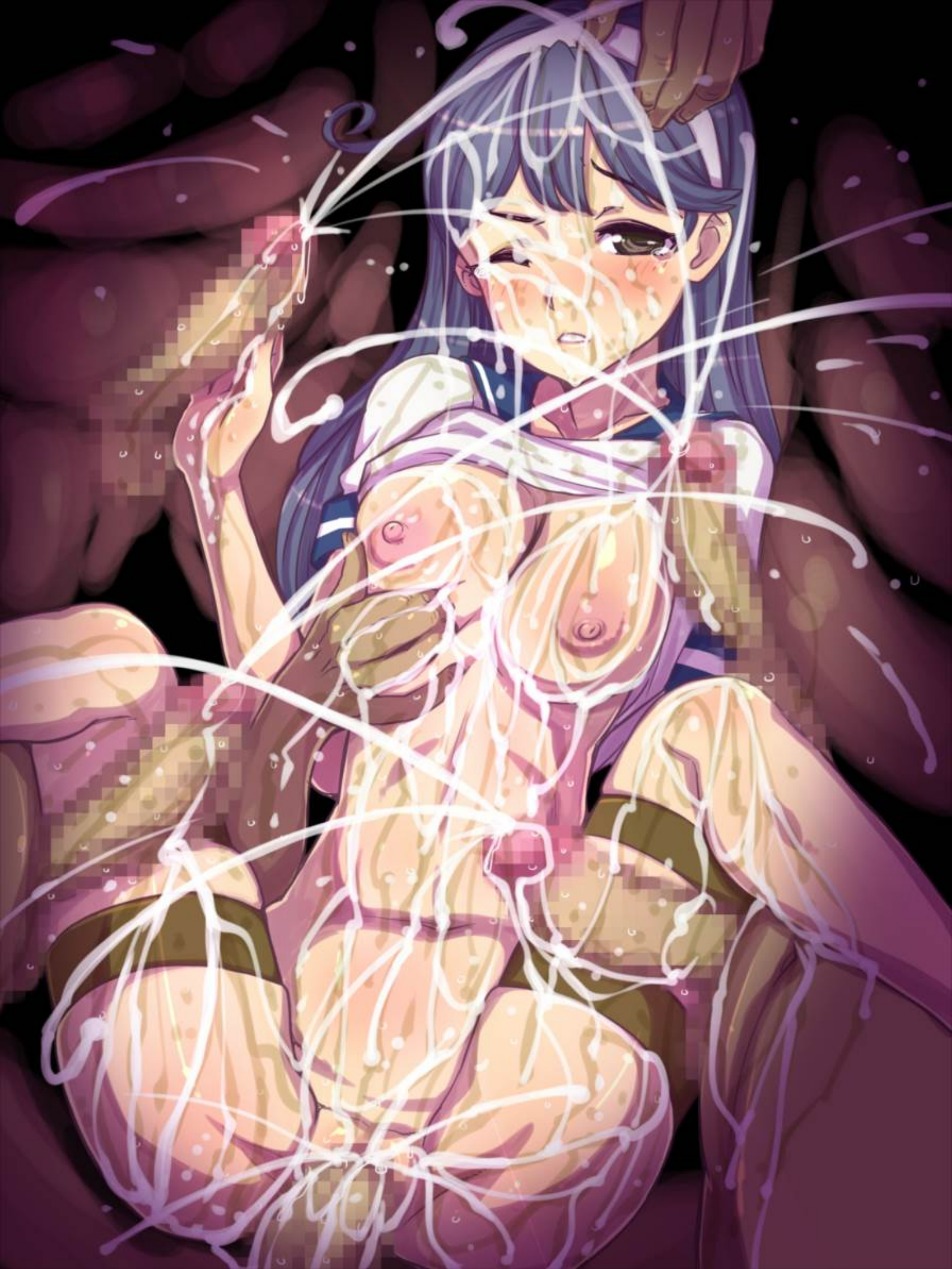








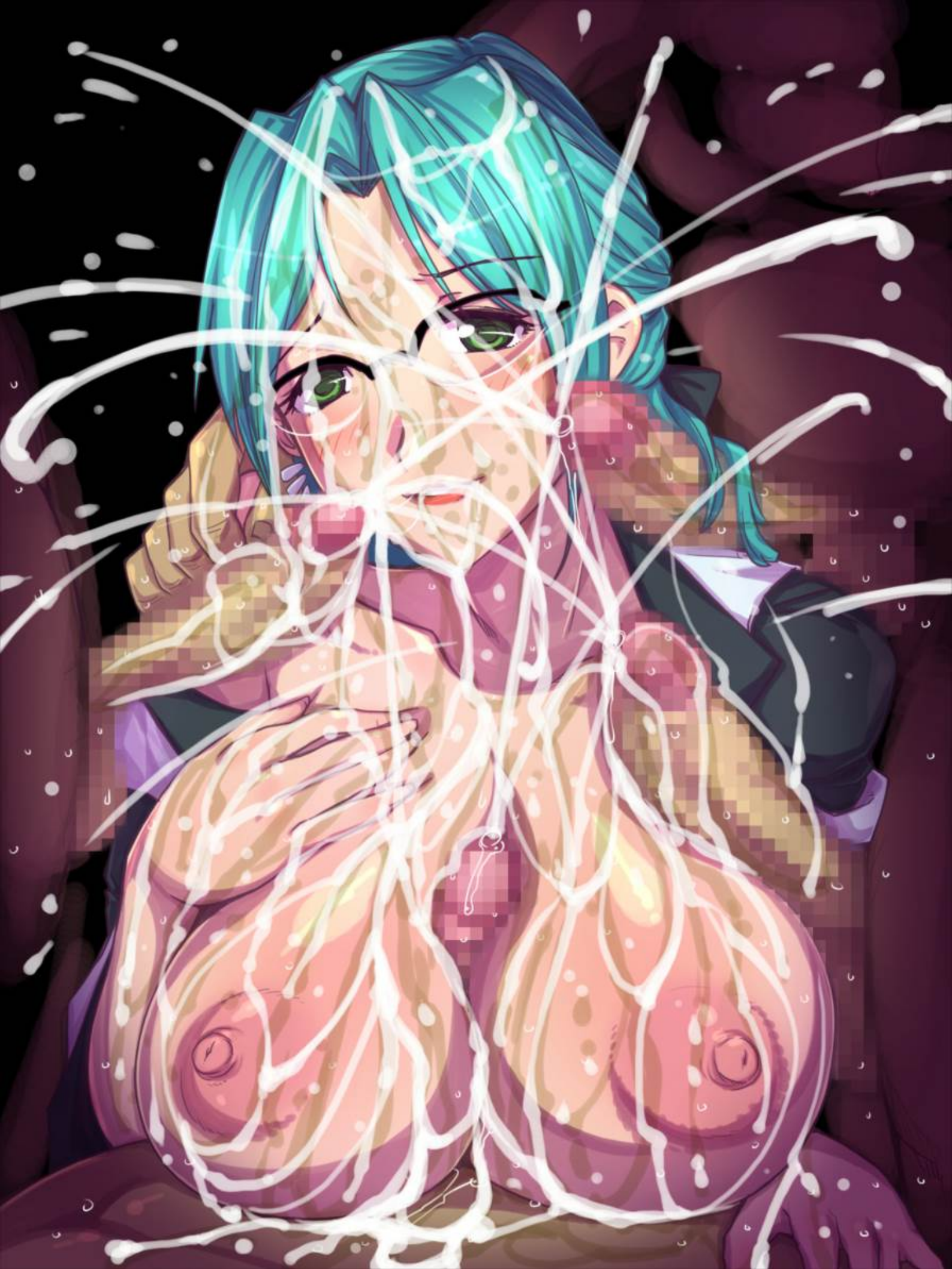




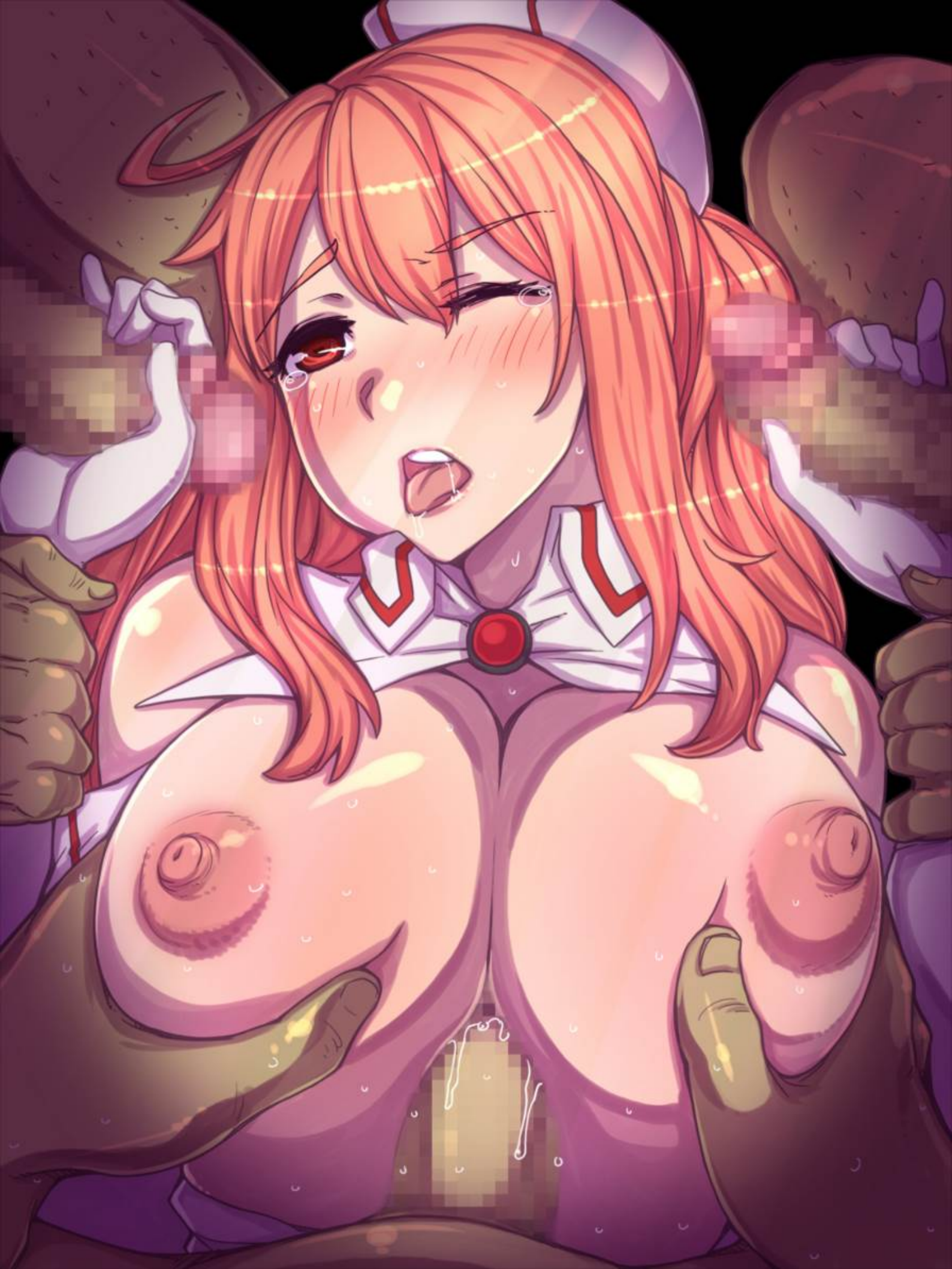












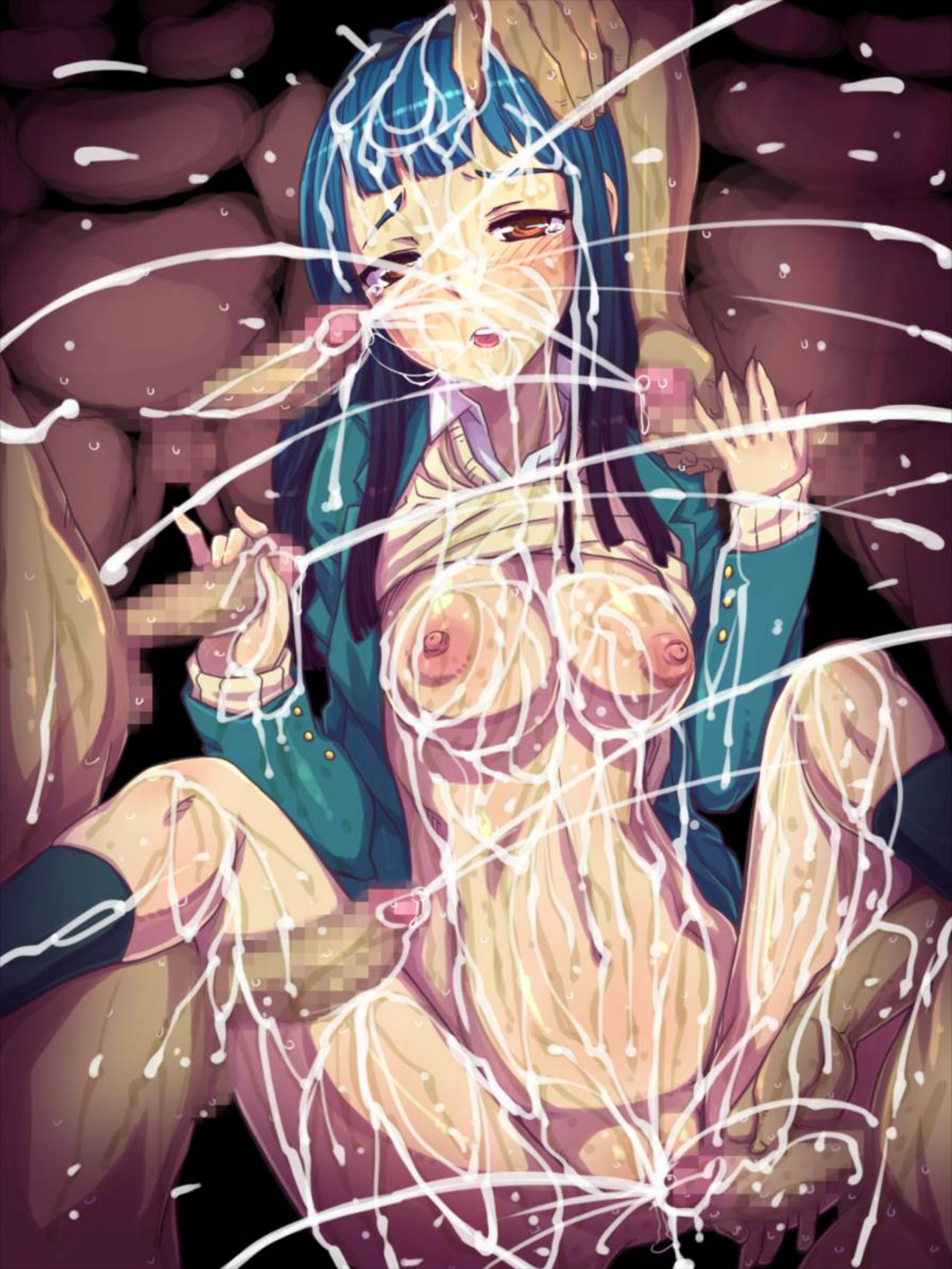












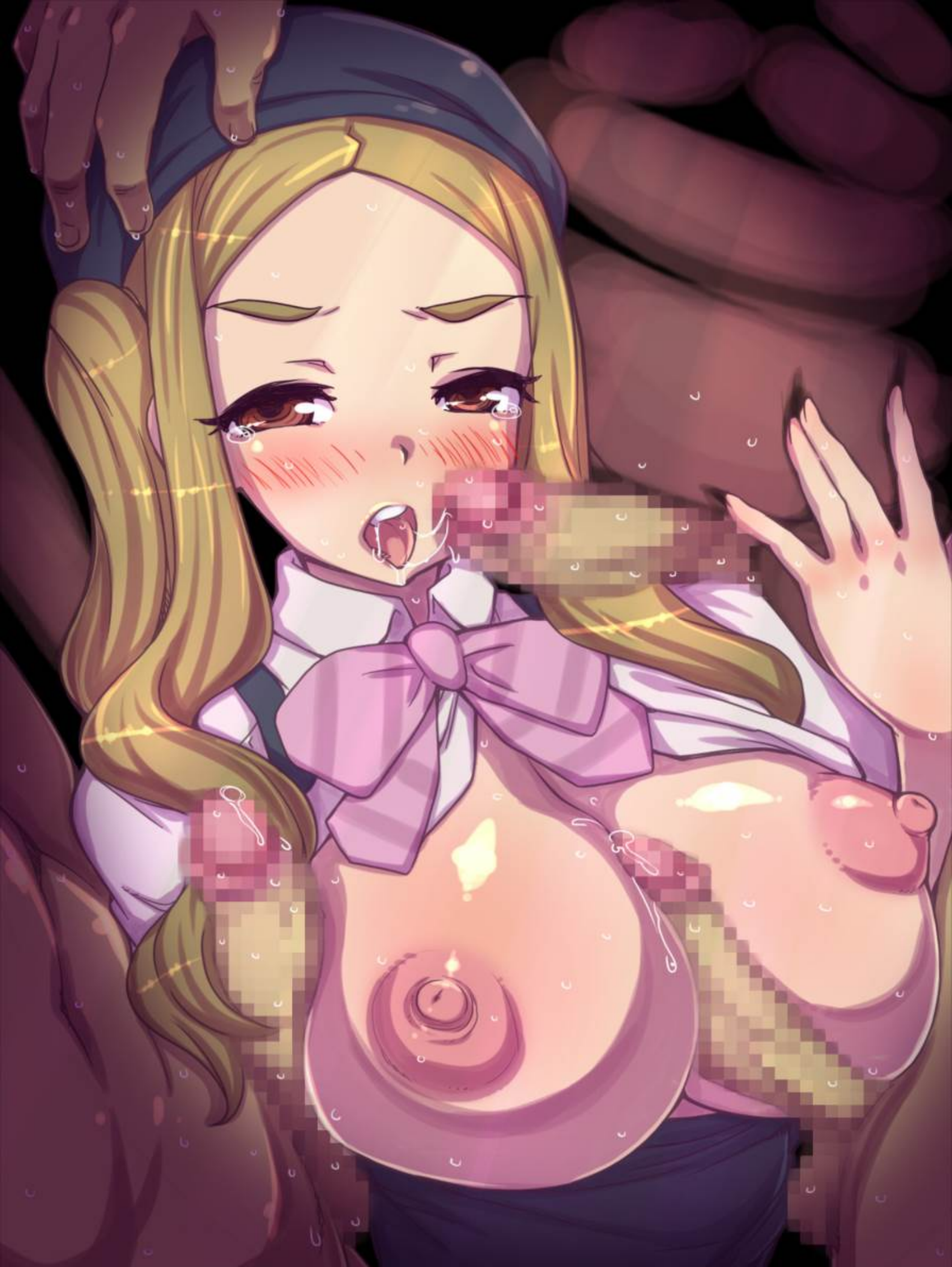




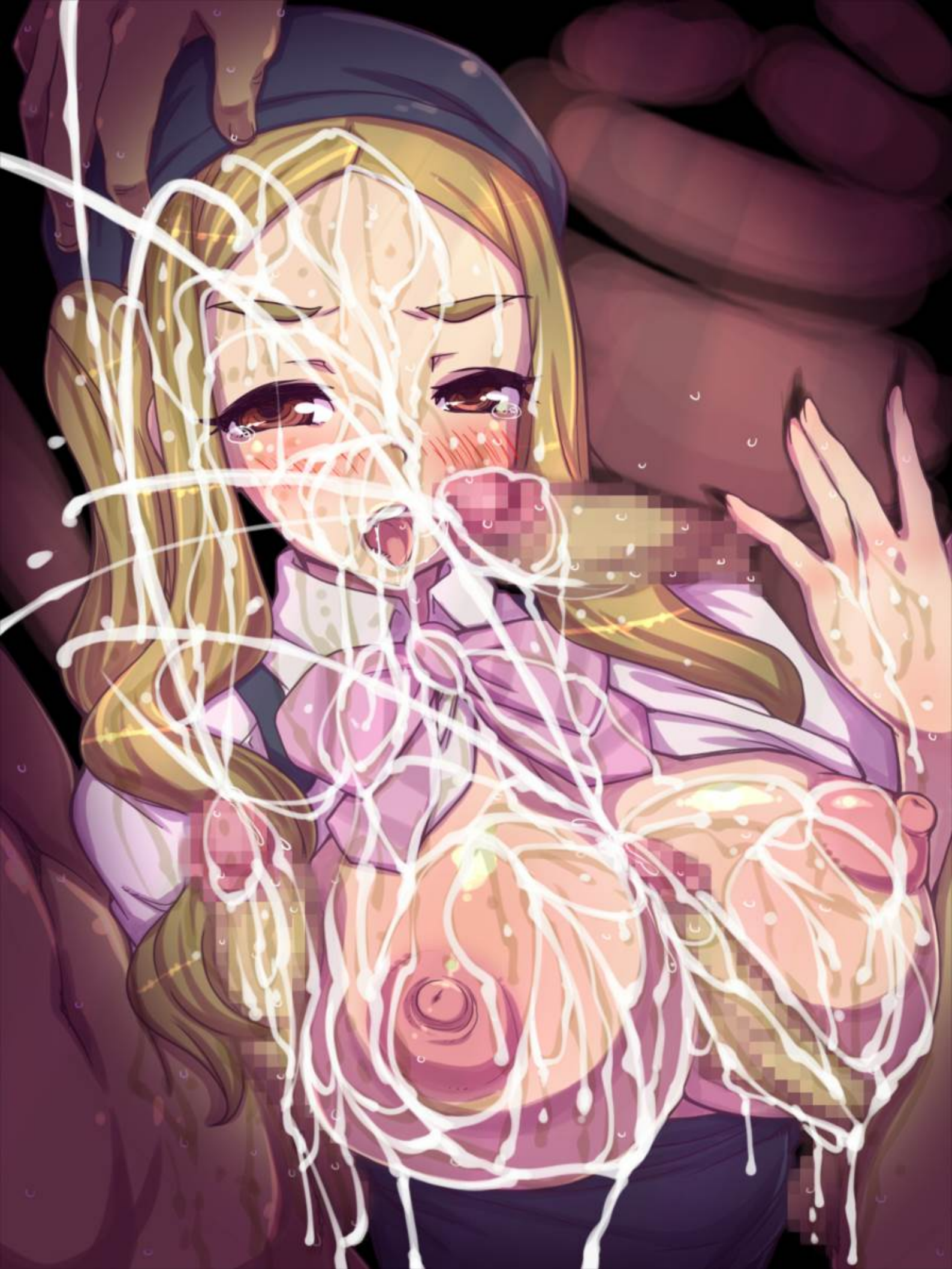




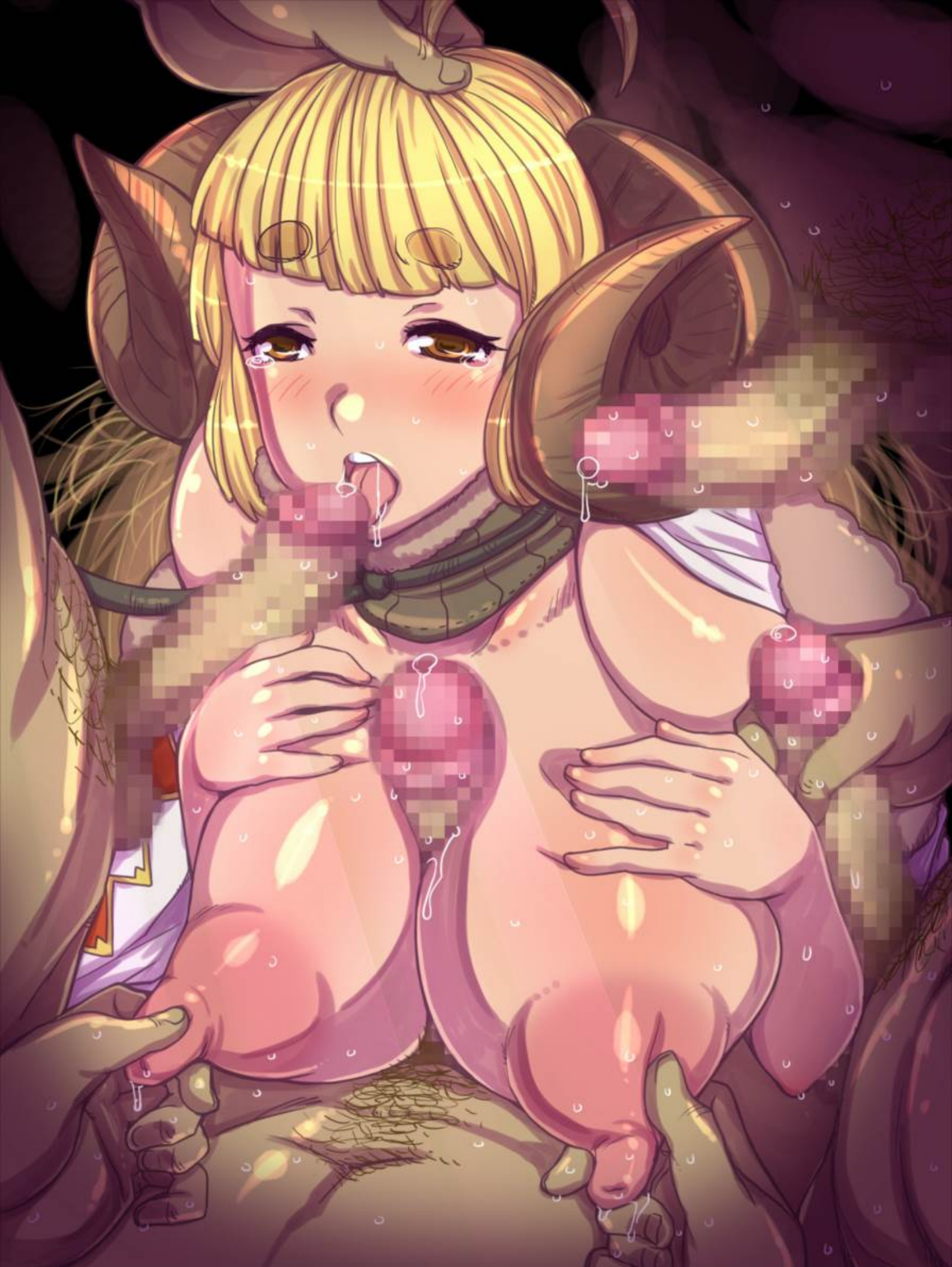




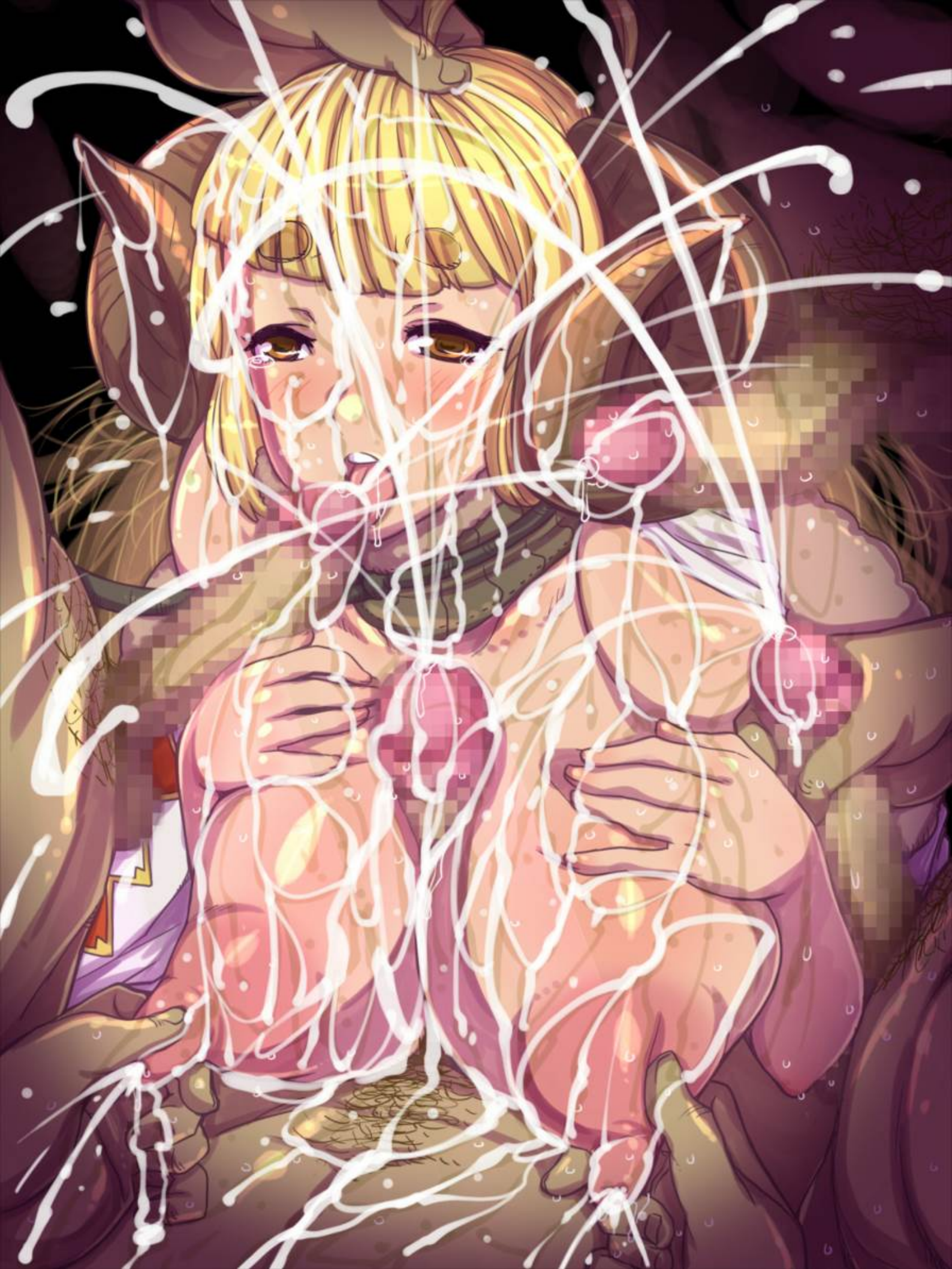


































## 白き精獣

最近、町に被害を与え続けているゴロツキの集団が問題になっている。四聖獣が一人であるハクは、そのアジトである砦に単身潜入していた。しかし、背後から不意をつかれたハクを鈍い衝撃が遅い、ハクの目の前は闇に包まれるのだった……。

ハクが目覚めると首は鎖に繋がれ、四肢は屈強な男達により掴まれていた。ハクを取り囲む男達に向かい、キツイ目つきを向ける。

「へっへっへ！一人で俺達相手に挑むなんて馬鹿げた事をしたもんだなあ？」

ジロジロと男達は、下卑た眼でハクの身体を嘗め回すように見つめていた。不意をつかれ囚われた事に対し、ハクは無然とした表情を浮かべていた。そんな彼女に一人の男がニヤニヤと、笑いながら近づいてくる。そして……

「——っ！！！」

彼女の衣服を思い切り破き去ったのだ。彼女の裸体が、乳房が、男達の目の前に曝け出され、男達は歓声をあげるのだった。ハクもまた、男の行為に驚きの声を同時に上げる。しかし、そんなハクにとって更に驚くべき光景が現われるのだった。彼女の目の前に、一人の男が自身のペニスを勃起させながら近づいてきた。

「や……ひっ……離れて……っ！！！」

ハクは思わず声を上げ、必死に男から逃げようと後ずさる。しかし一歩、また一歩と男はハクに近寄り、とうとうハクの…まるで桃の様なピンク色の可愛らしい膣に、不釣り合いな凶暴なペニスを当てる。

「あ……お願……い……いや……やめ……て……いやあ……！」

そんなハクの声を踏みにじるかの様に、男のペニスがハクを貫いたのだった。







「~~~~~っっっっ！！！！ あっ……かはっ！！」

初めて経験する衝撃に、ハクは息を切らしながら声を上げる。ギチギチとハクの身体をぶち抜いているペニスは、ハクの中で更に暴力的に勃起し続け、ハクの小さい可憐な体を否応なく汚し続けていた。

「あっ……やめ…っ！ ひぎ……いたっ……あっ……っ…あ！」

頭の中で物事を考える余裕すらなく、支離滅裂にただこの行為を止めるよう懇願する言葉を繰り返すしかないハク。目には大粒の涙が浮かんでいた。しかしハクを貫く男は容赦なく、激しく腰を動かしハクを穢していく。

「ああっ……っ！……ひぎっ…はっ！……あっ……ああっ……はっ…！」

自身をガンガンと貫く痛さと、腹の中を圧迫されるような窮屈さで、ハクはまともな言葉が発せずじまい。今、ハクに出来る事はこの悪夢のような出来事がただ早く終わる事を願う……ただそれだけだった。永遠とも思えるような時間を体験する中、男の腰遣いが一段と激しくなる。

「はあはあはあ……おらっ！中にたっぷり出してやるから孕めやあ！！！」

そう言う男は、ハクの中にどす黒い欲望に染まった精液を大量に放出した。彼女の体全身を、男の精液が次々と汚して満たしていく。ようやく体を圧迫した苦しみから解放されたハクは、はあはあ…と荒く息を吐き静かに横たわるのだった。しかしそんなハクを男は持ちあげ、笑いながら絶望の一言を発する。

「おいおい……これで終わらなわけねえだろうが！」

悪夢は、まだ、終わらない。



「あっ…ああっ……あああああ……っっ！！！」

肉のぶつかる音と、グチュグチュと体液が絡まる音、そしてハクの悲鳴。この場は異様とも言える熱気に包まれ、ハクは今だ犯され続けていた。

「おらっ、もっと腰振って俺様を喜ばせろやあ！！！」

「うっ、でるでるでるでるう〜〜！ その顔に全部ぶちまけてやる…うっ！」

「ああ……孕むまでいっぱいーっぱい中に出してあげるからね……」

男達は代わる代わる、ハクの体を自分勝手に汚していく。男達の精がハクの体を染め上げる度に、ハクの心にはヒビが刻まれていく。勃起したペニスがハクの体を何度も何度も貫く。

「あっ……ああっ……あがっ……や……め……て……も……う……」

ハク力なき声が、虚しく周囲に響きわたる。

「ああ？何か言ったかあ？…そうかそうか、もっと犯してほしいってよお！」

しかし、ゲラゲラと笑いながら男達はハクの願いを踏みにじるのだった。ひたすらにハクを犯し続ける男達にとって、もはや彼女は人としてではなく…ただの肉便器としての存在価値でしかなかったのだ。男達の勃起したペニスが一齐にビクビクと躍動していく。彼女の幼い膣を貫いていた物が、彼女の口を乱暴に埋め尽くしていた物が、彼女の子ぶりなお尻を無慈悲に汚していた物が、大量のペニスがハクめがけて一齐に白い放物線を放ったのだ。

「あああああああ……っ！ あ…ああ……あああああああ！！！」

ハクの心は完全に打ち砕かれ、周囲に彼女の絶望の絶叫が響き渡った。

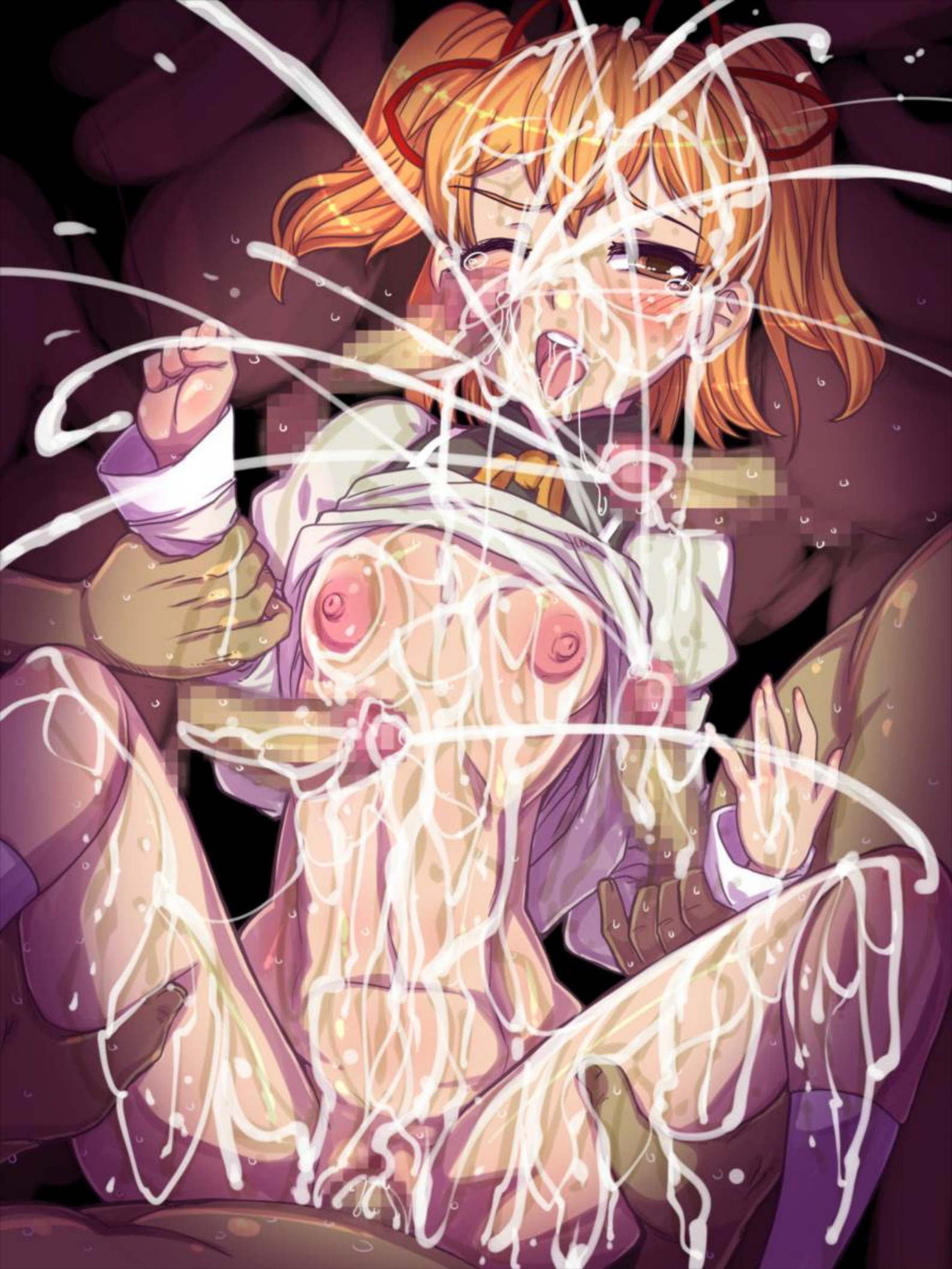
END

SS by クスフィアス





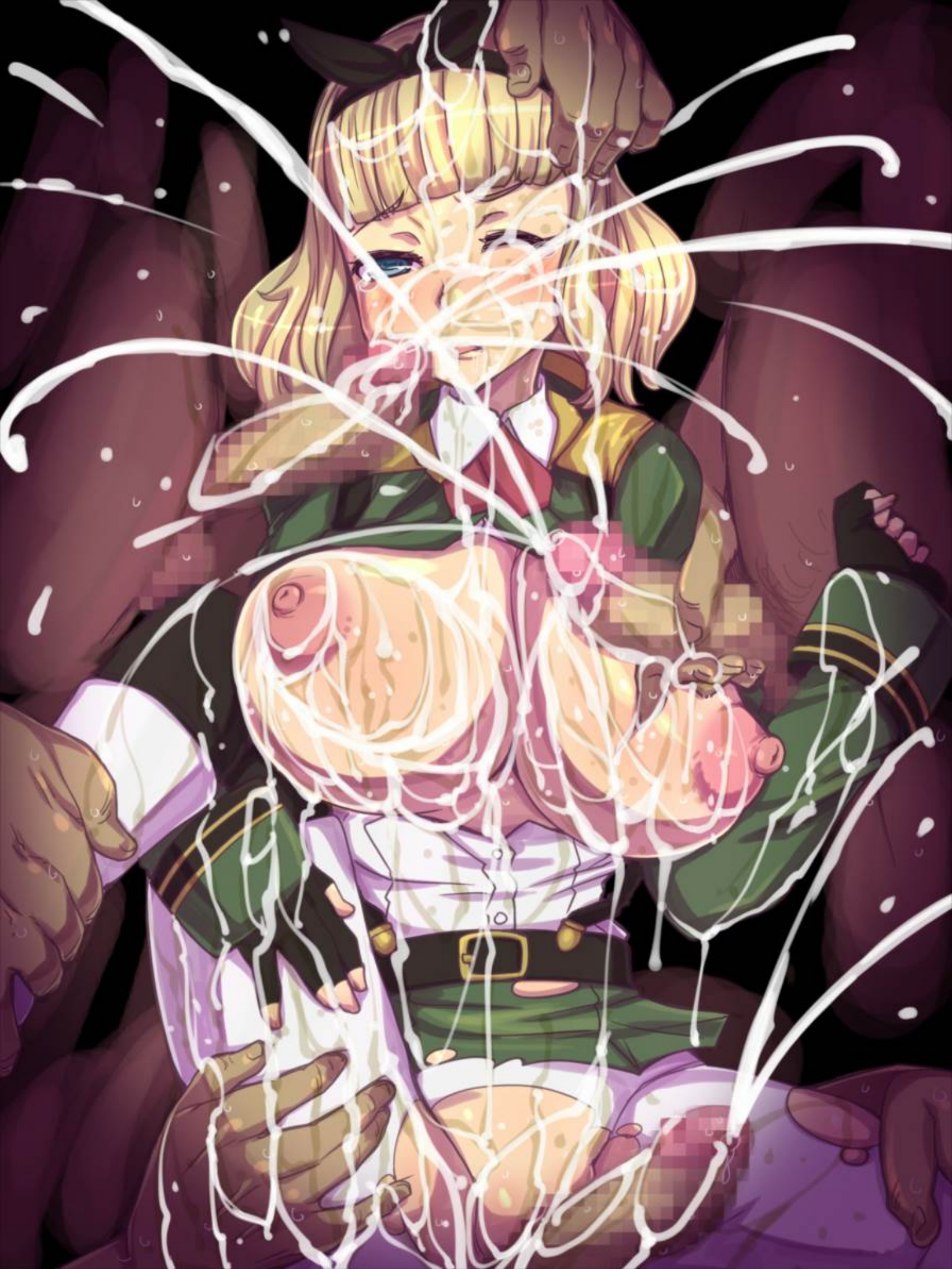








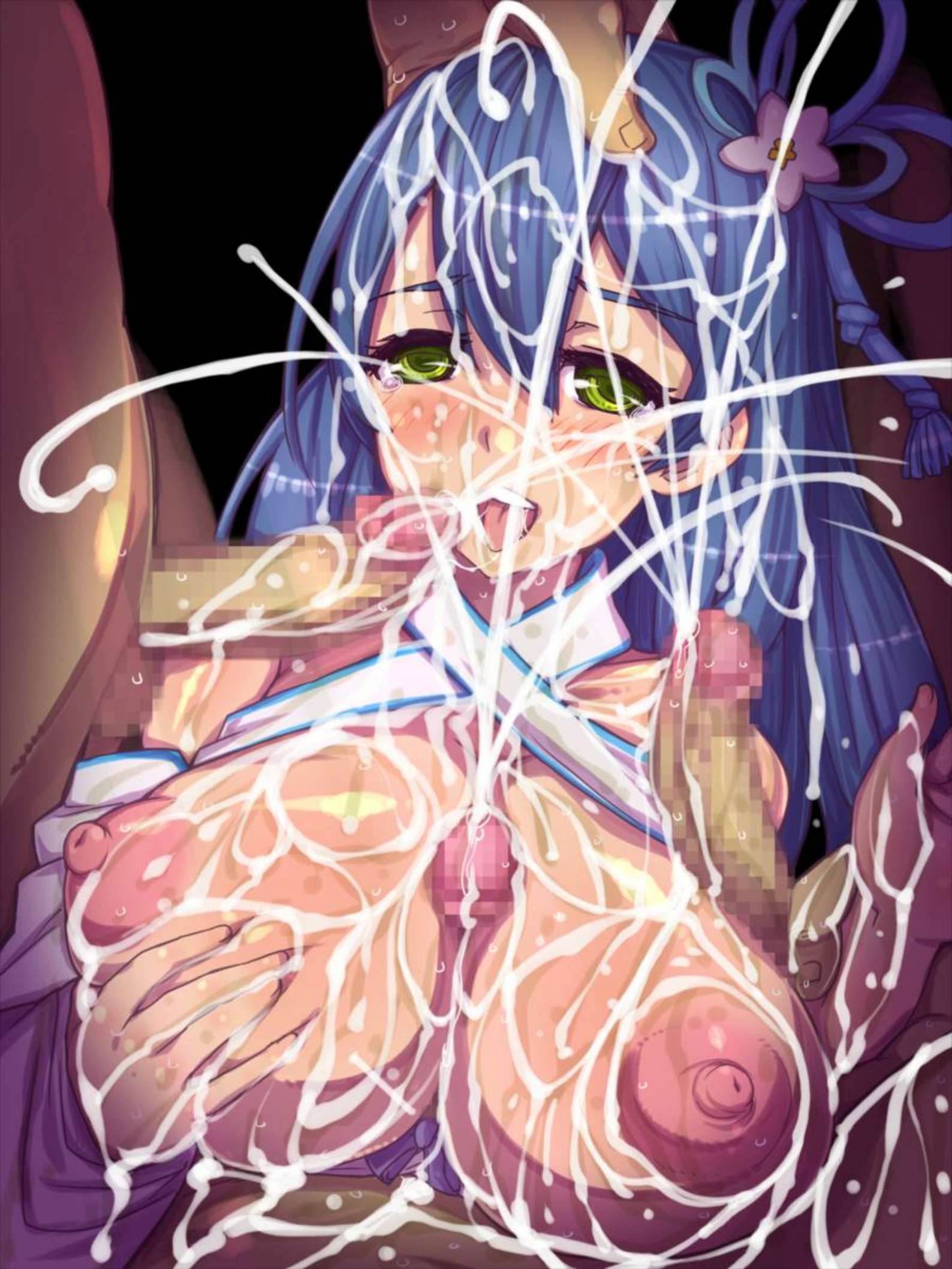




































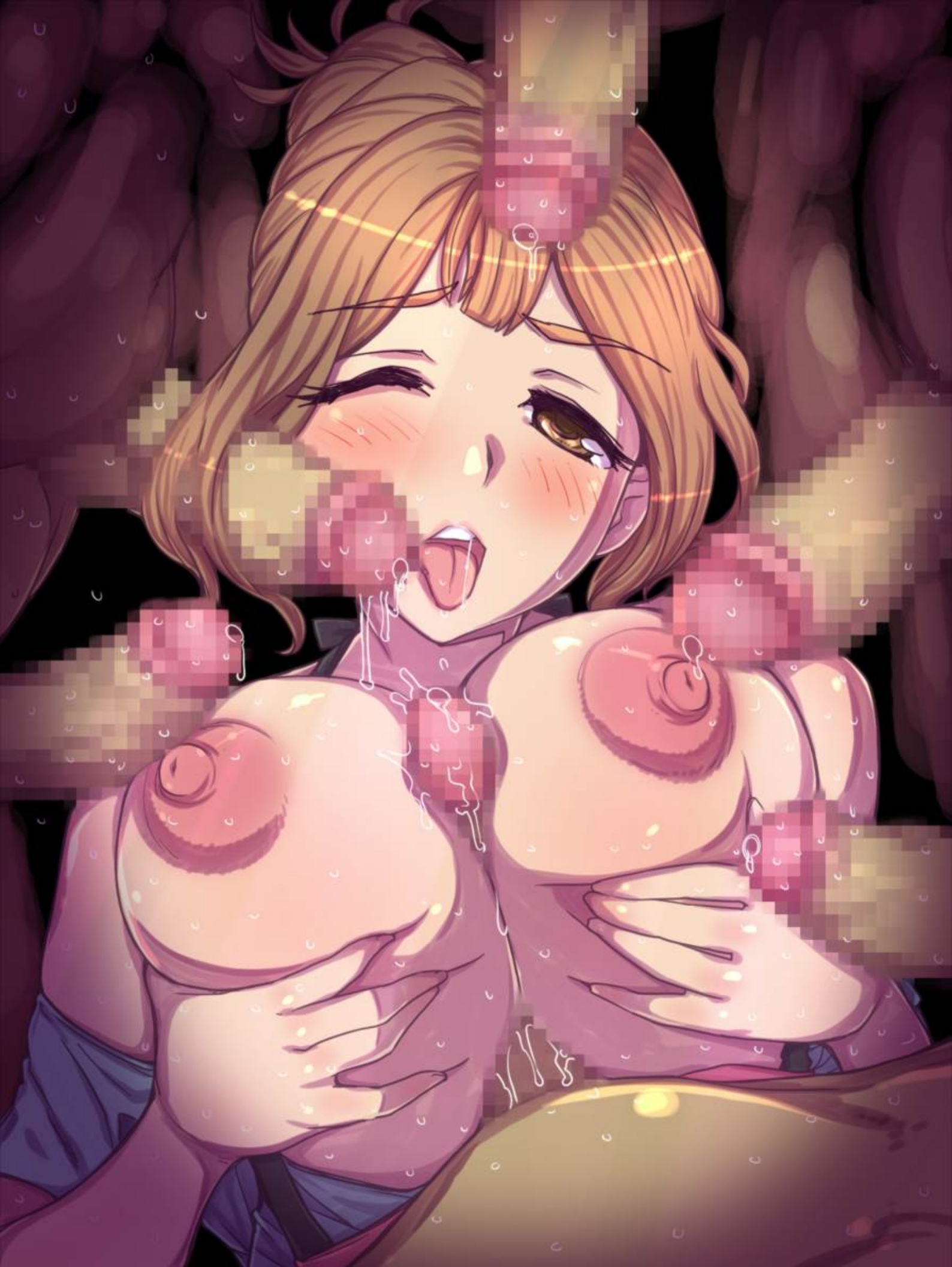












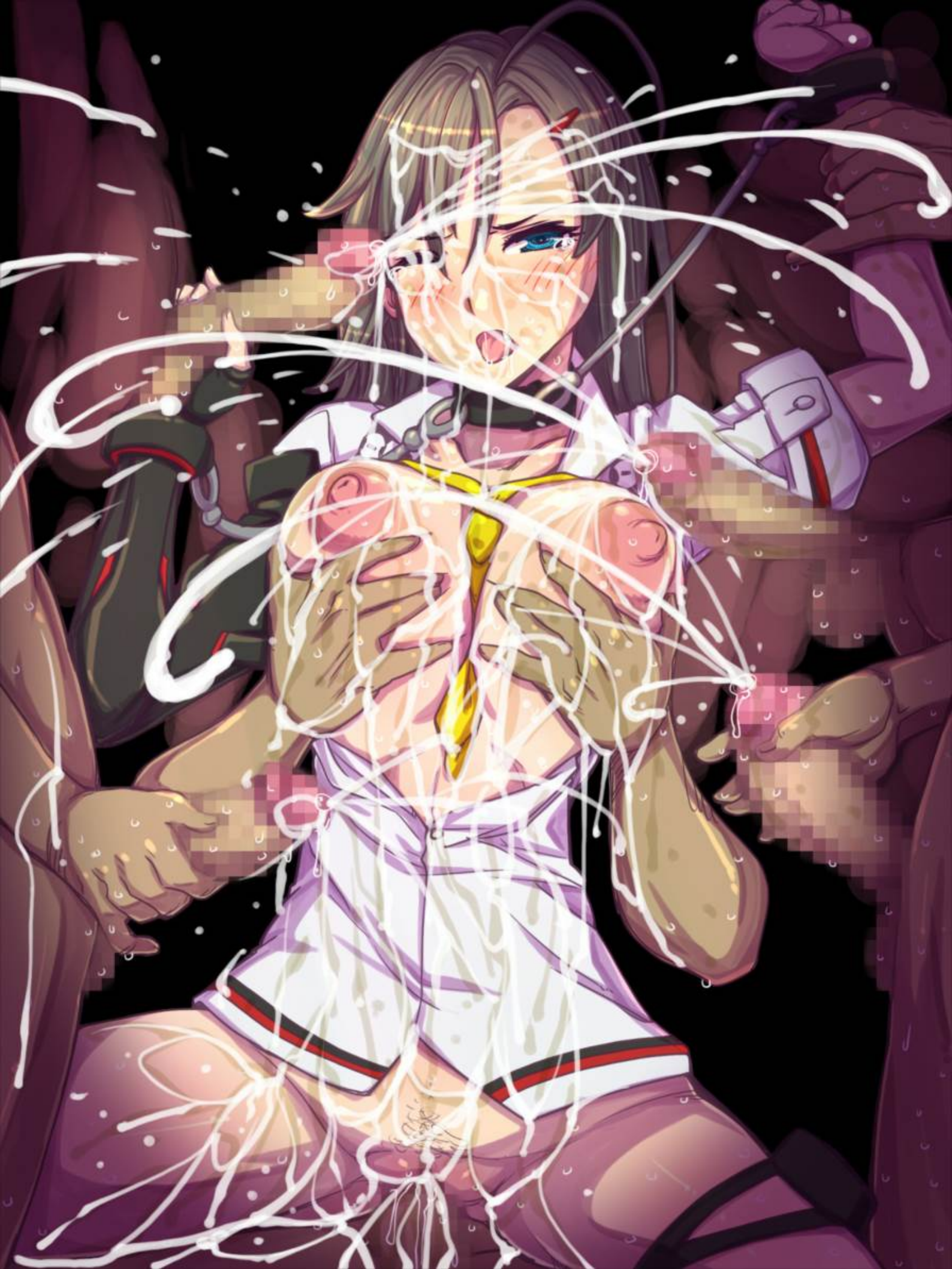




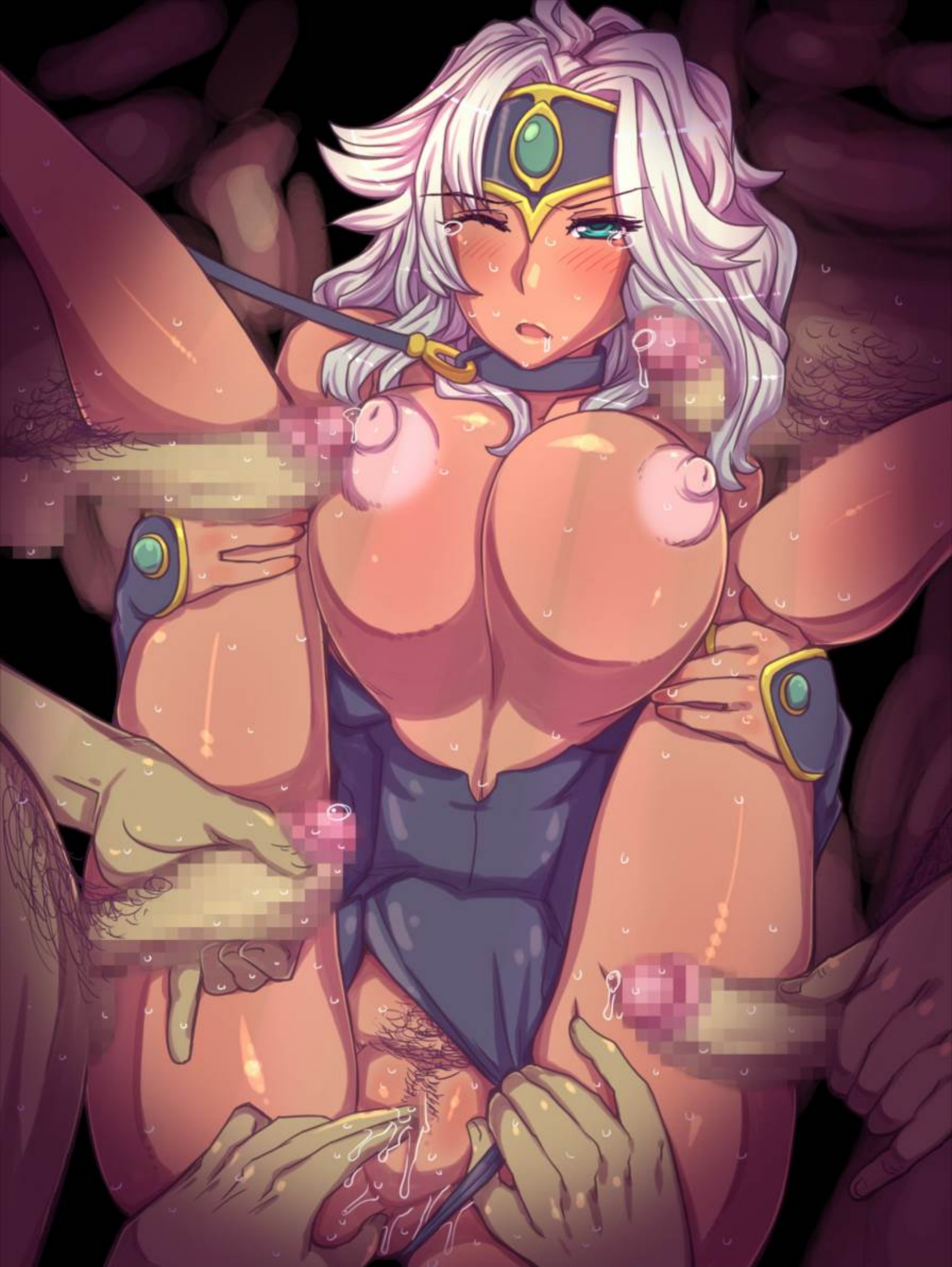




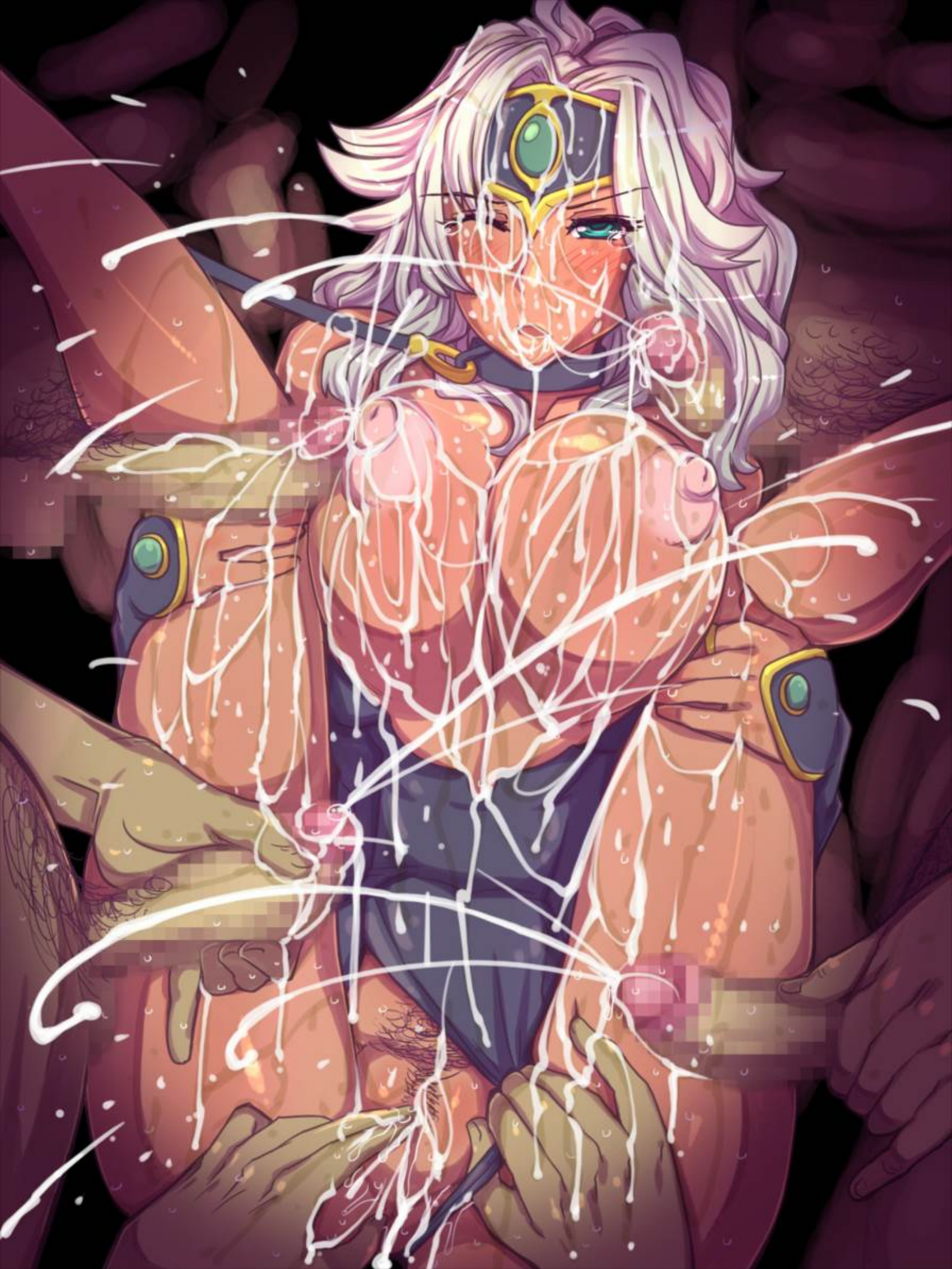
















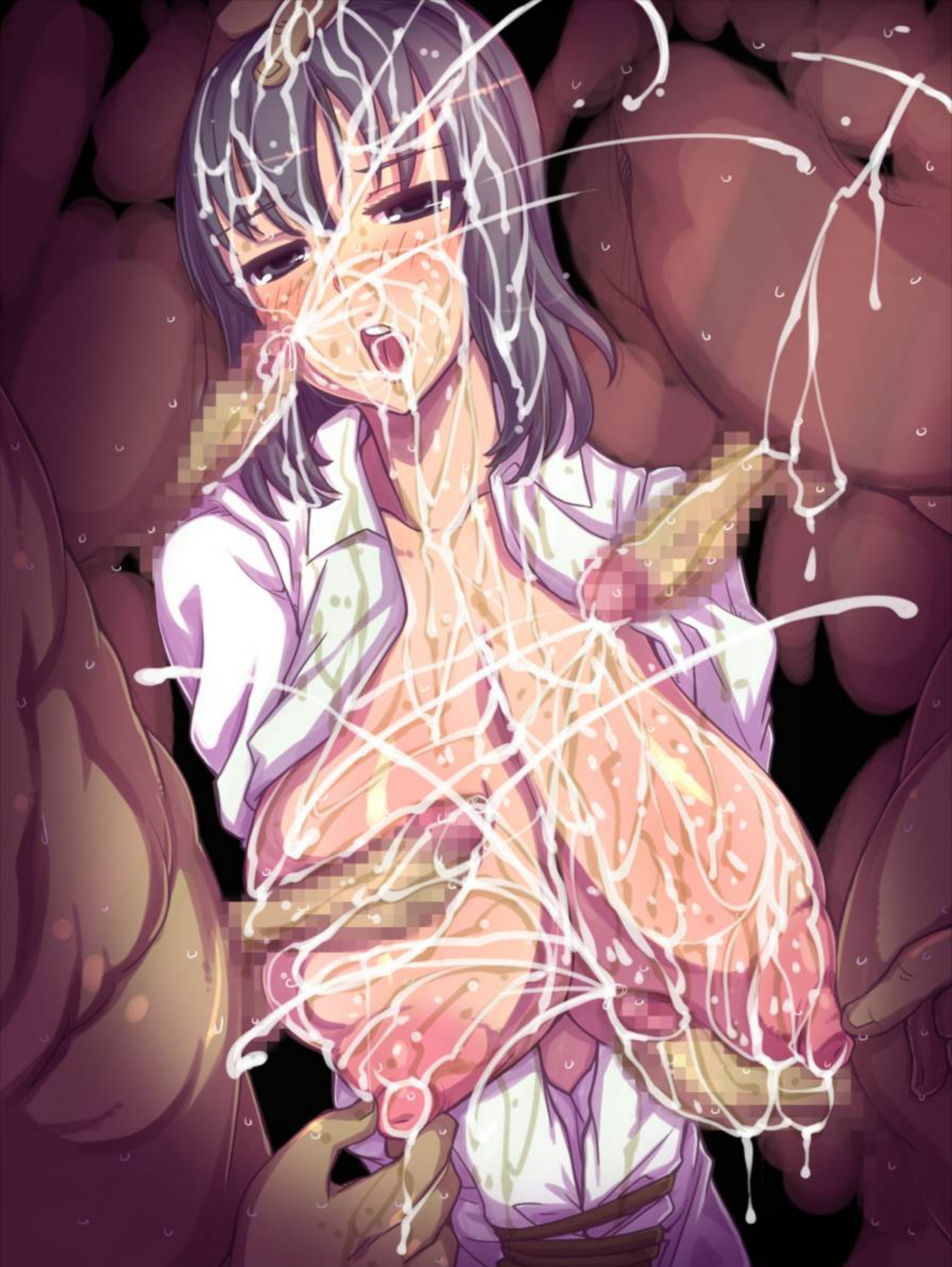




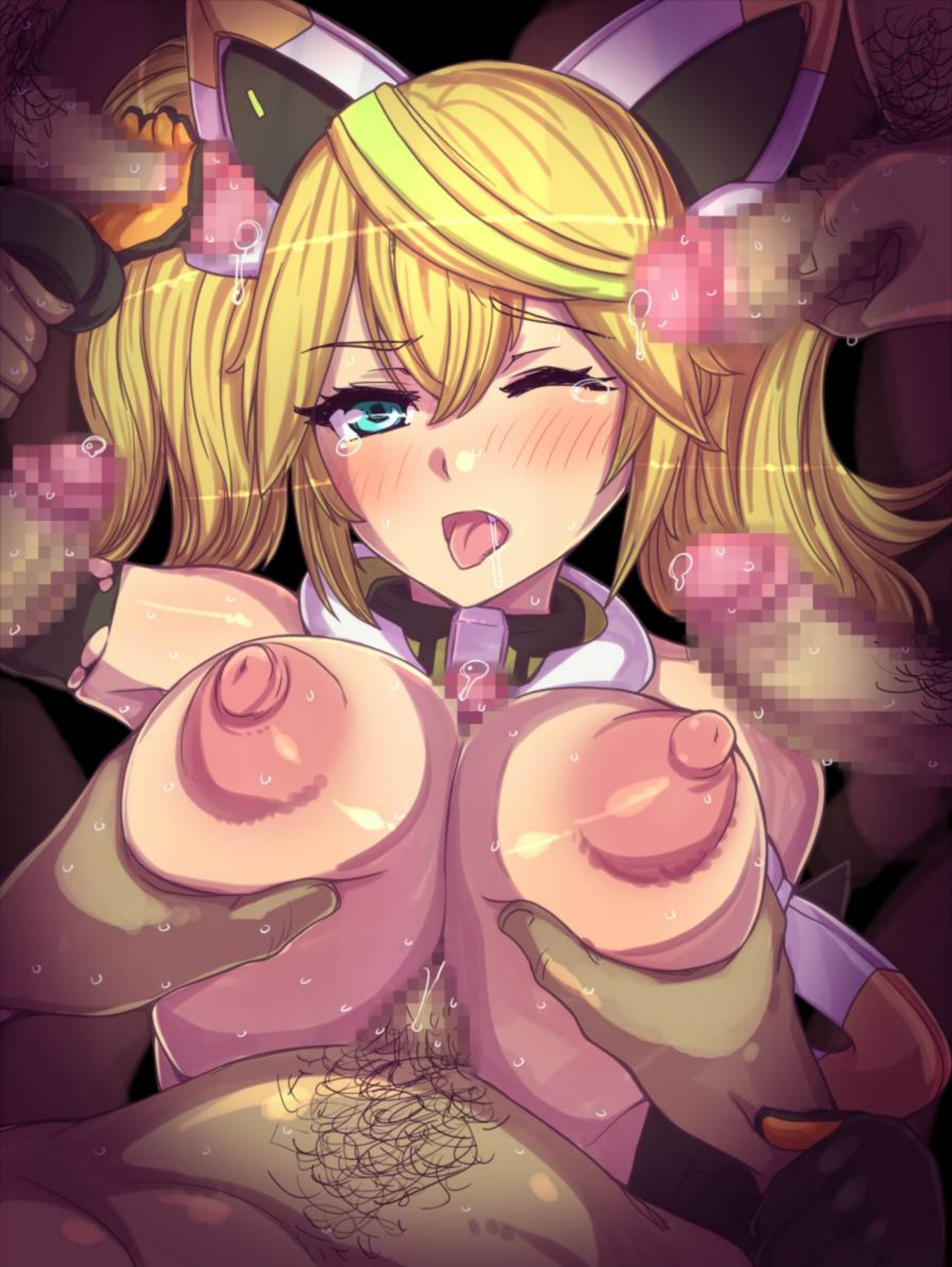








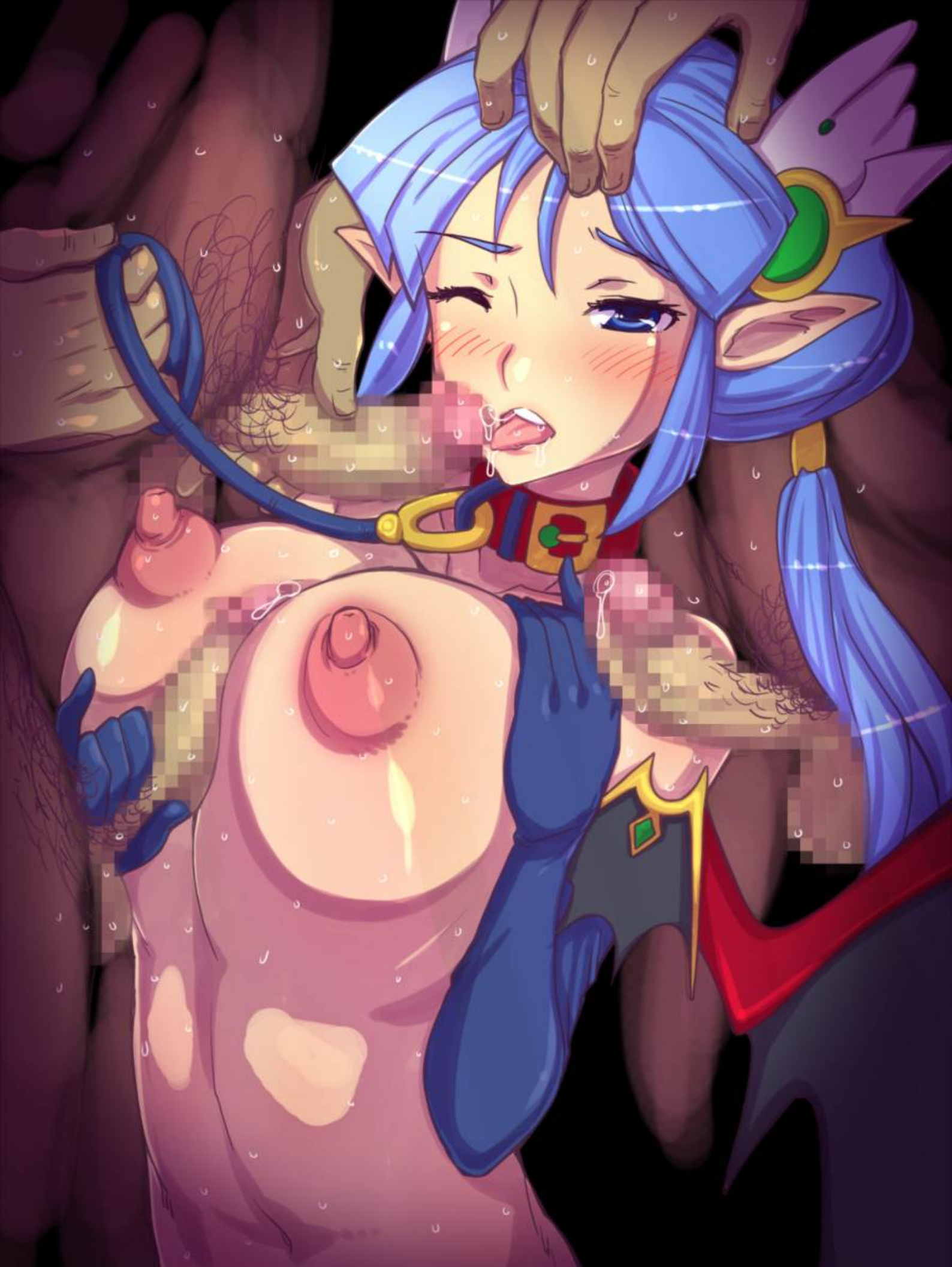




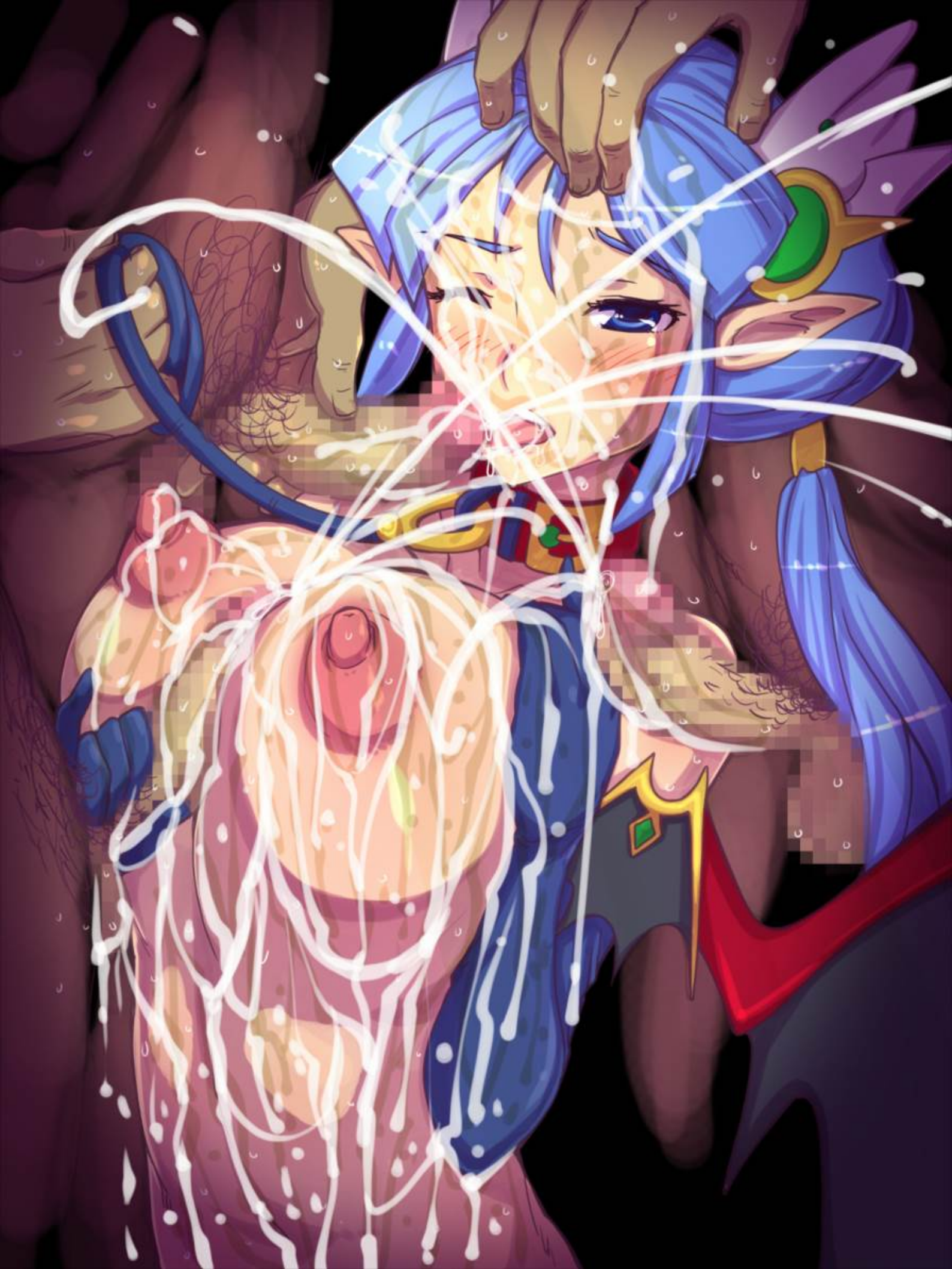
























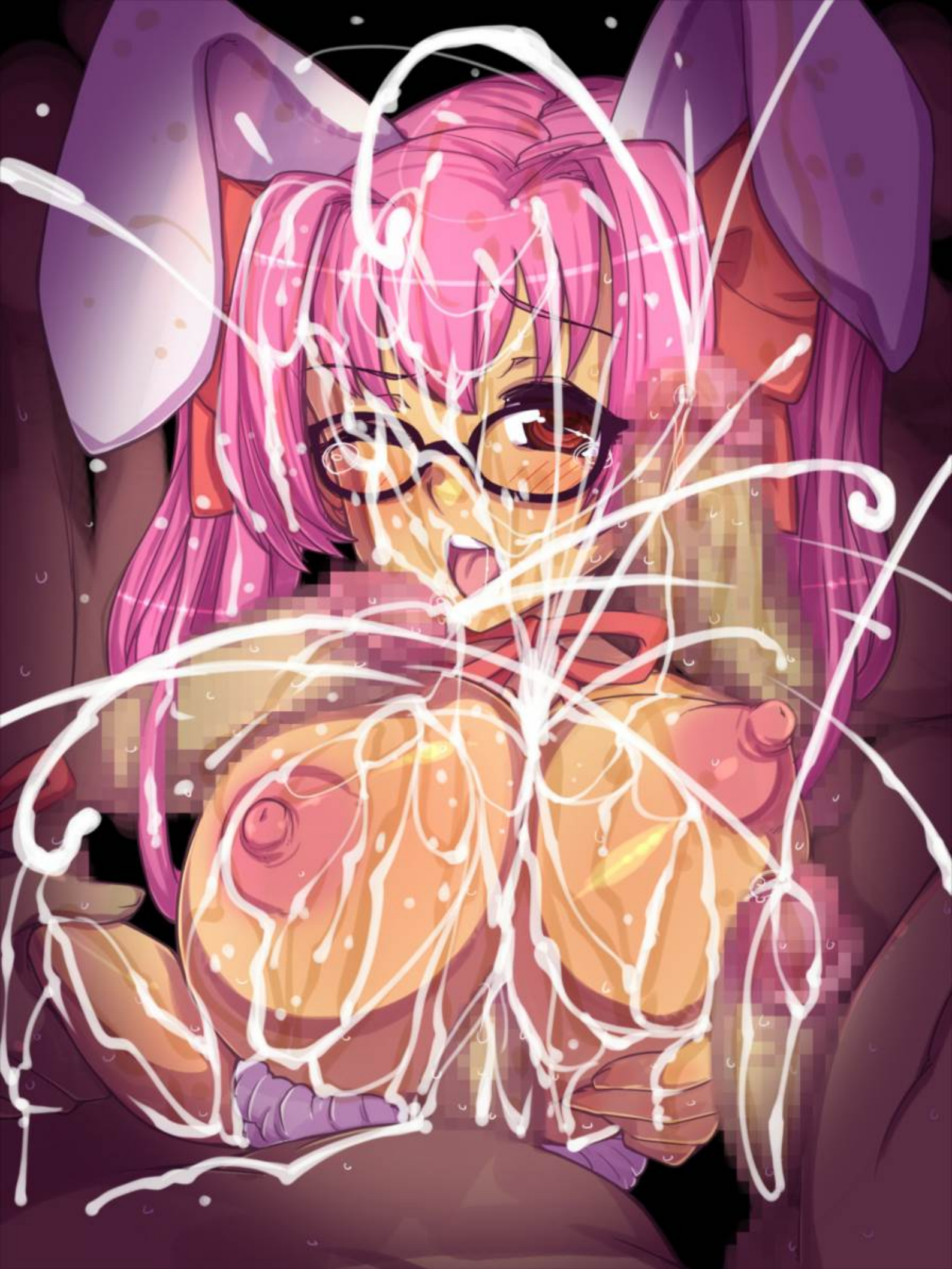


















## 豚の餌

「はあはあ・・・グラビアで見たより、胸大きいね」

「やっぱり現役が着る制服は違うなあ うへへへ」

撮影所を持つスタジオの薄暗い一室になかば乱暴に引きずり込まれ、悲鳴を上げる暇もなく男達に囲まれる。

「え？えっ？なんで、服ぬいでるんです・・・か・・・え？え？」

女優の仕事を得るための面接だったはずが、醜く太った男達の性接待に狩り出される・・・大手の芸能事務所でも未だにはびこる悪習。

制服で行けといわれたのは、こういうことなの・・・？うっすらと思う。

「やめッ・・・やめて・・・ください・・・ヒッ！」

裸で股間のモノをそそり立たせる男達に、葦月伊織は恐怖で動けないでいる。悪習を聞いてはいたが、自分の身に起こると夢にも思っていなかったからだ。

「ああッ伊織ッ！いおりい～！」 「グラビアで見てから何回お前でヌいたか！」

いつの間にか掛けられた首輪を引っ張られ、制服を半脱ぎにされても伊織は恐怖でカラダをこわぼらせたままだった。

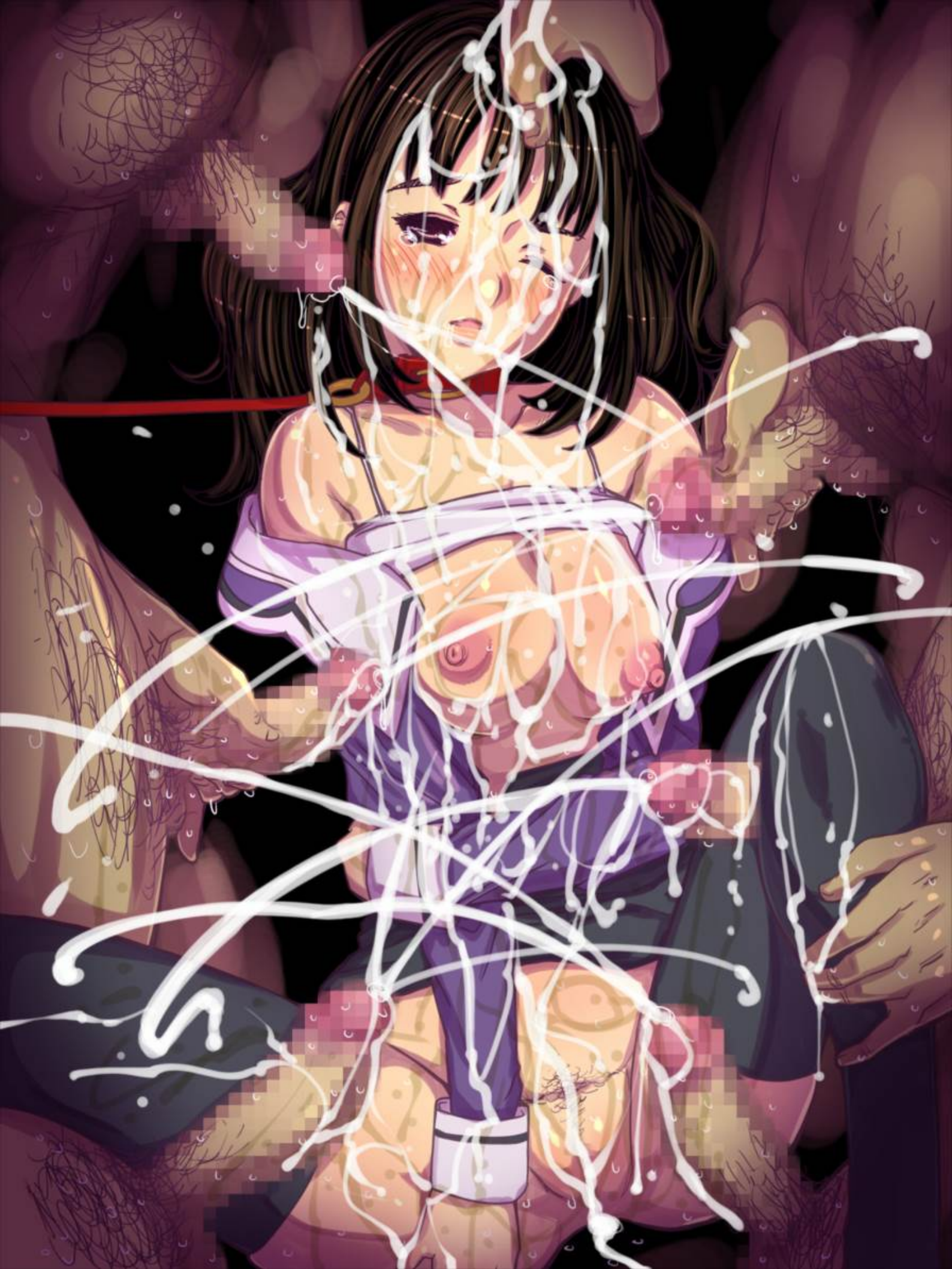
何が起きるのかその意味もよく分からぬまま、勃起したペニスを体に押し付けられたり、口にあてがわれたり、自分が性の玩具にされている事実だけをただ見つめている。

「ああっでそう、伊織、でるっでるでるでる！」

「おれもいくう」 「ほら、見る、イクとこみてるッ！」

「えっ？えっ？イク？いくってなにが・・・あッ！！！」







「ああッ！あああ！すげえでるう！イクウ！」

「ウッ！ウッ！くわえろよっ！おああ！」 「あああ～！でるでるでるうう」

「いやっ！いやあ！臭いッ！や、やめて……！」

ペニスからあふれ出る精液。すごい勢いで噴出す精液が、容赦なく伊織のカラダ、制服、顔にかかる。男達は息を荒げて、代わる代わる発射した。

「やっ！やめてっ！制服がッ！ああ！いや！」

首輪に掛けられた紐を引かれ、ペニスを眼前に突き出される。勢いよくペニスを扱くその様は、意味が全く分からない行為だったが男のほうけた表情からそれが快樂で溢れた行為だという事は理解できた。

グラビアの仕事や、演劇部の練習中に注がれる男達の視線……  
なにか妙な熱をもって、伊織の中を貫こうとするかのような、あの淫猥な視線の意味……

それはこうやって快樂の餌にするための視線だったのだ。  
否応なく理解させられた瞬間、グラビア雑誌で全国にばら撒かれた葦月伊織のいやらしいポーズや写真を見て、日本中の男達が汚らわしい事を想像している事も理解し、伊織は強烈な眩暈を覚えていた。

「ウソ……うそでしょ……いやっ……いやああ……ああああッ！」

「ウッ！」

臭くしぶにがい汁が、勢い欲顔に打ち出される。  
汚されている……男達の汚い性欲で、自分は今汚されていると思い知る。





おーん...  
おーん...  
おーん...

非...  
非...  
非...

ズ...  
ズ...  
ズ...

や...  
や...  
や...

顔...  
顔...  
顔...

ん...  
ん...  
ん...

非...  
非...  
非...

お...  
お...  
お...

ん...  
ん...  
ん...

ん...  
ん...  
ん...

ん...  
ん...  
ん...

ん...  
ん...  
ん...

ん...  
ん...  
ん...

ん...  
ん...  
ん...



「いいねえ、そういう感情、女優には一番大事な経験だからねえ ウヘッ」

「精液まみれになってもあまりビビらないねえ～  
それともビビり過ぎて固まってるだけかな？ぐへへへ」

ニヤつく男の口の中から、醜悪な湿気を纏った笑い声が漏れる。

「事務所からは処女って聞いてるんだけどさ、まだ、経験無いんだよね？  
ウソついても、これからバレることだから正直にこたえなさいよ？」

「ひッ……は、はいッ……」

犯される、レイプされる、醜い男達に、無理矢理奪われるんだ……  
恐怖心は肥大して、喉がからからに渴く中、やっと小さく頷く。

「フン、嘘はついてないみたいだな……ディレクターがね、君が処女なら、  
一晩相手をするだけで次の連続ドラマの主演に抜擢しても良いってさ」

恐怖でこわばる中、枕営業を求められてることをなんとか理解する。  
いや、求められてるのではなく、これは抗うことが出来ない契約だった。

今は犯されずに済む……その安堵が、精液まみれに汚されたことを  
いくらかは慰めていた。しかし、伊織は女優としての仕事を得る為に  
自分の体を捧げなければならない苦悩に、ガクガク震えている。

「一次面接は合格だよ、すごくいい表情だった  
さあ、制服はこっちでクリーニングしてあげるから、脱いで……」

男の太った腕に引かれて、伊織は思っていた。女優と言う誇り高さを得るために  
捧げられた獲物、欲望の餌食なのだ。

醜く太った豚達の、餌に過ぎないのだと……

END

SS by 辻善

























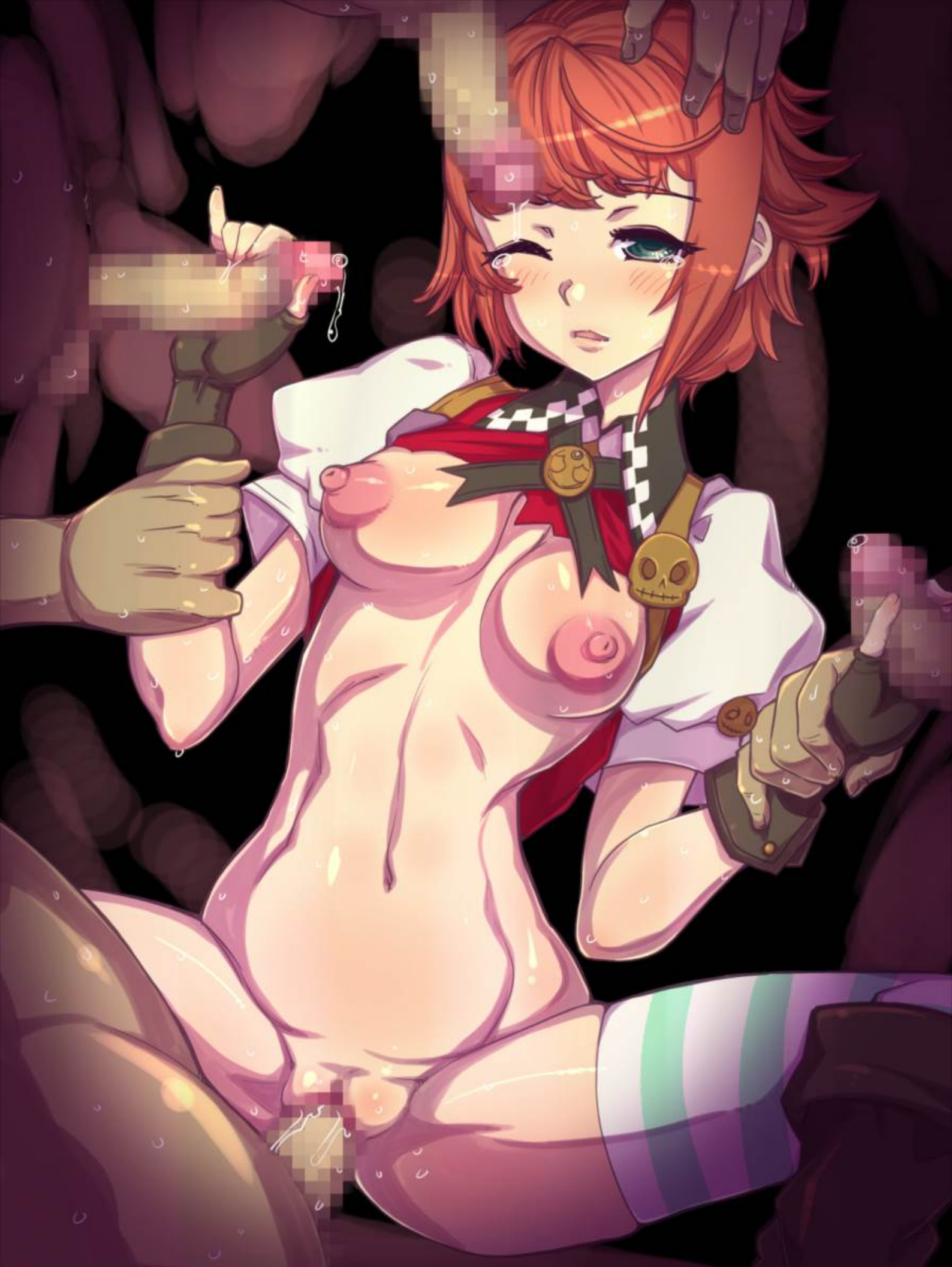




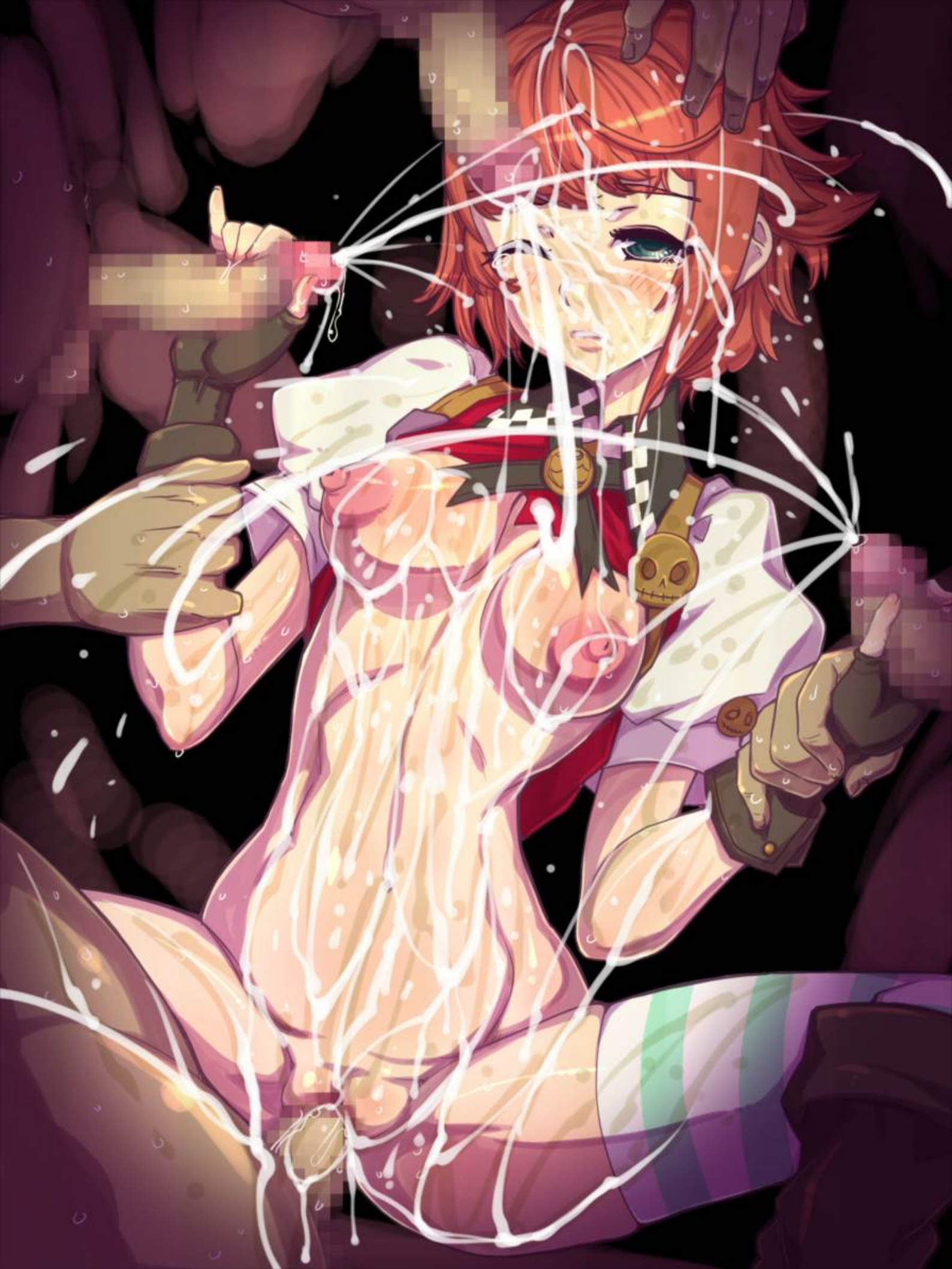








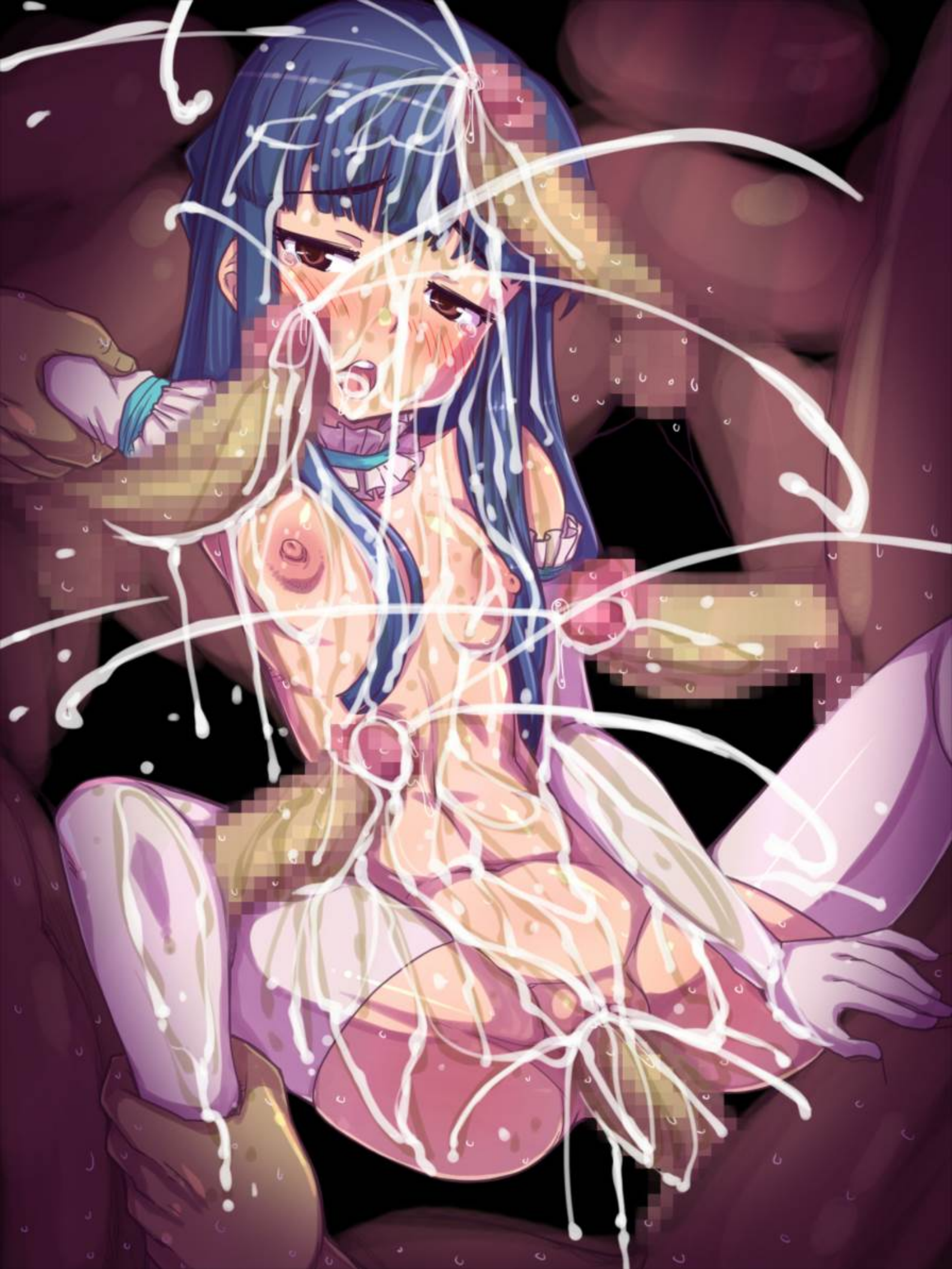








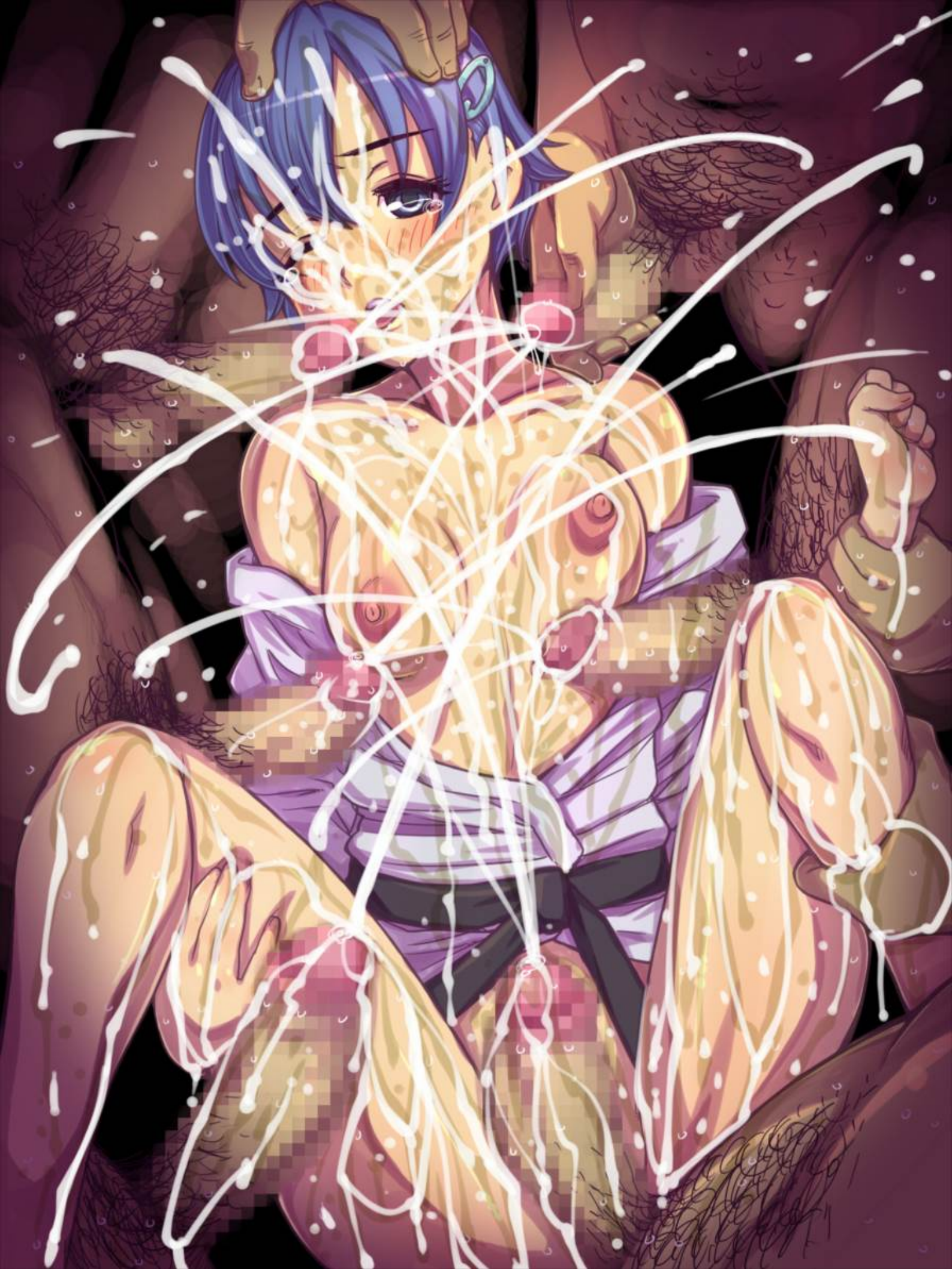
















# あとがき

つじ町落書きナマ放送Season7エロ絵100枚まとめましたをお買い上げ誠にありがとうございます！放送も4年くらいになり、エロ絵も700枚を越えました。心折れずに続けてこれたのも、お買い上げくださった皆様と放送を見てくださいる視聴者様とエロいキャラを次々に世に送り出してくださいるクリエイターの皆様のおかげでございます！本当にありがとうございました！

練習もかねての放送ですし、しゃべるのが本職じゃないのでクッソ寂しい配信ですが、ひやかしにきて頂けると大変うれしいので、金曜夜九時は是非落書きナマ放送を見に来てくださあ！

それでは配信でお会いしましょう！

辻善



JD

東條

オールカラーコミック  
200円(税別)

スピリチュアルボディ  
イキまくり大乱交!

うちの大学さあ、  
スピリチュアル部ってあんじゃん？  
占い部から派生したただのヤリサーなんだけど  
そこに元制服アイドルの子が入ってきてさあ……  
この子が、マジすげーんだわ……！





最新  
激太  
くっ  
東條  
さん  
カ  
た  
殺  
て  
き  
た

今NYではやってる(?)  
オナニーダイエット(!?)で  
紅白出場元制服アイドルが  
ビクンビクンイクツ!  
東條さんは果たして痩せるのか?  
どエロアニメーションで  
2016年1月末発売予定! 殺ってきた